

解題

文鏡祕府論

六卷

釋 空 海 著

此書は、我邦に於ける詩文話の最古なるものにして、書中概ね四聲を論じ八病を擧げ、或は格式を論じ、或は體裁を辯ず、我邦韻鏡の學、實に此に起れり、弘法大師嘗て嵯峨帝の間に答へて、天_平子_上聖_去哲_入入と奏せしが如き、言々皆韻に協はざるものなし、願ふにその入唐の時に當りて、名公鉅卿より直ちに傳授を得しものならん、市川寬齋の半江暇筆に曰く、唐人の詩論、久く專書なし、其の數、叢籍に見はるゝも、亦僅々晨星の如し、獨我が大同中に、釋の空海、唐に遊學し、崔融の新唐詩格、王昌齡の詩格、元統の髓腦、皎然の詩議、等の書を獲て歸る、後ち文鏡祕府論六卷を著作し、唐人の卮言盡く其の中に在り、是の編一たび世に出で、唐代作者の祕奧發露せられ、殆んど遺す所なし、洵に雲霧を披きて青天を視るの概あり、實に文林の奇籍、學海の祕錄と謂ふべし、卷を分つこと六、天、地、東、南、西、北の六字を以て符號とし、一卷二卷といはず、其の自序に、謂ふ配卷軸於六合、

歷不朽於兩曜、名曰「文鏡秘府論」と、著作の主旨も亦推すべし、編中に引く所の詩句、往々全唐詩に載せざるものあり、市川寛齋の全唐詩逸、皆之を收載せり、是れ亦入唐の日に見し所の各家の集、今の本と異なるものあるなり。

此書、舊本誤謬極めて多く、往々讀むべからざる所あり、今殿に校訂を加へ、文選及び唐代諸家の詩句を引けるものは、一々之を原書に參し、其誤れるものは之を正し、その闕けたるものは之を補ひ、其の兩可にして、適從する所を知らざるものは、姑く舊文を存して、異文をその下に注す、舊本、正文の旁に異文を錄せるものは、今悉く之をその句下に注せり、更に帝室の御藏に係る高山寺舊藏の古寫本原、卷子本、保延四年戊午四、月二日、移聖學の奥書あり、を借りて之を校し、一々その異同を注せり、尙又、山田永年氏の活字印行に係る文筆、眼心抄をも參考せり、即ち抄と書せるものは、是れなり、凡そ新に注するものは、必ず一小圈を施し、以て原注に別てり、但し此書校了の後、更に異文あるを發見するものは、之を欄外に掲ぐ、其の語繁にして欄外に收むる能はざるものは、校補として卷末に載せたり、斯く校訂に意を用ふれども、本文の意味不明の爲めに翻譯を誤れるもの多しと信ず、讀者幸に

之を指摘せらるれば幸甚。

左に文筆眼心抄の小序を録し參觀に資す。

余宗□□□□□諸格式等撰文鏡祕府論六卷雖要而又玄而披
 誦稍難記今更抄其要含口上者爲一軸握鏡可謂文之眼筆之心即以
 文筆眼心爲名文約義廣功省道深可畏後生寫之誦之豈唯立身成名
 乎成乃人傑國寶不異拾芥于時弘仁十一年中夏之節也

文鏡祕府論目次 舊本目次なし、今之を補ふ。

天卷

調四聲譜	一六
調聲	六
詩章中用聲法式	一三
七種韻	一八
四聲論	二一
地卷	
論體勢等	三三
十七勢	三三
十四例	四一
十體	四五
六義	四八
八階	五〇
六志	五四
九意	五九
東卷	

南卷

論對	七七
二十九種對	七八
筆札七種言句例	一〇二
論文意	一〇七
論體	一三一
定位	一三六
集論	一四三
西卷	
論病	一五九
文二十八種病	一六〇
文筆十病得失	一九四
北卷	
論對屬	二〇七
帝德錄	二一八

目次畢

文鏡祕府論并序 天

金剛峯寺禪念沙門 遍照金剛撰

夫大仙利物、名教爲基、君子濟時、文章是本也。故能空中塵中開、本有之字、龜上龍上演、自然之文、至如觀時變於三曜、察化成於九州、金玉笙簧爛其文、而撫黔首、郁乎煥乎燦、其章以馭蒼生、然則一爲名始、文則教源、以名教爲宗、則文章爲紀綱之要也。世間出世誰能遺此乎、故經說阿毘跋致菩薩必須先解文章、孔宣有言、小子何莫學、夫詩、詩可以興、可以觀、邇之事父、遠之事君、人而不爲、周南邵南、其猶正牆面而立也、是知文章之義

夫れ大仙の物を利する、名教を基と爲す、君子の時を濟ふ、文章は是れ本なり、故に能く空中塵中に本有の字を開き、龜上龍上に自然の文を演ぶ、時變を三曜に觀、化成を九州に察するが如きに至りては、金玉笙簧、其文を爛して黔首を撫で、郁乎たり煥乎たり、其の章を燦にして以て蒼生を馭む、然ば則ち一は名の始めたり、文は則ち教の源なり、名教を以て宗と爲せば、則ち文章は紀綱の要たるなり、世間出世、誰か能く此を遺てんや、故に經に阿毘跋致菩薩、必ず須く文章を解すべしと説く、孔宣言へるあり、小子何ぞ夫の詩を學ぶ莫き、詩は以て興す可く、以て觀る可し、邇くは父に事へ、遠くは君に事ふ、人として周南邵南を爲ばざれば、其れ猶ほ正しく牆に面して立てるがごときなりと、是に知る文章の義大なるかな、遠いかな、文は、五音奪はず、五彩所を得たるを以て名を立

大哉遠哉、文以五音不奪、五彩得所、立名、章因、事理俱明、文義不昧、樹說、因文詮名、唱名得義、名義已顯、以覺未悟、三教於是分鑿、五乘於是並轍、於焉釋經妙而難入、李篇玄而寡和、桑藉近而爭唱、游夏得聞之日、屈宋作賦之時、兩漢辭宗、三國文伯、體韻心傳、音律口授、沉侯劉善之後、王岐崔元之前、盛談四聲、爭吐病犯、黃卷溢篋、紺帙滿車、貧而樂道者、望絕訪寫、童而好學者、取決無由、○古寫本同作貧道幼就表舅、頗學藻麗、長入西秦、粗聽餘論、雖然志篤禪默、不屑此事、爰有一多後生、扣閑寂於文園、撞詞花乎詩圃、○古寫本同作、又花字作華、後假之、音響難默、披卷函杖、即閱諸家格式等、勘彼同異、卷軸雖多、要樞則少、名異

つ、章は、事理俱に明にして、文義味からざるに因て號を樹つ、文に因て名を詮し、名を唱へて義を得たり、名義已に顯にして、以て未悟を覺し、三教是に於て鑿を分ち、五乘是に於て轍を並ぶ、於焉に釋經は妙にして入り難し、李篇は玄にして和すること寡し、桑藉近くして唱を争ひ、遊夏聞を得るの日、屈宋賦を作るの時、兩漢の辭宗、三國の文伯、體韻心に傳へ、音律口づから授く、沉侯劉善の後、王岐崔元の前、盛に四聲を談じ、争ふて病犯を吐く、黃卷は篋に溢れ、紺帙は車に滿てり、貧くして而も道を楽しむ者は、望、訪寫に絶へ、童にして學を好む者は、決を取るに由なし、貧道幼にして、表舅に就いて、頗、藻麗を學ぶ、長じて西秦に入りて、粗、餘論を聽く、然りと雖、志、禪默に篤くして、此事を屑とせず、爰に一多の後生あり、閑寂を文園に扣き、詞花を詩圃に撞る、音響默し難くして、卷を函杖に披き、即ち諸家の格式等を閲みして、彼の同異を勘するに、卷軸多しと雖、要樞は則ち少し、名異に義同じ繁穢尤も甚し、余が癖癢し難くして、即ち刀筆を事とす其の重複を削りて、其の單號を存す、總べて一十五種の類あり、謂ふ聲譜調聲八種、韻四聲論十七勢、十四例、六義十體、八階、六志、二十九種對文、三十種病累、十種疾病論

義同繁穠尤甚、余辨難察、即事刀筆、削其重複、存其單號、總有一十五種類、謂聲譜、調聲、八種韻、〇八、七四聲論、十七勢、十四例、六義、十體、八階、六志、二十九種對文、三十種病累、〇三十、二十八之屬、十種疾論、文意論、舊本文誤、レ大、今正、對屬等是也、配卷軸於六合、懸不朽於兩曜、名曰文鏡秘府論、庶緇素好事之人、山野文會之士、不尋千里、蛇珠自得、不煩旁搜、彫龍可期。

調四聲譜 調聲聲〇古寫本不レ重、用聲法聖字宜、節二、生一、
式 八種韻〇八、七 四聲論

〇調四聲譜 諸家調四聲譜具、例如左、

平上去入配四方。〇今略、
圖致一、

文鏡秘府論天卷

文意論對屬等、是れたり、卷軸を六合に配して、不朽を兩曜に懸けたり、名けて文鏡秘府論と曰ふ、庶くは緇素好事の人、山野文會の士、千里を尋ねずして、蛇珠自ら得、旁搜を煩はさずして、彫龍期す可し。

四聲を調する譜 調聲 聲を用ふる法式 八種の韻
四聲の論

〇四聲を調する譜 諸家に四聲を調する譜具はる、例、左の如し。

平上去入は四方に配す

東方平聲平伊病別○文筆

南方上聲常上尙杓

西方去聲祛慤去剝

北方入聲主任入

凡四字一紐、或六字總歸一紐紐女九切、結也東也、

皇晃璜鑊、戈果過、滂旁傍薄、婆潑緞、

光廣琇郭、禾禍和、荒恍恍霍、咏火貨、

上三字下三字紐屬中央一字、是故名

爲總歸一入、

四聲紐字配爲雙聲疊韻如後、

郎朗浪落、黎禮麗掇、剛剛鋼各、筭併計結、

羊養恙藥、夷以異逸、鄉響向諶、奚筌唾纈、

良兩亮略、離麗罽栗、張長悵著、知御智窒、

凡四聲堅讀爲紐、橫讀爲韻、亦當行下四

字配、上四字、卽爲雙聲、若解此法、卽解反

音法、反音法有二種、一紐聲反音、二雙聲

東方平聲平伊病別

南方上聲常上尙杓

西方去聲祛慤去剝

北方入聲主任入

凡四字一紐、或六字、總べて一紐に歸す、紐は女九の切、結なり、東なり、

皇晃璜鑊、戈果過、滂旁傍薄、婆潑緞、

光廣琇郭、禾禍和、荒恍恍霍、咏火貨、

上の三字下の三字の紐は、中央の一字に屬す、是の故に、名づけて總歸一入と爲す。

四聲の紐の字は、配して雙聲疊韻たること後の如し。

郎朗浪落、黎禮麗掇、剛剛鋼各

筭併計結、羊養恙藥、夷以異逸

鄉響向諶、奚筌唾纈、良兩亮略

離麗罽栗、張長悵著、知御智窒

凡そ四聲、堅に讀めば紐と爲し、横に讀めば韻と爲す、亦た當行の下の四字は上の四字に配して、卽ち雙聲と爲す、若し此の法を解すれば、卽ち反音の法を解す、反

○文筆
心抄、伊作、
果、禍、

○抄寫作

反音、一切反音有此法也。

綺琴良首書林

欽伎柳筋深慮

釋曰、堅讀二字、互相反也、傍讀轉氣爲雙

聲、結角讀之爲疊韻、曰、綺琴、云、欽伎、互相

反也、綺、欽、琴、伎、兩雙聲、欽、琴、綺、伎、二疊韻、

上譜則氣類均調、下正則宮商韻切、持、綱

舉、目、庶類同然、崔氏曰、傍、紐者、已上三字、无異本、

風小 月脛 奇今 精酉

表豐 外厥 琴羈 酒盈

紐聲雙聲者已上五字

无異本

土 煙

天 隴

文鏡秘府論天卷

音の法に、二種あり、一は紐聲の反音、二は雙聲の反音、一切の反音に此の法あるなり。

綺琴良首書林

欽伎柳筋深慮

釋に曰く、堅に二字を讀めば、互に相反するなり、傍讀して氣を轉ずるを雙聲と爲す、角に結びて之れを讀む

を疊韻と爲す、綺琴と曰ひ、欽伎と云ふ、互に相反する

なり、琴伎は、兩つながら雙聲、欽琴綺伎は二つながら疊韻、上譜ふときは則ち氣類均しく調ふ、下正しき

ときは則ち宮商韻切なり、綱を保持して目を舉ぐ、庶類

同じく然り、崔氏曰く、傍、紐者、已上三字、異本に无し

風小 月脛 奇今 精酉

表豐 外厥 琴羈 酒盈

紐聲の雙聲者(已上五字、異本に无し)

土 煙

天 隴

五

右已前四字、縦讀爲反語、横讀是雙聲、錯讀爲疊韻、何者土煙天陽是反語、天土烟陽是雙聲、天烟土陽是疊韻、乃一天字而得雙聲疊韻、略舉一隅而示、餘皆效此、

○調聲

或曰、凡四十字詩、十字一管、卽生其意、頭邊二十字一管、亦得、六十七百字詩、二十字一管、卽生其意、語不用、合帖、須直道、天真、宛媚爲上、且須識一切題目義、最要立文、多用其意、須令左穿右穴、不可拘檢、作語不得、辛苦須、勸理其道、格格、意也、意高爲三之格、高、意下、爲三之下格、律調其言、言无相妨、以字輕重清濁、問之、須穩、至如有輕重者、有輕中重重中輕、當韻卽見、且莊字全輕、霜字輕中重、瘡字重中輕、淋字全

右已前の四字、縦に讀めば反語と爲り、横に讀めば是れ雙聲なり、錯へて讀めば疊韻と爲る、何んとなれば、土煙天陽は是れ反語、天土烟陽は是れ雙聲、天烟土陽は是れ疊韻、乃ち一の天の字にして而して雙聲疊韻を得、略して一隅を擧げて示す、餘は皆此れに效へ、

○調聲

或ひと曰く、凡そ四十字の詩は、十字一管にして卽ち其の意を生ず、頭邊の十字一管して亦得たり、六十七百字の詩は、二十字一管にして卽ち其の意を生ず、語とは合帖することを用ひず、須らく直に天真を道ひて、宛媚を上と爲すべし、且つ須らく一切題目の義を識るべし、最要に文を立て、多く其の意を用ふ、須らく左穿右穴して拘檢すべからざらしむべし、語を作ること、辛苦なるを得ず、須らく其の道格を勸進すべし、(格は意なり、意の高き、之れを格の高きと爲す、意の下き、之れを下格と爲す)律は其の言を調ふ、實相ひ妨くること无かれ、字の輕重清濁を以て、之れを問て、須らく穩にすべし、輕重有る者の、輕中の重、重中の輕有るが如きに至りては、韻に當て卽ち見よ、且く莊の字は全く輕く、霜の字は輕

重、如清字全輕、青字全濁、詩上句第二字重中輕、不與下句第二字同聲爲一管、上去入聲一管、上句平聲、下句上去入、上句上去入、下句平聲、以次平聲、以次又上去入、以次上去入、以次又平聲、如此輪廻用之、宜至於尾、兩絃管上去入相近、是詩律也、五言平頭正律勢尖頭。

皇甫冉詩曰、五言

中司龍節貴、上客虎符新

地控吳襟帶、戈光漢縉紳

泛舟應度臘、入境便行春

何處歌來暮、長江建鄴人

又錢起獻歲歸山詩曰、五言

欲知禹谷好、久別與春還

文鏡秘府論天卷

中の重擔の字は重中の輕、林の字は全く重し、清の字の如きは全く輕し、青の字は全く濁れり、詩の上句の第二字、重中の輕ならば、下句の第二字と同聲にして一管と爲さざれば、上去入の聲ならば一管す、上句平聲ならば、下句上去入なり、上句上去入ならば、下句平聲ならん、以次平聲ならば、以次又た上去入ならん、以次又た平聲ならん、此くの如く輪廻して之れを用ひて、宜しく尾に至るべし、兩絃管に、上去入相近し、是れ詩の律なり、五言の平頭律勢尖頭を正くす。

皇甫冉の詩に曰く(五言)

中司龍節貴し、上客虎符新なり、地は吳の襟帶を

控き、戈は漢の縉紳を光す、舟を泛べて應に臘を

度るべし、境に入つて便ち春に行く、何の處にか來暮

を歌ふ、長江建鄴の人と、

又錢起の獻歲に山に歸る詩に曰く(五言)

禹谷の好きを知らんと欲す、久しく別れて春と還る、

鶯暖初歸樹、雲晴卻戀山、
石田耕種小、野客性情閑、
求仲時應見、殘陽且掩關、

又五言絕句詩曰、

胡風迎馬首、漢月送娥眉、
久成人將老、長征馬不肥、

又崔署試得明堂火珠詩曰、

正位開重屋、凌空出火珠、
夜來雙月滿、曙後一星孤、

天淨光難滅、雲生望欲無、

終期聖明代、國寶在名都、

又陳閔罷官後卻歸舊居詩曰、

不歸江畔久、舊業已凋殘、
露草蟲絲濕、湖泥鳥跡乾、

鶯暖にして初て樹に歸り、雲晴れて卻つて山を戀ふ、
石田に耕種小に、野客性情閑なり、求仲時に應に見
ゆべし、殘陽に且た關を掩ふ。

又五言絶句の詩に曰く

胡風は馬首を迎へ、漢月は娥眉を送る、久しく成し
て人將に老いんとす、長征して馬肥えず。

又崔署が試に明堂の火珠を得たる詩に曰く

位を正うして重屋を開く、空を凌いで火珠を出だす、
夜來雙月滿てり、曙後に一星孤なり、天淨うして光

滅え難く、雲生して望み無からんと欲す、終に期す

聖明の代、國寶名都に在ることを。

又陳閔が官を罷めて後に、卻て舊居に歸る詩に曰

江畔に歸らざること久し、舊業已に凋殘せり、露草
に蟲絲濕ふ、湖泥に鳥跡乾けり、山を買ふて客舍を

買山開客舍、選竹作魚竿、

何必勞州縣、驅馳效一官、

齊梁調詩 張謂題故人別業詩曰、五言

平子歸田處、園林接汝濱、

落花開戶入、啼鳥隔窓聞、

池淨流春水、山明斂暮雲、

晝遊仍不厭、乘月夜尋君、

何遜傷徐主簿詩曰、五言

世上逸群士、人間徹總賢、

畢池論賞訖、蔣逕篤周旋、

又曰

一旦辭東序、千秋送北邙、

客簾雖有樂、鄰笛遂還傷、

又曰

文鏡秘府論天卷

開く、竹を選みて魚竿を作る、何ぞ必ずしも州縣に勞して、驅馳して一官に效さむ、

齊梁の調の詩 張謂が、故人の別業に題する詩に曰く(五言)

平子田に歸る處、園林汝濱に接せり、落花戸を開いて入り、啼鳥窓を隔て、聞ゆ、池淨くして春水を流す、山明にして暮雲を斂む、晝遊仍は厭かず、月に乘じて夜、君を尋ぬ、

何遜が徐主簿を傷む詩に曰く(五言)

世上逸群の士、人間總べて賢なるを徹す、畢池に賞詒を論ず、蔣逕周旋を篤くす、

又曰く

一旦東序を辭し、千秋北邙に送らる、客簾は樂み有りとも雖も、鄰笛は遂に還て傷む、

又曰く

提琴就阮籍、載酒覓揚雄、

宜荷行罩水、斜柳細牽風、

七言尖頭律、皇甫冉詩曰、

閑看秋水心無染、高臥寒林手自栽、

廬阜高僧留偈別、茅山道士寄書來、

燕知社日辭巢去、菊爲重陽冒雨開、

殘薄何時稱獻納、臨岐終日自遲迴、

又曰、私云、錢起之詩也、

自哂鄙夫多野性、貧居數畝半臨瀉、

溪雲帶雨來茅洞、山鶻將雛上藥欄、

仙籟滿牀閑不厭、音符在篋老羞看、

更怜童子宜春服、

○本集
音作陰、
花裏尋師到杏壇、

元氏曰、聲有五聲、角徵宮商羽也、分於文字

琴を提げて阮籍に就く、酒を載せて揚雄を覓む、宜荷は行いて水を罩め、斜柳は細くして風に牽かる。

七言尖頭律 皇甫冉の詩に曰く

閑に秋水を看て心に染むること無し、寒林に高臥して手自ら栽う、廬阜の高僧偈を留めて別る、茅山の道士書を寄せ來る、燕は社日を知つて巢を辭して去り、菊は重陽の爲に雨を冒して開く、殘薄何んの時か獻納と稱せられん、岐に臨んで終日自ら遲迴す。

又曰く私に云ふ、錢起の詩なり

自ら哂ふ鄙夫の野性多きを、貧居數畝半は瀉に臨めり、溪雲雨を帯びて茅洞に來る、山鶻雛を將ゐて藥欄に上る、仙籟牀に満ちて閑にして厭ばず、音符篋に在り老いて看るを羞づ、更に怜む童子の春服に宜しきを、花裏に師を尋ねて杏壇に到る。

元氏曰く、聲に五聲有り、角徵宮商羽なり、文字の四聲を

四聲、平上去入也。宮商爲平聲、徵爲上聲、羽爲去聲、角爲入聲。故沈隱侯論云、欲使宮徵相變、低昂殊節、若前有浮聲、則後須切響、一簡之內、音韻盡殊、兩句之中、輕重悉異、妙達此旨、始可言文、固知調聲之義、其爲大矣、調聲之術、其例有三、一曰換頭、二曰護腰、三曰相承。

一、換頭者、若競於蓬州野望詩曰

飄飄宕渠城、曠望蜀門隅

水共三巴遠、山隨八陣開、

橋形疑漢接、石勢似烟廻、

欲下他鄉淚、猿聲幾處催、

此篇第一句頭兩字平、次句頭兩字去上入、次句頭兩字去上入、次句頭兩字平、次句頭

分てば、平上去入なり、宮商を平聲と爲し、徵を上聲と爲し、羽を去聲と爲し、角を入聲と爲す、故に沈隱侯の論に云ふ、宮徵をして、相變じて、低昂節を殊にせしめんことを欲す、若し前に浮聲あれば、則ち後に須らく切響なるべし、一簡の内、音韻盡く殊に、兩句の中、輕重悉く異なり、妙に此の旨に達すれば、始めて文を言ふべし、固に知る、調聲の義、其れ大なりと爲すを、調聲の術、其の例三あり、一に曰く換頭、二に曰く護腰、三に曰く相承、

一に換頭とは、若競の蓬州に於て野望する詩に曰く

飄飄宕渠の城、曠望す蜀門の隅、水は三巴と共に

遠く、山は八陣に隨つて開く、橋の形は漢に接する

かと疑はれ、石の勢は烟の廻るに似たり、他郷の涙

を下さんと欲す、猿聲幾處にか催す。

此の篇、第一句の頭の兩字は平、次句の頭の兩字は去上入、次句の頭の兩字去上入なれば、次句の頭の兩字は平、次句の頭の兩字又平、次句の頭の兩字去上入、次句の頭

兩字又平、次句頭兩字去上入、次句頭兩字又去上入、次句頭兩字又平、如此輪轉、自初以終篇、名爲變換頭、是最善也、若不可得、如此、則如篇首第二字是平、下句第二字是用去上入、次句第二字又用去上入、次句第二字又用平、如此輪轉終篇、唯換第二字、其第一字與下句第一字用平不妨、此亦名爲換頭、然不及變換、又不得句頭第一字是去上入、次句頭用去上入、則聲不調也、可不慎歟。

二、護腰者、腰謂五字之中第三字也、護者上句之腰、不耳、與下句之腰同聲、然同去上入、則不可用、平聲无妨也、庾信詩曰、

護言氣蓋代、晨起帳中歌、

氣是第三字、上句之腰也、帳亦第三字、是

の兩字又去上入、次句の頭の兩字又平、此の如く輪轉して、初よりして以て篇を終る、名づけて變換頭と爲す、是れ最善なり、若し此くの如くなるを得べからざれば、則ち篇首の第二字是れ平ならば、下句の第二字是れ去上入を用ひ、次句の第二字又去上入を用ひ、次句の第二字又平を用ふ、此くの如く輪轉して篇を終る、唯だ第二字を換ふ、其の第一字と下句の第一字とは、平を用ふるも妨げず、此れ亦た名づけて換頭と爲す、然れども、變換に及ばず、又、句頭の第一字是れ去上入、次句の頭に去上入を用ふるを得ず、則ち聲調はさるなり、慎まざる可けんや。

二、護腰とは、腰とは、五字の中の第三字を謂ふなり、護とは、上句の腰、宜しく下句の腰と同聲なるべからず、然れども、同じく去上入なるときは、則ち用ふべからず、平聲は妨げ無し、庾信の詩に曰くと、

誰か言ふ氣、代を蓋ふと、晨に起きて帳中に歌ふ、

氣は是れ第三字、上句の腰なり、帳も亦第三字、是れ下

下句之腰、此爲不調、宜謹其腰、慎勿如此、三、相承者、若上句五字之内、去上入字則多、而平聲極少者、則下句用三平承之、用三平之術、向上向、下二途、其歸道一也、三平向上承者、如謝康樂詩云、

溪壑斂暝色、雲霞收夕霏、

上句唯有溪一字是平、四字是去上入、故下句之上用雲霞收、三平承之、故曰上承也、三平向下承者、如王中書詩曰、

待君竟不至、秋雁雙雙飛、

上句唯有一字是平、四去上入、故下句末雙雙飛三平承之、故云三平向下承也、

○詩章中用聲法式

凡上一字爲一句、下二字爲一句、或上二

句之腰なり、此れを不調と爲す、宜しく其の腰を謹すべし、慎みて此くの如くにする可く勿れ、

三、相承とは、若し上句の五字の内、去上入の字則ち多くして、而して平聲極めて少き者は、則ち下句に三平を用ひて之を承く、三平を用ふるの術、上に向ひ下に向ふ二途、其の歸道一なり、三平上に向ひて承くる者は、謝康樂の詩に云ふが如く、

溪壑暝色を斂む、雲霞夕霏を收む、

上句唯だ溪の一字是れ平なるあり、四字是れ去上入、故に下句の上に、雲霞收を用ひて、三平之れを承く、故に上に承くと曰ふなり、三平下に向ひて承くとは、王中書の詩に曰ふが如く、

君を待つ竟に至らず、秋雁雙々飛ぶ、

上句唯だ一字の是れ平なるあり、四は去上入、故に下句の末に、雙々飛の三平にて之れを承く、故に三平下に向ひて承くと云ふなり、

○詩の章の中、聲を用ふる法式

凡そ上の一字を一句と爲し下の二字を一句と爲す、或

字爲一句、下一字爲一句、言三上二字爲一句、言二下三字爲一句、言五上四字爲一句、言六下二字爲一句、言七上四字爲一句、言六下三字爲一句、言七

三言一平聲、言七 鬱七曜、詔八神、轉金蓋。

二平聲、挑閭闔、度天津、紛上歇。

四言一平聲、寶運惟顯、世康禮博、

有穠辟儀、槐棘愷悌、

二平聲、凝金曉陸、紫玉山抽、

丹羽林發、願惟輕薄、

三平聲、高邁堯風、仁風遐聞、

皮鄉未群、

五言一平聲、九州不足步、目擊道存者、

二平聲、玄經滿狡室、綠水湧春波、

は上の二字を一句と爲し、下の一字を一句と爲す、(三言)上の二字を一句と爲し、下の三字を一句と爲す、(五言)上の四字を一句と爲し、下の二字を一句と爲す、(六言)上の四字を一句と爲し、下の三字を一句と爲す、(七言)

三言の一つ平聲のもの 七曜を驚す、八神に詔ぐ、金蓋を轉す。

二つの平聲のもの、閭闔を排す、天津を度る、紛として歇に上る。

四言の一つ平聲のもの、寶運惟れ顯る、世康く禮博し、穠たる辟儀有り、槐棘愷悌たり、

二つ平聲のもの、凝金陸を曉り、紫玉山に抽づ、丹羽林に發し、惟の輕薄を願る。

三つ平聲のもの、高く堯風に邁ぎ、仁風遐に聞く、皮鄉未だ群らず。

五言の一つ平聲のもの 九州歩むに足らず、目撃して道存する者。

二つ平聲のもの、玄經、狡室に滿ち、綠水春波を湧

○按、古
本作、狡

雨數斜騰斷、蒙縣關莊子、
永愜問津所、詠歌殊未已、
百行感所該、

三平聲、披書對明燭、蘭生半上階、
無論更漏緩、天命多贏仄、
終關九丹成、水濱衆滄來、
游雷揚遠聲、

四平聲、儒道推桓榮、非關心尙賢、
六言、二平聲、
沙頭白鶴自舞、次宿密縣花亭、
將士來迎道側、日月馳邁不停、
仰瞻梓柚葉青、八花沸躍神散、

三平聲、
客行感思無聊、停車向路不乘、

文體臨府論天卷

かす、雨數、斜騰に斷え、蒙縣莊子を關ぐ、永く津を問ふ所を愜づ、詠歌殊に未だ已まず、百行感な該る所。

三つ平聲のもの、書を披いて明燭に對す、蘭生じて半ば階に上る、論すること無れ更漏の緩きを、天命多く贏仄す、終に九丹の成るを關す、水濱衆滄來る、游雷遠聲を揚ぐ。

四つ平聲のもの、儒道は桓榮を推す、心に賢を尙ふに關するに非ず。

六言の二つ平聲のもの、關を合つて吹いて蜡賓を鑿す、沙頭の白鶴自ら舞ふ、次に密縣の花亭に宿す、士を將ゐて來つて道側に迎ふ、日月馳せ邁いて停らず、仰ぎ瞻る梓柚の葉の青きを、八花沸き躍つて神のごとく散す。

三つ平聲のもの、客行いて感思し聊きこと無し、車を停めて路に向ふて乗らず、奄忽として縦横益無し、

奄忽縱橫無益、
憂從中發愴愴、
不爲時子所顧、

洞口青松起風、
何不歸栖高觀、

四平聲

柴門半掩恆雲

蒸丹暫來巖下、

濛濛霖雨氣凝、

况又流飄他方、

南至焚陽停息、

何爲貪生自謫、

身爲灰土消爛、

五平聲

蓬萊方丈相通、

人生幾何多憂、

風起塵興冥冥、

登高臨河顧西、

七言二平聲

將軍一去出湖海、

信是薄命向誰陳、

井上雙桐未掩風、

嫁得作賦彈琴聲、

寒雁一一度遼水、

誰堪坐感憶裏扇、

洞口の青松風を起す、憂は中より發して愴々たり、何ぞ歸つて高觀に栖まざる、時に顧みられず。

四つ平聲のもの、丹を蒸して暫く巖下に来る、柴門半は掩ふて恆に雲あり、濛々として霖雨氣凝る、況や又他方に流飄するをや、南、焚陽に至つて停息す、何爲ぞ生を食つて自ら謫むる、身は灰土と爲つて消爛す。

五つ平聲のもの、蓬萊方丈相通す、人生幾何ぞ憂多き、風起り塵興つて冥々たり、高に登り河に臨んで西を顧る。

七言の二つ平聲のもの、將軍一たび去つて湖海を出づ、信に是れ薄命誰に向つて陳べん、井上の雙桐未だ風を掩はず、嫁し得ては賦を作つて琴を彈する聲、寒雁一々に遼水を度る、誰か堪へん坐ながら篋裏の扇に感ずるに。

三平聲

相抱長眠不願起

自有傾城蕩舟妾

燕宮美女舊出名

復娉無雙獨立人

二人拂鏡開朱幕

都護府裏無相識

倚北雲氣晝昏昏

自從將軍出細柳

左掖深闈行且亘

聊看玉房素女術

四平聲

秋鴻千百相伴至

曾舞纖腰入金谷

妾用丹霞持作衣

燕山去塞三千里

金門巧咲本如神

洛城秋風依竹進

玉釵長袖共留賓

唯見張女玄雲調

河畔青青唯見草

前期歲寒保一雙

五平聲

高樓昭曉連粉壁

可憐春日桃花敷

三つ平聲のもの、相抱いて長く眠つて起くること

を願はず、自ら城を傾け舟を蕩すの妾有り、燕宮の

美女舊より名を出だす、復た無雙獨立の人を娉す、

二人鏡を拂つて朱幕を開く、都護府の裏に相識無し

倚北の雲氣晝昏々たり、自ら將軍に従つて細柳を出

づ、左掖の深闈に行いて且た宜し、聊か看る玉房素

女の術。

四つ平聲のもの、秋鴻千百相伴ふて至る、曾て舞し

纖腰金谷に入る、妾は丹霞を用ひて持して衣を作る

燕山塞を去ること三千里、金門巧に笑ふて本より神

の如し、洛城の秋風竹に依つて進む、玉釵長袖共に

賓を留む、唯だ張女玄雲の調ふを見る、河畔青々唯

だ草を見る、前期す歳寒して一雙を保つことを。

五つ平聲のもの、高樓昭曉として粉壁を連ぬ、可憐

付時俱來堪見迎、鴛鴦多情上織機、
 雲歸沙幕偏能暗、還嗟團扇匣中秋、
 深入遶遶偏易平、將軍勦兵討遼川、
 初言度燕征玄苑、

六平聲

朝々愁向猶思牀、

桃花獻壽無極妍、

春山與雲盡如羅、

○七種韻

凡詩有連韻・疊韻・轉韻・疊連韻・擲韻・重字韻・
 同音韻

一、連韻者、第五字與第十字同音、故曰連韻、
 如湘東王詩曰、

解谷管新抽、淇園竹復脩、

作龍還萬水、爲馬向并州、

此上第五字是抽、第十字是脩、此爲佳

つて偏に能く暗し、還つて嗟く團扇匣中の秋、深入
 遶々として偏に平を易ふ、將軍兵を勦して遼川を討
 つ、初て言ふ、燕を度つて玄苑を証することを、

六つ平聲のもの、朝々愁向ふて猶牀を思ふ、桃花獻
 壽として極り無く妍なり、春山に雲を興して盡く羅
 の如し、

○七種韻

凡を詩に連韻・疊韻・轉韻・疊連韻・擲韻・重字韻・同音韻
 あり、

一、連韻とは、第五字と第十字と同音なり、故に連韻と曰
 ふ、湘東王の詩に曰へるが如し、解谷に管新に抽づ、淇
 園に竹復た脩し、龍と作つて萬水に還り、馬と爲つ
 て并州に向ふ、

此の上の第五字是れ抽、第十字是れ脩、此れを佳な

也。

二、疊韻者、詩曰、

看河水漠瀝、望野草蒼黃、

露停君子樹、霜宿女姓薑、

此爲美矣、

三、轉韻者詩曰

蘭生不當門、別是閑田草、

風被霜露欺、紅榮已先老、

繆接插花枝、結根君王池、

願無馨香美、叨沫清風吹、

餘芳若可佩、卒歲長相隨、

四、疊連韻者、第四第五、與第九第十字同韻、

故曰疊連韻、詩曰、

羈客意盤桓、流淚下闌干、

りと爲すなり。

二、疊韻とは詩に曰く、河を看るに水漠瀝たり、野を

望むに草が黄たり、露は君子の樹に停る、霜は女姓

の薑に宿す、此れを美と爲す。

三、轉韻とは詩に曰く、蘭生じて門に當らず、別には

閑田の草、風は霜露に欺かる、紅榮已に先づ老い

たり、繆つて插花の枝に接して、根を君王の池に結

ぶ、願るに馨香の美無し、沫を清風の吹くに叨る、

餘芳若し佩ぶ可くんば、歳を卒るまで長く相隨はん、

四、疊連韻とは第四第五と、第九第十字と韻を同じくす、

故に疊連韻と曰ふ、詩に曰く、羈客意盤桓、流淚下つ

て闌干、琴に對して簡樂すと雖ども、煩情仍ほ未だ

雖對琴鴈樂、煩情仍未歇、

此爲麗也、

五、擲韻者、詩云、

不知羞不敢留、

但好去莫相慮、

孤客驚百愁生、

飯蔬簞食樂道、

忘飢陋巷不疲、

此之謂也、又曰、

不知羞不肯留、

集麗城夜啼聲、

出長安過上蘭、

指楊都越江湖、

念邯鄲忘朝渙、

但好去莫相慮、

六、重字韻者、詩云、

望野草青青、

臨河水活活、

斜峯纒行舟、

曲浦浮積沫、

此爲善也、

七、同音韻者、所謂同音而字別也、詩曰、

歡せず、此れを麗と爲すなり、

五、擲韻とは、詩に云ふ、

羞むることを知らざれば敢て留らず、但だ好し去つ

て相應ること莫れ、孤客驚いて百愁生ず、飯蔬簞食

道を樂む、飢を陋巷に忘れて疲れず、此れを之れ謂

ふなり、又曰く、

羞むることを知らず留り肯せず、麗城に集り夜啼く

聲、長安より出でて上蘭を過ぐ、楊都を指して江湖

を越ゆ、邯鄲を念ひ朝渙を忘る、但だ好し去つて相

慮る莫れ、

六、重字韻とは、詩に云ふ、

野を望むに草青々たり、河に臨むに水活々たり、斜

峯に行舟を纒ぐ、曲浦に積沫を浮ぶ、此れを善と爲

すなり、

七、同音韻とは、開ゆる音と同じくして而して字は別な

今朝是何夕、良人誰難覩、

中心實恰愛、夜寐不安席、

此上第五字還是席、此無妨也、

○四聲論

論云、經案陸士衡文賦云、其爲物也多姿、其爲體也屢遷、其會意也尙巧、其遣言也貴妍、聲音聲之迭代、若五色之相宣、豐約之裁、俯仰之形、因宜適變、曲有微情、或言拙而喻巧、或理樸而辭輕、或襲故而彌新、或沿濁而更清、譬猶舞者赴節以投袂、歌者應絃而遺聲、文體周流、備於茲賦矣、陸公才高價重、絕世孤出、實辭人之龜鏡、固難得文名焉、至於四聲、條貫無聞焉、自爾李充之製翰林、褒貶古今、斟酌病利、乃作者之師表、摯虞之文章志、

り、詩に曰く、

今朝是れ何の夕ぞ、良人誰か觀難からむ、中心實に恰み愛す、夜寐ねて席を安せず、

此の上の第五字還是れ席なり、此れ妨げ無きなり、

四聲論

論に云ふ、經に陸士衡の文賦を案するに云ふ、其の物たるや姿多し、其の體たるや屢遷る、其の意を會するや巧を尙ぶ、其の言を遣るや妍を貴ぶ、音聲の迭に代るに豐びては、五色の相宜ぶるが若し、豐約の裁、俯仰の形、宜しきに因りて變に適ふ、曲に微情あり、或は言拙にして而して喻巧なり、或は理樸にして而して辭輕し、或は故に襲りて而して彌新なり、或は濁れるに沿りて而して更に清し、譬へば、猶ほ舞者の節に赴きて以て袂を投じ、歌ふ者の絃に應じて而して聲を遺るがごとしと、文體の周流、茲の賦に備れり、陸公才高く價重く、絶世孤出、實に辭人の龜鏡、固に得難きの文名なり、四聲に至りては條貫聞ゆること無し、爾るより李充の翰林を製する、古今を褒貶し、病利を斟酌す、乃ち作者の師表なり、摯虞の文章志、優劣を區別し、勝辭を編緝す、亦才人の苑圃なり、

區別優劣、編緝勝辭、亦才人之苑囿、其於輕重巧切之韻、低昂曲折之聲、竝闕之曾懷、未曾開口、縱復屈宋奮飛於南楚、揚馬馳騫於西蜀、或昇堂擅美、或入室稱奇、爭日月之光、竦凌雲之氣、敬通平子、分路揚鑣、武仲孟堅、同途競遠、曹植王粲、孔璋公幹之流、潘岳左思、士龍景陽之輩、自詩騷之后、晉宋已前、杞梓相望、良亦多矣、莫不揚藻敷華、文美名香、艷彩與錦肆爭花、發響共珠林合韻、然其聲調高下、未會當今、唇吻之間、何其滯歟、夫四聲者、無響不到、無言不攝、總括三才、苞籠萬象、劉滔云、雖復雷霆疾響、蟲鳥殊鳴、萬籟爭吹、八音遽奏、出口入耳、觸身動物、固無能越也、唯當形聲之外、言語道斷、此所不論、竟莫

其の輕重巧切の韻、低昂曲折の聲に於ては、竝に之れを胸懷に闔ちて、未だ曾て口を開かず、縱ひ復た屈宋、南楚に奮飛し、揚馬、西蜀に馳騫し、或は堂に昇りて美を擅にし、或は室に入りて奇を稱し、日月の光を争ひ、凌雲の氣を竦げ、敬通平子、路を分ちて鑣を揚げ、武仲孟堅、途を同じくして遠きを競ふ、曹植王粲、孔璋公幹の流、潘岳左思、士龍、景陽の輩、詩騷の後、晉宋已前より、杞梓相望みて良に亦多し、藻を揚げ華を敷きて、文美に名香しからざる莫し、彩を闔ぐる事、錦肆と與にして花を争ひ、響を發すること、珠林と共にして韻を合せたり、然れども其の聲調の高下、未だ當今に會はず、唇吻の間、何ぞ其れ滯るや、夫れ四聲とは、響として到らざる無く、言として攝せざる無し、三才を總括し、萬象を苞籠す、劉滔云ふ、復た雷霆の疾響、蟲鳥の殊鳴、萬籟争て吹き、八音遽に奏すと雖も、口より出で、耳に入り、身に觸れて物を動かす、固に能く越ゆること無きなり、唯だ形聲の外に當りて、言語同斷なる、此れ論ぜざる所なり、竟に聞を終古に蔑にして、獨り季代に知られたり、亦悲むに足れり、師曠律を調べ、京房姓を改め、伯喈の變音を出し、公明の鳥語を察すと雖ども、此の聲に至りては、竟に先づ悟ること無

聞於終古、獨見知於季代、亦足悲夫。雖師曠
 鬪律、京房改姓、伯喈之出、變音、公明之察、鳥
 語、至於此聲、竟無先悟、且詩書禮樂、聖人遺
 旨、探賾索隱、亦未之前聞、宋末以來、始有四
 聲之目、沈氏乃著其譜論云、起自周顛、故沈
 氏宋書、謝靈運云、五色相宣、八音協暢、玄黃
 律呂、各適物宜、故使宮羽相變、低昂叶節、前
 有浮聲、則后有切響、一簡之內、音韻盡殊、兩
 句之中、輕重悉異、妙達此旨、始可言文、至於
 先士茂制、諷高歷賞、子建函谷之作、仲宣霸
 岸之篇、子荆零雨之章、正長朔風之句、竝宜
 舉胸懷、作傍經史、正以音律調韻、取高前式、
 劉滔亦云、得者闇與、理合失者莫、誠所由、唯
 知齟齬難安、未悟安之有術、若南國有佳人、

文鏡秘府論天卷

し、且つ詩書禮樂は、聖人の遺旨、賾を探り隱を索むると、
 亦未だ之れを前聞せず、宋の末より以來、始めて四聲の目
 あり、沈氏乃ち其の譜論を著して云ふ、周顛より起れり
 と、故に沈氏が宋書に、謝靈運云ふ、五色相宣べて、八音協
 暢し、玄黃律呂、各物宜に適へり、故に宮羽をして相變
 じ、低昂をして節に叶はしむ、前に浮聲有るときは、則ち
 後に切響有り、一簡の内に、音韻盡く殊なり、兩句の中に、
 輕重悉く異なり、妙に此旨に達すれば、始めて文を言ふ
 可し、先士の茂制、諷高歷賞に至りては、子建の函谷
 の作、仲宣の霸岸の篇、子荆の零雨の章、正長の朔風の句、
 竝に宜しく胸懷に擧げ、作、經史に傍ふべし、正に音律調
 韻を以て、高を前式に取る、劉滔亦云ふ、得者は闇に理と
 合ひ、失者は誠に由る所莫し、唯だ知る、齟齬安しと雖も、
 未だ安きの術有ることを悟らず、南國に佳人有り、夜半
 寐ぬること能はずといふが若き、豈に意を用ひて得る
 所ならんや、蕭子顯の齊書に云ふ、沈約謝朓王融、氣類相
 備を以て、文に宮商を用ふ、平上去入を四聲と爲す、世に
 呼びて永明體と爲す、然らば則ち蕭穎が永明元年は、即
 ち魏の高祖孝文皇帝の大和の六年なり、昔、永嘉の末に、
 天下分崩し、關河の地、文章殄滅せり、魏の照成道武の世、

夜半不能寐、豈用意所得哉。蕭子顯齊書云、沈約、謝朓、王融、以氣類相催、文用宮商、平上去入爲四聲、世呼爲永明體、然則蕭、顧、永明元年、卽魏高祖孝文皇帝大和之六年也、昔永嘉之末、天下分崩、關河之地、文章殄滅、魏照成道武之世、明元大武之時、經營四方、所未遑也、雖復網羅後民、獻納左右、○按、後疑俊、而文多古質、未營聲調耳、及大和任運、志在辭彩、上之化下、風俗俄移、故後魏文苑序云、高祖馭天、銳情文學、蓋以韻、頡、漁、徹、淹、跨、曹、丕、氣遠、韻高、豔藻、獨構、衣冠仰止、咸慕新風、律調頗殊、曲度遂改、辭罕淵源、言多胸練、古雕今有所未值、至於雅言麗則之奇、綺合繡聯之美、眇歷年歲、未聞獨得、既而陳郡袁翻、河內

明元大武の時、四方を經營して、未だ迄あらざる所なり、復た後民を網羅し、左右に獻納すと雖も、而して文に古質多し、未だ聲調を營まざるのみ、大和任運に及びて、志辭彩に在り、上の下を化する、風俗俄に移る、故に後魏の文苑の序に云ふ、高祖天を馭し、情を文學に鋭す、蓋し以て漁徹に韻頡し、曹丕に淹跨す、氣遠く韻高くして、豔藻獨構、衣冠仰止して、咸く新風を慕ふ、律調頗る殊にして、曲度遂に改まる、辭は淵源に罕にして、言は胸臆に多し、古を練し今を騷し、未だ値はざる所有り、雅言麗則の奇、綺合繡聯の美に至りては、眇に年歲を歴て、未だ獨得を聞かず、既にして陳郡の袁翻、河内の常景、晚に嚶絳に拔け、稍、其の風を革む、肅宗の御曆に及びて、文雅大に盛なり、孔子曰く、學ぶ者は牛毛の如く、成る者は麟州の如し、才の難きこと其れ然らずやと、此れよりの后、才子肩を比べて、聲韻抑揚し、文情婉麗たり、洛陽の下、吟詠群を成す、及び鄴中に宅せしより、辭人間、出で、風流弘雅なり、泉湧雲奔、動すれば宮商に合ふ、頡、金石に諧ふ者、蓋し千を以て數ふ、海内之れに比すること莫し、郁なるかな、煥乎たり、斯に於て盛なりと爲す、乃ち斐陽繩樞の士、綺繡執袴の眞、習俗已に久しくして、漸く以て性を成す、假

常景、晚故、疇類、稍革其風、及肅宗御曆、文雅大盛、孔子曰、學者如牛毛、成者如麟角、才難不其然乎、從此之后、才子比肩、聲韻抑揚、文情婉麗、洛陽之下、吟諷成群、及從宅、鄴中、辭人間出、風流弘雅、泉湧雲奔、動合宮商、韻諧金石者、蓋以千數、海內莫之比也、郁哉煥乎、於斯爲盛、乃甕牖繩樞之士、綺襦執袴之童、習俗已久、漸以成性、假使對賓談論、聽訟斷決、運筆吐辭、皆莫之犯、又吳人劉勰、著雕龍篇云、音有飛沈、響有雙疊、雙聲隔字、而每矻〇按、矻、昌、交、反、對、矻也、古寫本作レ行、疊韻離句、其必際、沈則響發、如斷、飛則聲颺、不還、竝鹿盧交往、逆鱗相批、逆其際會、響往響來、替其爲疾病、〇按、舊本疾作、亦文家之吃也、又云、聲盡妍媸、寄在吟

使ひ賓に對して談論し、訟を聽きて斷決すとも、筆を運し辭を吐く、皆之れを犯すこと莫し、又、吳人劉勰、雕龍篇を著して云ふ、音に飛沈有り、響に雙疊有り、雙聲は字を隔て、毎に矻べり、疊韻は句を離れて、其れ必ず際けり、沈は則響發して斷るが如く、飛は則聲颺りて還らず、竝に鹿盧交り往きて、逆鱗相批つ、其の際會に逆へば、則ち往響來替す、其れ疾病を爲さば、亦文家の吃なり、又云ふ、聲は妍媸に盡き、寄は吟詠に在り、滋味、下句に流れ、風力和韻に窮る、異音相愼む、之れを和と謂ひ、同聲相應す、之れを韻と謂ふ、韻氣一たび定れば、則ち餘聲遣り易し、和體抑揚す、故に遺響契ひ難しと、此論、理、優華に到りて、控引弘博、其の幽趣を計れば、以て間然すること無し、但だ恨くは章を連ね句を結ぶこと、時に滯阻多きを、謂ゆる能く之を言ふ者なり、未だ必ずしも能く行はざる者なり、潁川の鍾嶸の詩評を作る、次第を料簡して、其工拙を議す、乃ち謝朓の詩の末句に響多きを以て、降して中品と爲す、侏儒の一節、心有りと謂ふべきかな、又云ふ、但だ清濁をして流を同じくし、口吻をして調和せしめば、斯れを足れりと爲す、平上去入に至りては、余未だ溷濁すること能はざるを病む、嶸は徒に口吻の工を爲すことを

詠、滋味流於下句、風力窮於和韻、異音相愼、謂之和、同聲相應、謂之韻、韻氣一定、則餘聲易遠、和體抑揚、故遺響難契矣、此論理到、優華、控引弘博、計其幽趣、無以間然、但恨連章結句、時多澁阻、所謂能言之者也、未必能行者也、穎川鍾嶸之作詩評、料簡次第、議其工拙、乃以謝朓之詩末句多蹇、降爲中品、侏儒一節、可謂有心哉、又云、但使清濁同流、口吻調和、斯爲足矣、至於平上去入、余病未能、涇渭、燦徒見口吻之爲工、不知調和之有術、譬如刻木爲、爲搏、風遠颺、見其抑揚、天路、鸞、鸞、威、疑、羽、翻之行然、焉知王蕭之巧思也、四聲之體、調和此其効乎、除四聲已外、別求此道、其獨之荆者、而北魯燕、雖遇牧馬童子、

見て、調和の術有ることを知らず、譬へば、木を刻して藪と爲し、風に搏ちて遠く颺るが如し、其天路に抑揚し、鸞に鸞轟するを見て、威く羽翻の行然りと疑ふ、焉ぞ王蕭の巧思を知らん、四聲の體は、調和此れ其の效ならんか、四聲を除きて已外、別に此道を求めば、其れ獨り荆に之く者にして、魯燕を北にするがごとし、牧馬童子に遇ふと雖も、何を以てか鍾生の迷を解かんや、或ひと、復云、余未だ公を觀る能はざるを病む、此病、乃ち是れ膏肓の疾なり、縱使ひ華佗藥を集め、鷹鷲針を投ずとも、恐くは魂、岱宗にして終に起し難からんとを、嶸又稱す、昔、齊に王元長といふ者あり、嘗て余に謂ひて曰く、官商は二儀と俱に生行す、古の詩人之を用ふることを知らず、唯た范曄謝公、頗る之を識るのみと、今、范侯の讚論、謝公の賦表を讀むに、辭氣流靡にして、挂礙有ること罕なり、斯れ蓋し獨一時に悟りて、聲を知るの創首たり、洛陽の王斌五格四聲論を撰し、文辭鄭重にして、體例繁多なり、剗拆推研して、忽に別つこと能はず、魏の定州の刺史、臯思伯は、一代の偉人なり、沈氏の四聲譜は古典に依らず、妄に自ら穿鑿すと以爲へり、乃ち沈君の少時の文詠の聲を犯せる處を取りて、以て之を譜雜す、又云ふ、若し四聲を計

何以解鍾生之迷、或復云、余病未能觀公、此病乃是膏肓之疾、縱使華佗集藥、鵲投針、恐魂岱宗終難起也、噉又稱、昔齊有王元長者、嘗謂余曰、宮商與二儀俱生行、古詩人不知用之、唯范曄謝公頗識之耳、今讀范侯讚論謝公賦表、辭氣流靡、罕有挂礙、斯蓋獨悟於一時、爲知聲之創首也、洛陽王斌撰五格四聲論、文辭鄭重、體例繁多、割拆推研、忽不能別矣、魏定州刺史甄思伯、一代偉人、以爲沈氏四聲譜不依古典、妄自穿鑿、乃取沈君少時文詠犯聲處、以詰難之、又云、若計四聲爲紐、則天下衆聲無不入紐、萬聲萬紐、不可止爲四也、經以爲三王異禮、五帝殊樂、質文代變、損益隨時、豈得膠柱調瑟、守株伺兔者也、

りて紐と爲さば、則ち天下の衆聲、紐に入らずといふと無し、萬聲萬紐あり、止だ四と爲すべからざるなり、經に以て三王は禮を異にし、五帝は樂を殊にすと爲す、質文代り變し、損益時に隨ふ、豈に柱に膠し瑟を調し、株を守りて兔を伺ふとを得る者ならんや、古人言へるとあり、今を知りて古を知らざる、之れを盲聾と謂ひ、古を知りて今を知らざる、之れを陸沈と謂ふ、孔子曰く、故を温て新を知らば、以て師と爲るべしと、易に曰く、一闔一闔、之れを變と謂ひ、往來窮り無き、之れを道と謂ふと、甄公の此論、恐くは未だ變通を成さず、且つ夫れ平上去入は、四聲の總名なり、征收集は四聲の實稱なり、然らば則ち名は實を離れず、實は名に遠らず、名實州憑りて、理自ら然り、故に聲は物を逐て以て名を立て、紐は聲に因りて以て轉注す、萬聲萬紐、縦へば來言の如し、但だ四聲は、之を軌轡に譬ふ、誰か能く行くに軌に由らざらんや、縦ひ出で、九州を涉り、四海を巡遊すとも、誰か能く入るに戸に由らざらんや、四聲の總稱、義此に在り、經に數、江表人士の説を聞くに、梁王蕭衍、四聲を知らず、嘗て縱容として中領軍朱弁に謂ひて曰く、何者を名づけて四聲と爲すと、弁答へて曰く、天子萬福、即ち是れ四聲なりと、衍、弁

古人有言、知今不知古、謂之盲瞽、知古不知今、謂之陸沈、孔子曰、溫故而知新、可以爲師矣、易曰、一闔一闢、謂之變、往來無窮、謂之道、甄公此論、恐未成變通矣、且夫平上去入者、四聲之總名也、征政變者、四聲之實稱也、然則名不離實、實不違名、名實相憑、理自然矣、故聲者、逐物以立名、紐者、因聲以轉注、萬聲萬紐、縱如來言、但四聲者、譬之軌轍、誰能行不由軌乎、縱出涉九州、巡遊四海、誰能入不由戶也、四聲總括義在於此、經數聞、江表人士、說梁王蕭衍不知四聲、嘗縱容謂中領軍朱弁曰、何者名爲四聲、弁答曰、天子萬福、卽是四聲、衍謂弁、天子壽考、豈不是四聲也、以蕭主之博洽通識、而竟不能辨之、時人咸美、

に謂ふ天子壽考、豈に是れ四聲ならずやと、蕭主の博洽通識を以て而して竟に之を辨する能はず、時人咸に朱弁の能言を美めて、蕭主の悟らざるを歎せり、故に知る、心に通塞有り、一槩を以て論すべからざるを、今、公の文詠を尋ねるに、辭理觀るべし、但だ毎に籠網に觸れて迴避するを知らず、方に説く所を驗するに、憑虛に非ず、沈氏、甄公の論に答へて云ふ、昔、神農八卦を重ねて、純ら四象を立てずといふと無し、象は象ならずといふと無し、但だ能く詩を作るに、四聲の患无きことは、則ち四象に同じ、四象既に立ちて萬象生ず、四聲既に周くして、群聲類す、經典史籍、唯だ五聲有りて、四聲無し、然らば則ち四聲の用、何ぞ五聲を傷らん、五聲とは、宮商角徵羽なり、上下相應するときは、則ち樂聲和す、君臣民事物の五の者相得るときは、則ち國家治る、五言の詩を作る者、善く四聲を用ふるときは、則ち諷詠して而して流靡なり、能く八體に達するときは、則ち陸離として花潔なること明かなり、各、施す所有りて、相妨げ廢せず、昔、周孔の四

朱弁之能言、歎蕭主不悟、故知心有通塞、不可以一槩論也、今尋公文詠、辭理可觀、但每觸籠網、不知迴避、方驗所說非憑虛矣、沈氏答甄公論云、昔神農重八卦、无不純立四象、象无不象、但能作詩无四聲之患、則同諸四象、四象既立、萬象生焉、四聲既周、群聲類焉、經典史籍、唯有五聲、而無四聲、然則四聲之用、何傷五聲也、五聲者、宮商角徵羽、上下相應、則樂聲和矣、君臣民事物五者、相得則國家治矣、作五言詩者、善用四聲、則諷詠而流靡、能達八體、則陸離而花潔明、各有所施、不相妨、廣昔周孔、所以不論四聲者、正以春爲陽中、德澤不偏、即平聲之象、夏草木茂盛、炎熾如火、即上聲之象、秋霜凝木落、去根離本、即

聲を論ぜざりし所以は、正に春を以て陽中と爲す、德澤ること即ち平聲の象なり、夏は草木茂盛にして、炎熾な偏せず、火の如し、即ち上聲の象なり、秋は霜凝りて木落去り本を離る、即ち去聲の象なり、冬は天地閉藏し、萬物ち根を盡く收る、即ち入聲の象なり、其の四時の中に其の義有るべきを以ての故に之れを擲出せざるのみ、是を以て、中庸に云ふ、聖人も以て知らざる所有り、匹夫匹婦も相知る所有りといふは、斯れを之れ謂ふなり。

去聲之象、冬天地閉藏、萬物盡收、即入聲之象、以其四時之中合有其義、故不樹出之耳。
○按、調、韻、攝、字、方少切、表也。 是以中庸云、聖人有所以不

知、匹夫匹婦猶有所知焉、斯之謂也、
魏祕書常景爲、聲讚曰、

龍圖寫象、鳥跡摘光、辭溢流徵、

氣靡輕商、四聲發彩、八體含章、

浮景玉疾、○疾、充字異體、唐本作死、今從玉、寫本。妙響金鏘、

雖章句短局、而氣調清遠、故知變風俗下、豈虛也哉、齊僕射陽休之、嘗世文匠也、乃以音有楚夏、韻有訛切、辭人代用、今古不同、遂辨其尤相涉者、五十六韻、科以四聲、名曰韻略、制作之士咸取、則焉、後生晚學、所賴多矣、齊太子舍人李節、知音之士、撰音譜決疑、其序

魏の祕書常景、四聲の譜を爲りて曰く、

龍圖象を寫し、鳥跡光を摘ぶ、辭は流徵に溢れて、氣は輕商を靡す、四聲、彩を發し、八體、章を含む、浮景玉のごとく疾ち、妙響金のごとく鏘る。

章句短局なりと雖も、氣調清遠なり、故に知る變風俗下、豈に虚しからんや、齊の僕射陽休之は嘗世の文匠なり、乃ち音に楚夏あり、韻に訛切有るを以て、辭人代用ひて、今古同じからず、遂に其の尤も相涉るを辨する者、五十六韻、科するに四聲を以てす、名づけて韻略と曰ふ、制作の士咸く則を取る、後生晚學、賴る所多し、齊の太子舍人李節は知音の士なり、音譜決疑を撰す、其の序に云ふ、周禮を案するに、凡そ樂は調鐘を宮と爲し、黃鐘を角と爲

云、案周禮、凡樂圖鐘爲宮、○按、圖鐘、即夾鐘、黃鐘爲角、大簇爲徵、沽洗爲羽、商不合律、蓋與宮同聲也、五行則火土同位、五音則宮商同律、闕與理合、不其然乎、呂靜之撰韻集、分取無方、王徵之製鴻寶、詠歌少驗、平上去入、出行闕里、沈約取以和聲之律、呂相合、竊諧宮商徵羽角、卽四聲也、羽讀如括羽之羽、亦之和同、以拉群音、無所不盡、豈其藏理萬古而未改於先悟者乎、往每見當此文、○古寫本、往作經、人論四聲者衆矣、然其以五音配偶多不能諧、李氏忽以周禮證明、商不合律、與四聲相配、便合、恰然懸同、愚謂鍾蔡以還斯人而已。

し、大簇を徵と爲し、沽洗を羽と爲す、商は律に合はず、蓋し宮と同聲なり、五行は卽ち火土位を同じくし、五音は則ち宮商律を同じくす、闕に理と合へり、其れ然らざらんや、呂靜之の韻集を撰する、分ち取ること方無し、王徵之の鴻寶を製する、詠歌驗少し、平上去入は出で、闕里に行く、沈約取りて和聲の律呂を以て相合せ、竊に宮商徵羽角に諧はしむ、卽ち四聲なり、羽は讀みて括羽の羽の如し、亦之れ和同す、以て群音を拉くに、盡さざる所無し、豈んど其れ萬古を藏理して、未だ先悟を改めざる者か、往每に見る此の文に當りて、人の四聲を論ずる者衆きを、然れども、其の五音を以て配偶する、多く諧ふこと能はず、李氏忽ち周禮を以て證明し、商は律に合はずとして、四聲と相配するに、便ち合す、恰然として懸に同じ、愚謂ふ、鍾蔡より以還、斯の人のみと。

7

文鏡祕府論

卷〇按舊本此下有卷一
三按舊本此下有卷一
半今創之、後致之、

文鏡祕府論 地

金剛峯寺禪念沙門 遍照金剛撰

論體勢等

十七勢 十四例 十體 六義 八階

六志 九意

十七勢

○古寫本、十七勢、或曰、古寫本、此二字、三字作體例兩字、作王氏論文云、詩

有學古今勢、一十七種、具例如後

第一、直把入作勢、第二、都商量入作勢、第三、

直樹一句第二句入作勢、第四、直樹兩句、第五、直樹

三句第五句入作勢、第六、比興入作勢、第七、謹比勢、

第八、下句拂上句勢、第九、感興勢、第十、含思

體勢等を論ず

十七勢 十四例 十體 六義 八階

六志 九意

○十七勢

或ひと曰く、詩に古今を學ぶ勢有り、一十七種、例を具ふるこゝ後の如し。

第一、直に把り入りて勢を作す、第二、都て商量し入りて

勢を作す、第三、直に樹つ一句第二句入りて勢を作す、第

四、直に兩句を樹つ、第五、直に三句を樹つ第五句入り

て勢を作す、第六、比興し入りて勢を作す、第七、謹比勢、第

落句勢第十一、相分明勢第十二、一句中分勢第十三、一句直比勢第十四、生殺迴薄勢第十五、理入景勢第十六、景入理勢第十七、心期落句勢。

第一、直把入作勢 直把入作勢者、若賦得一物、或自登山臨水、有閑情作、或送別、但以題目爲定、依所題目、入頭便直把是也、皆有此例、昌齡寄驩洲詩云、入頭便云、與君遠相知、不道雲海深、又見譚至伊水詩云、得罪由已招、本性易然諾、又題上人房詩云、通經彼上人、无迹任勤苦、又送別諸詩云、春江愁送君、蕙草生氛氳、又送別詩云、河口饒南客、進帆清江水、又如高適云、鄭侯應栖遑、五十頭垂白、又如陸士衡云、願侯體明德、清風肅已

落句の勢第十一、相分ちて明にする勢第十二、一句の中に分つ勢第十三、一句直に比ぶる勢第十四、生殺廻薄の勢第十五、理より景に入る勢第十六、景より理に入る勢第十七、心落句に期する勢。

第一、直に把り入りて勢を作す、直に把り入りて勢を作すとは、若し一物を賦し得て、或は自ら山に登り水に臨み、閑情有りて作る、或は別を送るに但だ題目を以て定と爲す、目を題する所に依りて、入頭便ち直に把る、是れなり、皆此の例有り、昌齡の驩洲に寄する詩に云ふ、入頭便ち云ふ、君と遠く相知る、雲海の深きこと道はず、又譚せられて伊水に至る詩に云ふ、罪を得ること已れく、本性然諾を易くす、又上人の房に題する詩に云ふ、經により招迫せる彼の上人、迹无く勤若に任す、又送別の諸詩に云ふ、春江愁て君を送る、蕙草生じて氛氳たり、又、送別の詩に云ふ、河口南客に饒す、帆を清江の水に進む、又、高適の云ふ、鄭侯應に栖遑たるべし、五十頭、白を垂れたりの如き、又、陸士衡の云ふ、願侯明德を體す、清風肅として已に過ぎたりとの如し。

邁。

第二、都商量入作勢 都商量入作勢者、每

詠一物、或賦贈答、寄人、皆以入頭兩句平商

量其道理、第三、第四、第五句入作、是皆有、其

例、昌齡上同州使君伯詩言、大賢本孤立、蓋本、本作、索、而、旁、書、本字、今從、房、書、有時起、絲綸、伯父自天稟、元功載生人、是第三句入作、又上侍御士兄詩云、天人

俟明略、益稷分、堯心、利器必先舉、非賢安可

任、吾兄執嚴憲、時佐能鈎、深、此是第九句入作勢也、第三、直樹一句、第二句入作勢、直樹一句者、題目外

直樹一句、景物當時者、第二句始言題目意、

是也、昌齡登城懷古詩、入頭便云、陵藪塞蒼

茫、登城遂懷古、又客舍秋霖呈席姨夫詩云、

黃葉亂秋雨、空齋愁暮心、又孤烟曳長林、春

第二、都商量し入りて勢を作す 都て商量し入りて勢

を作すとは、一物を詠する毎に、或は贈答を賦し、人に寄

する、皆以て入頭の兩句に、平しく其の道理を商量す、第

三、第四、第五句に入りて作す、是れ皆其の例あり、昌齡が

同州の使君伯に上る詩に言ふ、大賢本と孤立す、時有つ

て絲綸を起す、伯父自ら天稟、元功生人を載す、是れ第三

句入りて作す、又、侍御士兄に上る詩に云ふ、天人明略を

俟つ、益稷堯心を分つ、利器必ず先づ舉ぐ、賢に非ざれば

安ぞ任す可けん、吾が兄嚴憲を執れり、時佐能く深を鈎

す、此は是れ第五句入りて勢を作すなり、

第三、直に一句を樹つ(第二句入りて勢を作す) 直に一

句を樹つとは、題目の外、直に一句を樹つ、景物時に當る

者なり、第二句に始めて題目の意を言ふ、是れなり、昌齡

の城に登りて古を懷ふ詩に、入頭便ち云ふ、陵藪塞くし

て蒼茫たり、城に登つて遂に古を懷ふ、又、客舍秋霖に席

姨夫に呈する詩に云ふ、黃葉秋雨に亂る、空齋暮心を愁

ふ、又、孤烟長林に曳なり、春水聊か一望、又、郵資の江東

水聊一望、又送郡貴觀、省江東詩云、楓橋延、
 海岸、客帆歸、富春、又宴南亭詩云、寒江映、村
 林、亭上納高潔、此是直樹一句、
 第二句入作勢、

第四、直樹兩句、第三句入作勢、直樹兩句、

第三句入作勢者、亦題目外直樹兩句景物、

第三句始入作題目意、是也、昌齡留別詩云、

桑林映、陂水、雨過宛城西、留醉楚山別、陰雲

暮、雲、此是第三句
 入作勢也、

第五、直樹三句、第四句入作勢、直樹三句、

第四句入作勢者、亦有題目外直樹三句、然

后即入其意、亦有第四第五句直樹景物、後

入其意、然恐爛不佳也、昌齡代扶風主人答

云、殺氣凝不流、風悲日彩寒、浮埃起、四遠遊

子彌不歡、此是第四
 句、入作勢、又旅次盤屋、過韓士別

に觀省するを送る詩に云ふ、楓橋海岸に延び、客帆富春
 に歸る、又、南亭に宴する詩に云ふ、寒江村林に映ず、亭上
 に高潔を納る、此は是れ直に一句を樹つ、第二句入りて
 勢を作す、

第四、直に兩句を樹て、第三句入りて勢を作す、直に兩句
 を樹て、第三句入りて勢を作すとは、亦題目外に、直に兩
 句の景物を樹て、第三句始めて入りて題目の意を作す、
 是れなり、昌齡の留別の詩に云ふ、桑林陂水に映じ、雨は
 過ぐ宛城の西、留つて醉ふ楚山の別、陰雲暮に曇々、此は
 是れ第三句入りて勢を作すなり、

第五、直に三句を樹て、第四句入りて勢を作す、直に三句
 を樹て、第四句入りて勢を作すとは、亦題目の外に直に
 三句を樹て、然る後に即ち其意に入るあり、亦第四第五
 句、直に景物を樹て、後に其意に入るあり、然れども、恐爛
 佳ならざるなり、昌齡の扶風主人に代りて答ふるに云ふ
 「殺氣凝て流れず、風悲んで日彩寒し、浮埃四遠に起る、遊
 子彌、歡せず、」此は是れ第四句入りて勢を作す、又、盤屋
 に旅次し、韓士の別業に過る詩に云ふ、春烟桑柘の林、落

業詩云、春烟桑柘林、落日隱荒墅、決瀆平原夕、清吟久延佇、故人家於茲、招成漁樵所、是此

第五句、
入作勢、

第六、比興入作勢、比興入作勢者、遇物如本立文之意、便直樹兩三句物、然後以本意入作比興、是也、昌齡贈李侍御詩云、青冥孤雲去、終當暮歸山、志士杖苦節、何時見龍顏、又云、渺然客子魂、○渺然、舊本作「眇然」、今正、古寫本亦作「眇」、倏鏖川上暉、還雲慘知暮、九月仍未歸、又、遷客又相送、風悲蟬更號、又、崔曙詩云、夜臺一閉無時盡、逝水東流何處還、又、鮑昭詩曰、鹿鳴思深草、蟬鳴隱高枝、心自有取疑、傍人那得知、第七、謹比勢、謹比勢者、言今詞人不悟有作者意、依古勢有例、昌齡送李邕之秦詩

日荒墅に隱る、決瀆平原の夕、清吟して久しく延佇す、故人技に家す、我れを招く漁樵の所に（此は是れ第五句入りて勢を作す）

第六、比興し入りて勢を作す、比興し入りて勢を作すとは、物に遇ひて、本文を立つるの意の如く、便ち直に兩三句の物を樹て、然る後に本意を以て入りて比興を作す、是れなり、昌齡の李侍御に贈る詩に云ふ、青冥孤雲去る、終に當に暮に山に歸るべし、志士苦節に杖る、何の時か龍顏に見えん、又云ふ、渺然客子の魂、倏鏖川上の暉還雲慘として暮を知る、九月仍未だ歸らず、又遷客又相送る、風悲んで蟬更に號く、又、崔曙の詩に云ふ、夜臺一たび閉ちて時に盡る無し、逝水東に流れて何れの處にか還らん、又、鮑昭の詩に曰く、鹿鳴いて深草を思ひ、蟬鳴いて高枝に隱る、心自ら疑ふ所有り、傍人那ぞ知ることを得ん、

第七、謹比勢、謹比勢とは、言ふは、今の詞人、作者の意行るを悟らず、古勢に依る例有り、昌齡の李邕が秦に之くを送る詩に云ふ、別怨秦楚に深し、江中に秋雲起れり

云、別怨秦楚深、江中秋雲起、言別後與秦楚之深遠也、別怨

起自楚地、即別之後、恐長不見、或偶然而會、宜以此不定、如雲起上、騰於青冥、從風飄蕩、不可復歸、

其起處、或偶然而歸、天長夢無隔、月映在寒水、雖天

夢不隔、夜中夢見、疑由相會有如別、忽覺乃各一方、了不相見、如月影在水、至曙水月亦了不見矣

第八、下句拂、下句勢、下句拂、上句者、上句

說意不快、以下句勢拂之令意通、古詩云、夜

閉木葉落、疑是洞庭秋、昌齡云、微雨隨雲收、

濛濛傍山去、又云、海鶴時獨飛、永然滄洲意

○本第一
本鶴作寄、

第九、感興勢、感興勢者、人心至感必有應

說物色萬象、爽然有如感會、亦有其例、如常

遠詩云、冷冷七絃遍、萬木澄齒音、能使江月

白、又令江水深、又王維哭殷四詩云、決滄塞

郊外、蕭條聞哭聲、愁雲爲蒼茫、飛鳥不能鳴、

(別怨と秦楚との深遠を言ふなり、別怨は、楚の地より起る、即ち別るゝの後、長く見ざるを恐る、或は偶然にして會ふ、宜なり、此れを以て定らず、雲起りて、上、青冥に騰り、風に從ひて飄蕩して、復其の起る處に歸るべからざるが如し、或は偶然にして歸らんのみ) 天長うして夢隔つる無し、月映じて寒水に在り(天長しと雖も、其の夢隔つる、夜中に夢に見て疑らくは、由は相會するも別る、如き有り、忽ち覺めて、乃ち各一方に、了に相見ず、月影の水に在り、曙に至りて、水月亦了に見えざるが如し)

第八下句、上句を拂ふ勢、下句、上句を拂ふとは上句に意の不快を脱き、下句の勢を以て之を拂ひ、意をして通ぜしむ、古詩に云ふ「夜閉く木葉の落つるを疑らくは是れ洞庭の秋」昌齡云ふ「微雨雲に隨つて收り濛々山に傍ふて去る」又、云ふ「海鶴時に獨飛ぶ、永然たり滄洲の意」

第九感興の勢、感興の勢とは、人心至感なれば、必ず應あり、物色萬象を説く、爽然として感會するが如き有り、亦其の例有り、常遠の詩に云ふ「冷冷として七絃遍し萬木幽音を澄ましむ、能く江月をして白からしめ、又江水をして寒からしむ、又、王維の殷四を哭する詩に云ふ「決滄たり寒郊の外、蕭條として哭聲を聞く、愁雲も爲に蒼茫たり、飛鳥も鳴く能はず」の如し。

第十、含思落句勢、含思落句勢者、每至落句、常須含思、不得令語盡思窮、或深意堪愁、不可具說、卽上句爲意語、下句以一景物、堪愁與深意相愜、便道仍須意出成感、人始好、昌齡送別詩云、醉後不能語、鄉山雨霽、又落句云、日夕辨靈藥、空山松桂香、又墟落有懷縣、長烟溪樹邊、又李湛詩云、○舊本、湛作堪、今正、此心復何已、新月清江長。

第十一、相分明勢、相分明勢者、凡作語、皆須令意出一覽其文、至於景象、悅然有如目擊、若上句說事未出、以下一句助之、令分明出其意也、如李湛詩云、雲歸石壁盡、月照霜林清、崔曙詩云、田家收已盡、蒼蒼唯白茅。

第十二、一句中分勢、一句中分勢者、海清

第十、思を含む落句の勢、思を含む落句の勢とは、落句に至る毎に、常に須らく思を含むべし、語盡き思窮らしむるを得ず、或は深意ありて愁ふるに堪へ、具に説く可からず、卽ち上句に意語を爲し、下句に一景物を以てず、愁ふるに堪へたと深意と、相愜ひて、便ち道ふ仍ほ須らく意出し成して、人を感ぜしむべくして始めて好し、昌齡の別を送る詩に云ふ、醉後に語る能はず、鄉山雨霽々、又落句に云ふ、日夕に靈藥を辨じ、空山松桂香し、又墟落に懷縣有り、長烟溪樹の邊々、李湛の詩に云ふ、此の心復何ぞ已まん、新月清江長し。

第十一、相分明にする勢、相分明にする勢とは、凡そ語を作す、皆須らく意を出さしむべし、其の文を一覽するに、景象に至りては、悅然として目撃する如き有り、若し上句に事を説き未だ出さざれば、下の一句を以て之れを助け、分明に其の意を出さしむるなり、李湛の詩に云ふ、雲歸つて石壁盡き、月照して霜林清し、崔曙の詩に云ふ、田家收已に盡き、蒼々として唯だ白茅の如し。

第十二、一句の中に分つ勢、一句の中に分つ勢とは、海清

月色眞。

第十三、一句直比勢、一句直比勢者、相思

河水流。

第十四、生殺廻薄勢、生殺廻薄勢者、前設

意悲涼、後以推命破之、前說世路伶俜榮寵、
○舊本引「後以至空之理破之入道是也、
 本伶作驗」

第十五、理入景勢、理入景勢者、詩不可一

向把理、皆須入景語、始清味、欲入景勢、皆

須引理語入一地、及居處所在便論之、其景

與理不相愜、理通無味、昌齡詩云、時與醉林

壑、因之墮農桑、槐烟漸含夜、樓月深蒼茫。

第十六、景入理勢、景入理勢者、詩一向言

意則不清、及無味、一向言景亦無味、事須景

與意相兼始好、凡景語入理語、皆須相愜、當

くして月色眞なり。

第十三、一句直に比ぶる勢、一句直に比ぶる勢とは、相

思ふて河水流る。

第十四、生殺廻薄の勢、生殺廻薄の勢とは、前に意の悲涼を説き、後に以て命を推して之れを破る、前に世路の伶俜榮寵を説き、後に至空の理を以て、之れを破りて道に入る、是れなり。

第十五、理より景に入る勢、理より景に入る勢とは、詩は、一向に理を把る可からず、皆須らく景語に入り、始めて清くして理を味ふべし、景勢に入らんと欲するには、皆須らく理語を引きて一地に入るべし、居處に及びて所在便ち之れを論ず、其の景と理と、相愜はされば、理通するも味無し、昌齡の詩に云ふ「時に與に林壑に醉ふ、之れに因つて農桑を墮る、槐烟漸く夜を含み、樓月深くして蒼茫たり」。

第十六、景より理に入る勢、景より理に入る勢とは、詩は、一向に意を言へば則ち清からず、及び味無し、一向に景を言へば、亦味無し、事は須らく景と意と相兼ね始めて好かるべし、凡そ景語より理語に入るには、皆須らく

收意緊不可正言景語勢收之便論理語無相管攝方今人皆不作意慎之昌齡詩云桑葉下墟落鷓鴣鳴渚田物情每衰極吾道方淵然○舊本每下有淵字今據古寫本刪又按抄作遠衰素一

第十七心期落句勢心期落句勢者心有期是也昌齡詩云青桂花未吐江中獨鳴琴言青桂花吐之時期得相見花既未吐即未相見所以江中獨鳴琴又詩云還舟望炎海○舟一作家楚葉下秋水言至秋方始還此送友人南之安

○十四例皎公詩議新立八種對十五例其如後十五例御草本銜之按四五之誤
一、重疊用事之例、二、上句用事下句以事成之例○舊本既下句之句字今據古寫本補、三、立興以意成之例、四、雙立興以意成之例、五、上句古下句以即事偶之例、六、上句意下句以意成之例、七、上

相愜ふべし、當に意を收むること緊なるべし、正言すべからず、景語の勢は之れを收むる傾理を論ずるの語は、相ひ管攝する無し、方今の人皆意を作して之れを慎まらず、昌齡の詩に云ふ、桑葉墟落に下つ、鷓鴣渚田に鳴く、物情毎に衰極す、吾が道方に淵然たり。

第十七心期落句に期する勢心期落句に期する勢とは、心に期する所ある、是れなり、昌齡の詩に云ふ、青桂花未だ吐かず、江中に獨琴を鳴す、言ふは、青桂花吐くの時期に相見を得ん、花既に未だ吐かざれば、即ち未だ相見ず、所以に江中に獨り琴を鳴す、又詩に云ふ、還舟炎海を望む、楚葉秋水に下つ、言ふは、秋に至りて方に始めて還る、此れ友人の安南に之くを送る。

○十四例皎公詩議に、新に八種對十五例を立つ、具に後の如し、十五例御草本に之れを錯る
一、重疊して事を用ふるの例、二、上句に事を用ひ、下句に事を以て成すの例、三、興を立て意を以て成すの例、四、雙びて興を立て意を以て成すの例、五、上句は古、下句は以て事に即きて偶するの例、六、上句の意、下句に意を以て成すの例、七、上句は物を體し、下句は狀を以て成すの例

句體物、下句以狀成之例、八、上句體時、下句以狀成之例、九、上句用事、下句以意成之例、十、當句以物色成之例、十一、立比成之例、十二、覆意之例、十三、疊語之例、十四、避忌之例、御草本銷之、○古寫本作二十四輕重錯謬之例、十五、輕重錯謬之例、○古寫本無此八字、

一、重疊用事之例、詩曰、淨宮鄰博望、香刹

對承華。

二、上句用事、下句以事成之例、詩曰、

子玉之敗、屢增惟塵、上句出傳、下句出詩、

三、立興以意成之例、詩曰、

營營青蠅、止于棘、惶悌君子、無信讒言、

又詩云、明月照高樓、流光正徘徊、上有

愁思婦、悲歎有餘哀、

八、上句は時を體し、下句は狀を以て成すの例、九、上句は事を用ひ、下句は意を以て成すの例、十、句に當り物色を以て成すの例、十一、比を立て、成すの例、十二、意を覆へずの例、十三、疊語の例、十四、避忌の例(御草本に、之れを銷す)十五、輕重錯謬の例、

一、重疊して事を用ふるの例、詩に曰く「淨宮博望に鄰

り、香刹承華に對す」

二、上句に事を用ひ、下句に事を以て成すの例、詩に曰く「子玉の敗に、屢増堆れ塵」上句は傳に出で、下句は詩に出づ

三、興を立て意を以て成すの例、詩に曰く「營々たる青蠅棘に止る、惶悌の君子、讒言を信する無れ」、又、詩に云ふ「明月高樓を照し、流光正に徘徊、上に愁思の婦有り、悲嘆餘哀有り」

○抄、棘作、樂

四、雙立、興以意成之例、詩曰、

鼓鐘鏘鏘、淮水蕩蕩、憂心且傷、又詩曰、

青青陵上柏、磊磊澗中石、人生天地間、忽

如遠行客、

五、上句古、下句以卽事偶之例、詩曰、

昔聞汾水遊、今見塵外鑿、

六、上句意、下句以意成之例、詩曰、

假樂君子、顯顯令德、宜民宜人、受祿乎天、

七、上句體物、下句以狀成之例、詩曰、朔風

吹飛雨、蕭條江上來、

八、上句體時、下句以狀成之例、詩曰、昏且

變、氣候、山水含清暉、○昏、舊本作民、今據古寫本正、

九、上句用事、下句以意成之例、詩曰、雖無

玄豹姿、終隱南山霧、

四、雙びて興を立て意を以て成すの例、詩に曰く、鼓鐘鏘

々たり、淮水蕩々たり、憂心且つ傷む、又、詩に曰く、青々
たり、陵上の柏、磊々たり、澗中の石、人、天地の間に生る、
忽として遠行の客の如し、

五、上句は古、下句は以て事に卽きて偶するの例、詩に曰

く、昔聞く汾水の遊び、今見る塵外の鑿、

六、上句の意、下句に意を以て成すの例、詩に曰く、假樂
の君子、顯々たる令徳、民に宜しく人に宜しく、祿を天
に受く、

七、上句は物を體し、下句は狀を以て成すの例、詩に曰く
「朔風吹いて雨を飛ばす、蕭條として江上より来る、」

八、上句は時を體し、下句は狀を以て成すの例、詩に曰
く、昏且に氣候を變じ、山水清暉を含めり、

九、上句は事を用ひ、下句は意を以て成すの例、詩に曰く
「玄豹の姿無しと雖も、終に南山の霧に隱る、」

十、當句以物色成之例、詩曰、明月照積雪、朔風勁且哀。

十一、立比成之例、詩曰、餘霞散成綺、澄江淨如練。

淨如練。

十二、覆意之例、詩曰、延洲協心許、楚老惜蘭芳、解劍竟何及、撫墳徒自傷、○抄、洲作、寬、作、意、

十三、疊語之例、詩曰、故人心尚爾、故心人不見、又詩曰、既爲風所開、還爲風所落、

十四、避忌之例、詩曰、何況雙飛龍、羽翼縱當乖、又詩曰、吾兄既鳳翔、王子亦龍飛、

十五、輕重錯謬之例、陳王之誅武帝、遂稱尊靈永蟄、○誅、舊本作、誅、今據、孫楚之哀、

人臣、乃云奄忽登遐、子荆王驃騎、誅、此、緒、隱、一、例、也、見、顏、氏、傳、

今於古律之上、始末酷論、以祛未悟、○祛、舊、本、

十、句に當り物色を以て成すの例、詩に曰く、明月積雪を照し、朔風勁且つ哀。

十一、比を立て、成すの例、詩に曰く、餘霞散じて綺を成す、澄江淨くして練の如し。

十二、意を覆する例、詩に曰く、延洲心許に協ひ、楚老蘭芳を惜む、劍を解くも、竟に何ぞ及ばん、墳を撫して徒に自ら傷む。

十三、疊語の例、詩に曰く、故人心尚ほ爾り、故心人見えず、又、詩に曰く、既に風の爲に開かれ、還つて風の爲に落さる。

十四、避忌の例、詩に曰く、何況そ双飛龍、羽翼にして當に乖くべし、又、詩に曰く、吾が兄既に鳳翔す、王子も亦龍飛す。

十五、輕重錯謬の例、陳王の武帝を誅する、遂に尊靈永蟄と稱す、孫楚の人臣を哀む、乃ち奄忽登遐と云ふ、子荆王驃騎の誅、此れ錯謬の一例なり、顏氏傳に見えたり、今古律の上に於て、始末酷論して、以て未悟を祛せば、則ち正道に反すること、得て聞く可きなり。

○抄、第
十四卷、
輕重錯
謬、孫楚
之例、一

作換今據、則反正道可得而聞也。
古寫本正

○十體 崔氏新定詩體因十種體具例如後、右○按因疑因略例列焉右字衍

一、形似體、二、質氣體、三、情理體、四、直體體、

五、影藻體、六、映帶體、七、飛動體、八、婉轉體、

九、清切體、十、菁花體、○背、舊本作菁、今據古寫本正

一、形似體、形似體者、謂貌其形而得其似、

可以妙求、難以蠱測者、是、詩曰、

風花無定影、露竹有餘清、又云、映浦

樹疑浮、入雲峯似滅、如此即形似之體也

二、質氣體、質氣體者、謂有質骨而作志氣

者是、詩云、霧峯黯無色、霜旗凍不翻、雪

覆白登道、冰寒黃河源、此質氣之體也

三、情理體、情理體者、謂抒情以入理者是

○舊本、行旁書、字、詩云、遊禽暮知返、行人獨未歸、

文鏡秘府論地卷

なり。

○十體崔氏の新定詩體因に、十種體、具に例すること後の如しと云ふ、右

一、形似體、二、質氣體、三、情理體、四、直體體、五、影藻體、

六、映帶體、七、飛動體、八、婉轉體、九、清切體、十、菁花體

一形似體 形似體とは、其の形を貌して其の似たるを得ば、以て妙求す可く、以て蠱測し難き者を謂ふ、是れ

なり、詩に曰く、風花定影無く、露竹餘清有り、又云ふ、浦に映する樹は浮ぶかと疑ひ、雲に入る峯は滅するに似たり、此くの如きは、即ち形似の體なり

二、質氣體 質氣體とは、質骨有りて志氣を作す者を謂ふ、是れなり、詩に云ふ、霧峯黯として色無く、霜旗凍つて翻らず、雪は覆す白登の道、冰は寒し黃河の源、此れ質氣の體なり

三、情理體 情理體とは、情を抒べ以て理に入る者を謂ふ、是れあり、詩に云ふ、遊禽暮に返るを知る、行人獨

ふ、是れあり、詩に云ふ、遊禽暮に返るを知る、行人獨

ふ、是れあり、詩に云ふ、遊禽暮に返るを知る、行人獨

ふ、是れあり、詩に云ふ、遊禽暮に返るを知る、行人獨

ふ、是れあり、詩に云ふ、遊禽暮に返るを知る、行人獨

四五

又云、四鄰不相識、自然成掩扉。此即情
也。理之體

四、直置體、直置體者、謂直書其事、置之於

句者、是詩云、馬銜首蒼葉、劍盤鴨鶉膏、

又曰、隱隱山分地、滄滄海接天。此即是直

五、彫藻體、彫藻體者、謂以凡事理而彫藻

之成、於妍麗、如絲彩之錯綜、金鐵之砥鍊、

是詩曰、岸綠開河柳、池紅照海榴、又曰、

花志怯馳年、脂顏慘驚節。此即是彫

六、映帶體、映帶體者、謂以事意相愜、復而

用之者、是詩曰、露花凝濯錦、泉月似沉

珠。此似花似錦、月似珠、自昔通規矣、公獨

曰、侵雲蹀征騎、帶月倚彫弓。雲騎與三月弓

又曰、舒桃臨遠騎、垂柳映連營。是複、植月此

未だ歸らず」又云ふ「四鄰相識らず、自然に扉を掩ふこ
とを成す」此れ即ち情理の體なり」

四、直置體、直置體とは、直に其の事を書し、之れを句に

置く者を謂ふ、是れなり、詩に云ふ「馬は首蒼の葉を

銜み、劍は鴨鶉の膏に盤す」又曰く「隱々として山、地を

分ち、滄々として海、天に接す」此れ即ち直置の體

五、彫藻體、彫藻體とは、凡ての事理を以て、之れを彫藻

し、妍麗を成すこと、絲彩の錯綜し、金鐵の砥鍊するが

如きを謂ふ、是れなり、詩に曰く「岸は緑にして河柳

を開き、池は紅にして海榴を照す」又曰く「花志怯にし

て年を馳せ、脂顏慘として節に驚く」此れ即ち是れ彫

藻の體

六、映帶體、映帶體とは、事意を以て相愜ひ、復して之れ

を用ふる者を謂ふ、是れなり、詩に曰く「露花錦を濯
ふかと疑ひ、泉月珠を沈むるに似たり」此れは、花、錦に
似たり、月珠に似たりとは、昔よりの通規なり、然れど
も、蜀に濯錦川あり、漢に明珠浦あり、故に特に以て映
帶と爲す」又曰く「雲を侵して征騎を蹀む、月を帯びて
彫弓に倚る」雲騎と月弓と、是れ複、植月は此れ映帶の
類、又曰く「舒桃臨遠騎に臨み、垂柳連營に映す」

七、飛動體、飛動體者、謂詞若飛騰而動是、

詩云、流波將月去、湖水帶星來、又云、

月光隨浪動、山影逐波流、此即飛動之類體、逐、舊本作逐、今

傳古寫本正、

八、婉轉體、婉轉體者、謂屈曲其詞、婉轉成、

句是、詩曰、歌前日照梁、舞處塵生襪、

又曰、泛色松烟舉、凝花菊露滋、此即婉轉之類、

九、清切體、清切體者、謂詞清而切者、是、詩

曰、寒葭凝露色、落葉動秋聲、又曰、

猿聲出峽斷、月彩落江寒、此即是清切之類體、古寫本無類字、

十、菁花體、菁花體者、謂得其精而忘其麤、

者是、詩曰、青田未矯幹、丹穴欲乘鳳、鶴

生青田、鳳出丹穴、今只言青田、只可出鶴、

指言丹穴、即可知鳳、此即是文曲之菁花、

七、飛動體、飛動體とは、詞、飛騰して動くが若きを謂ふ、是れなり、詩に云ふ、流波、月を將て去り、湖水、星を帯びて来る、又云ふ、月光は浪に隨つて動き、山影は波を逐ふて流る、此れ即ち飛動の類體、

八、婉轉體、婉轉體とは、其の詞を屈曲し、婉轉して句を成すを謂ふ、是れなり、詩に曰く、歌前に日、梁を照す、舞處に塵、襪に生ず、又曰く、色、泛、松烟、舉り、花を凝して菊露、滋し、此れ即ち婉轉の類、

九、清切體、清切體とは、詞清にして切なる者を謂ふ、是れなり、詩に曰く、寒葭、露色を凝し、落葉、秋聲を動かす、又曰く、猿聲、峽を出でて断え、月彩、江に落ちて寒し、(此れち即ち是れ清切の類體)

十、菁花體、菁花體とは、其の精を得て、其の麤を忘る、者を謂ふ、是れなり、詩に曰く、青田、未だ幹を矯めず、丹穴に鳳に乗せんと欲す、鶴は青田に生じ、鳳は丹穴より出づ、今只だ青田を言ふ、只だ鶴を言ふべし、丹穴を指言す、即ち鳳を知る可し、此れ即ち是れ文曲の菁花、又曰く、曲沼に秋蓋、疎なり、長林に憂帷を卷く、(曲沼は池なり)

又曰、曲沼踈秋葦、長林卷夏帷、曲沼、曲池也。

又曰、積翠徹深潭、舒丹明淺瀨、丹、即霞也、今只言丹翠、即可知朝霞之義、況近代之儒情誠不周於變通、即坐其危險、若致人者、固未可與言、

○六義

一曰、風、二曰、賦、三曰、比、四曰、興、五

曰、雅、六曰、頌。

一曰、風體、一國之教謂之風、關雎麟趾之化、

王者之風也、○按、化、舊本作他、今摺抄、鵲巢騶虞之德、

諸侯之風也、玉云、天地之號令曰風、上之

化、下猶風之靡章、行春令、則和風生、行秋

令、則寒風殺、言君臣不可輕其風也。

二曰、賦、皎曰、賦者、布也、匠事布文、以寫情也。

玉云、賦者、錯雜萬物、謂之賦也。

又曰、積翠深潭に徹し、舒丹淺瀨に明かなり、丹は即ち霞、翠は即ち煙なり、今只だ丹翠と言へば、烟霞の義を知るべし、況や近代の儒情誠變通に周からず、即ち其の危険に坐す、茲くの若き人は、固より未だ與に言ふ可からず。

○六義

一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌。

一に曰く風體、一國の教、之れを風と謂ふ、關雎麟趾の化

は、王者の風なり、鵲巢騶虞の徳は、諸侯の風なり、玉云

ふ、天地の號令を風と曰ふ、上の下を化する、猶風の草

を靡すがごとし、春の令を行へば、則ち和風生じ、秋の

令を行へば、則ち寒風殺たり、君臣其の風を輕んずべ

からざるを言ふなり。

二に曰く賦、皎曰く、賦とは布なり、事を匠にし文を布き、

以て情を寫すなり、玉云ふ、賦とは、萬物を錯雜す、之

れを賦と謂ふなり。

三曰、比、皎曰、比者、全取外象、以興之、西北有浮雲類、是也。○抄、全玉云、比者、直比其身、謂之比、假如關雎鳩之類是也。

四曰、興、皎曰、興者、立象於前後、以人事諭之、關雎之類是也、玉云、興者指物及比、其身、說之爲興、蓋託喻謂之興也。○抄、及、作反

五曰、雅、皎曰、正四方之風、謂雅、正有、小大、故有、大小雅焉、玉云、雅者正也、言其雅言、典切爲之雅也。

六曰、頌、玉云、頌者讚也、讚歎其功、謂之頌也、皎云、頌者容也、美盛德之形容、以其成功告於神明也、古人云、頌者敷陳似賦、而不華侈、恭慎如銘、而異也、誠以六義爲本、散乎情性、有君臣諷刺之道焉、有父子兄弟

三に曰く比、皎曰く、比とは、全く外象を取りて以て之れを興す、西北に浮雲有り、の類は是れなり、玉云ふ、比とは、直に其の身に比す、之れを比と謂ふ、假へば關々たる雎鳩の類、是れなり。

四に曰く興、皎曰く、興とは、象を前に立て、後に人事を以て之れを諭す、關雎の類、是れなり、玉云ふ、興とは、物を指し、及び其の身に比し、之れを説きて興と爲す、蓋し託喻之れを興と謂ふなり。

五に曰く雅、皎曰く、四方の風を正すを雅と謂ふ、正に小大あり、故に大小雅あり、玉云ふ、雅とは正なり、言ふは其の雅言典切、之れを雅と爲すなり。

六に曰く頌、玉云ふ、頌とは、讚なり、其の功を讚歎する、之れを頌と謂ふなり、皎云ふ、頌とは、容なり、盛徳の形容を美し、其の成功を以て神明に告ぐるなり、古人云ふ、頌とは、敷陳すること賦に似て、而して華侈ならず、恭慎すること銘の如く、而して規誠に異なり、六義を以て本と爲し、情性に散じ、君臣諷刺の道あり、父子兄弟朋友規正の義あり、降りて遊覽答贈の例に及ぶ、各

朋友規正之義焉。降及遊覽答贈之例、各於一道全其雅正。

○八階

文筆式、又詩格、轉反爲八體、後採八階、御草本有、此而以朱銷之、○古寫本、文字作、文筆式略曰五字、

筆式又詩格、轉反爲九、

- 一、詠物階、二、贈物階、三、述志階、四、寫心階、五、返訓階、六、讚毀階、七、援寡階、八、和詩階。

第一、詠物階、詩曰、

雙眉學新綠、二臉例輕紅、言橫出浪鳥、字寫入花蟲、又云、灑塵成細跡、點水作圓文、白銀花裏散明珠、葉上分。

釋曰、聞神嶺而賦金花、覩仙蓬以歌玉葉、或思今而染墨、乍感昔以抽毫、此乃詠物之階、斯顯卽事之言是著。

一道に於て、其の雅正を全うす。

五〇

○八階、文筆式、又詩格、轉反を八體と爲す、後に八階を採る、御草本に此れ有り、而して朱を以て之れを銷す。

- 一、詠物階、二、贈物階、三、述志階、四、寫心階、五、返訓階、六、讚毀階、七、援寡階、八、和詩階。

第一、詠物階、詩に曰く、雙眉新綠を學び、二臉輕紅に例す、言は、浪を出づる鳥を横へ、字は花に入る蟲を寫す、

又云ふ、塵に灑いで細跡を成し、水に點じて圓文を作す、白銀花裏に散じ、明珠葉上に分る。

釋に曰く、神嶺を聞きて金花を賦し、仙蓬を覩て以て玉葉を歌ふ、或は今を思ひて墨を染め、乍ち昔に感じて以て毫を抽く、此れ乃ち詠物の階、斯れ顯に卽事の言是れ著る。

第二、贈物階詩云、

心貞如玉性志潔若金爲託贈同心葉因附
合歡枝、又曰、合歡刺縫罷守啼方達曙
帶長垂兩巾代人交手處。

釋曰、乍遣蓋蓋之葉乘時贈滴瀝之輕花
假類玉以制文託如金而起詠雖復表心
著迹還以贈物爲名。

第三、述志階詩曰、

有鳥異孤鸞飛無群獨漾鶴戲逐輕風起聊
三台上、又曰、丈夫慷慨瞻上河波奔
只將三尺劍決構一朱門。

釋曰、燕雀之爲易測鸞鳳之操難知有如
候鴈銜蘆騰龍附雲上哲託以是犯明賢
因而表志坦蕩之位既陳慷慨之雄立。

第二、贈物階

詩に云ふ心貞玉の性の如く志潔金の爲
の若し託して同心の葉に贈り因つて合歡の枝に附
く又曰く合歡刺縫罷んで守り啼くこと方に曙に達
す帶長くして兩巾に垂れ人に代つて手を交ふる處

釋に曰く乍ち蓋蓋の葉葉を遣り時に滴瀝の輕花を
贈る玉に類するを假りて以て文を制し金の如きに
託して詠を起す復た心を表し迹を著くと雖も還つ
て物を贈るを以て名と爲す。

第三、述志階

詩に曰く鳥有り孤鸞に異なり飛ぶに羣
無うして獨漾ふ鶴は戯れて輕風を逐ふ起つて三台
の上に聊す又曰く丈夫慷慨を懷く瞻上に河波奔る
只だ三尺の劍を將て決して一朱門を構ふ

釋に曰く燕雀の爲は測り易く鸞鳳の操は知り難し
候雁蘆を銜み騰龍雲に附くが如き有り上哲託して
以て犯を呈し明賢因りて志を表す坦蕩の位既に陳
し慷慨の雄立つ。

○抄、起
物二字互
易、廉
○抄、廉
作、廉

第四、寫心階詩曰、

命禮遣舟車、佇望談言志、若值信來符、共子同琴瑟、又曰、挿花花未歇、薰衣衣已香、望望遙心斷、悽悽愁切腸。

釋曰、春光暖曖託青鳥以通言、夏日悠悠因江賤而表意、若也招朋命侶、方事一斟、兩酌、追舊狎新、如應三揮四撫、既傾一樽、若是故以寫心爲名。

第五、返調階詩曰、盛夏盛炎光、焦天焦氣烈、又曰、清階清溜瀉、涼戶涼風入、

釋曰、此述涼秋、彼陳盛暑、九冬雪狀、悽人、三春風光可翫、卽二節各舉、且兩時互列、語既差舛、故以調爲名。

第六、讀毀階詩曰、施朱桃惡采、點黛柳慙、

第四、寫心階 詩に曰く、禮を命じて舟車を遣り、佇望して言志を談ず、若し信來の符に値はゞ、子と共に琴瑟を同じうせむ、又曰く「花を挿むに花未だ歇きず、衣に薰するに衣已に香し、望々遙心斷々、悽々愁ひて腸を切る、」

釋に曰く、春光暖々として青鳥に託して以て言を通ず、夏日悠悠として江賤に囚りて意を表す、若し也た朋を招き、侶を命ず、方に一斟兩酌を事とす、舊を追ひ新に狎る、三揮四撫に應ずるが如し、既に一樽を傾く、是くの若きの故に、寫心を以て名と爲す。

第五、返調階 詩に曰く「盛夏に盛炎光り、焦天に焦氣烈し、」又曰く「清階に清溜瀉き、涼戶に涼風入る、」

釋に曰く、此に涼秋を述べ、彼に盛暑を陳ぶ、九冬の雪狀、人を悽ましむ、三春の風光翫ぶ可し、二節に即きて各、舉ぐ、且つ兩時互に列す、語既に差舛せり、故に調を以て名と爲す。

第六、讀毀階 詩に曰く朱を施せば桃、彩を惡ち黛を點す

○抄、爰
易、九二字互

○舊本里
勞_レ照而
勞_二雪_一里
字_一今從_二
勞_レ勞_二
○按_一且
自_レ三
似_レ衍
字

色、又云、皓雪已藏暉、凝霜方疊影。

釋曰、讚此練、葛無方、毀彼羅、執取證、既近辱緹錦、亦遠恥霜雪、至如梁家畫黛、漢女久已低顏、宋里施朱、江妃故宜斂色、且自重、又曰、褒貶之事、既彰、讚毀之階是立。

第七、援寡階、詩曰、

女蘿本細草、抽莖信不功、憑高出嶺上、假樹入雲中、又云、愁臨玉臺鏡、淚垂金縷裙、釋曰、登巖眺遠、陟嶺瞻高、此乃假彼敷榮、因他茂實、且復何異、鸞鏡絕塵、遂寫如花之軟顏、龍津屏浪、乃照似月之蛾眉、既憑有功、亦假記於信、又曰、而住、

第八、和詩階、詩曰、

花桃微散紅、萌蘭稍開紫、客子情已多、春望

文鏡秘府論地卷

れば柳色を散づ、又云ふ、皓雪已に暉を藏し凝霜方に影を疊む、

釋に曰く、此れを讚するに、葛を練りて方無し、彼れを毀するに、執を羅して證を取る、既に近きは緹錦を辱しむ、亦遠きは霜雪を恥づ、梁家黛々畫き、漢女久しく已に顔を低る、宋里朱を施し、江妃故に宜しく色を斂め、且つ自ら重んずべきが如きに至る、又曰く、褒貶の事、既に彰れ、讚毀の階是に立つ。

第七、援寡階、詩に曰く、

女蘿は本と細草、莖を抽く信に功あらず、高に憑つて嶺上に出づ、樹を假りて雲中に入る、又云ふ、愁て玉臺の鏡に臨んで、涙、金縷の裙に垂る。

釋に曰く、巖に登りて遠を眺み、嶺に陟りて高を瞻る、此れ乃ち彼の敷榮を假り、他の茂實に因る、且つ復何ぞ異ならむ、鸞鏡、塵を絶ち、遂に花の如きの軟顔を寫し、龍津、浪を屏け、乃ち月に似たるの蛾眉を照す、既に憑みて功有り、亦假に信に記す、又曰く、而住、

第八、和詩階、詩に曰く、

花桃微に紅を散す、萌蘭稍、紫を開く、客子情已に多く、春望復た此くの如し、又曰く、風

復如此、又曰、風光搖隨麥、日花映杯藥、

春情重以傷歸命何由弭○舊本弭作月、據今古寫本及抄正

釋曰、黃蘭碧桂、風舞葉上之飛香、紫奈紅

桃、日漾花中豔色、彼既所呈九暖、此即復

答三春兼疑秋情、齊嗟夏抱、染墨之辭不

異、述懷之志皆同、彼此宮商、故稱相和、王

斌有言曰、無山可以減水、有日必應生月、

夫訓探答、詩言法語、復但令切著施、教無

兼。

○六志筆札略同

一曰、直言志、二曰、比附志、

三曰、寄懷志、四曰、起賦志、

五曰、貶毀志、六曰、讚譽志、

一曰、直言志、直言志者、謂的申物體指事

光隨麥を搖し、日花林葉に映す、春情重くして以て傷る、歸命何に由つて弭まらん

釋に曰く、黃蘭碧桂、風、葉上の飛香を舞はし、紫奈紅桃、日、花中の豔色を漾す、彼れ既に九暖に呈する所、此れ即ち復た三春に答ふ、兼て秋情を疑ひ、齊しく夏抱を嗟く、染墨の辭異ならず、述懷の志皆同じ、此れ此宮商、故に相和すと稱す、王斌言へる有り曰く、山無く以て水を減す可し、日有り必ず應に月を生ずべし、夫れ訓探答、詩言法語、復た但だ切著せしむ、教を施すこと兼ぬる無し。

○六志筆札略、同じ

一に曰く、直言志、二に曰く、比附志、三に曰く、寄懷志、

四に曰く、起賦志、五に曰く、貶毀志、六に曰く、讚譽志、

一に曰く、直言志、直言志とは、謂らう的に物體を申し、

而言、不藉餘風、別論其詠、即假作屏風詩曰、
綠葉霜中夏、紅花雪裏春、去馬不移迹、來車
豈動輪。

釋曰、畫樹長青、不許經霜變色、圖花永赤、
寧應度雪改容、寫摸去迹、料未移蹤、筆寫
行輪、何能進轍、如斯起詠、所例曰直○書本例
作韻、而旁書例字、今據古寫本正、不藉煩詞、自然應、格

二曰、比附志、比附志者、謂論體寫狀、寄物
方、形、意、託、斯、間、流、言、彼、處、即、假、作、贈、別、詩、曰、
離情弦上急、別曲雁邊嘶、○舊本雁作、而旁書雁字、今據古寫本正、下低雲百種鬱、垂露千行啼。

釋曰、無方叙意、寄急狀於絃中、有意論情、
附嘶聲於雁側、上見低雲之鬱、託愁氣以
合詞、下屬垂露懸珠、寄啼行、而畫筆、意在

文鏡秘府論地卷

事を指して言ひ、餘風を藉らず、別に其の詠を論ず、即ち
假に屏風の詩を作りて曰く、「綠葉は霜中に夏あり、紅花
は雪裏の春、去馬迹を移さず、來車豈に輪を動さんや。」

釋に曰く、畫樹長く青くして、霜を経て色を變ずるを
許さず、圖花、永く赤くして、寧ぞ應に雪を度つて容を
改むべけんや、寫摸の去迹料るに未だ蹤を移さず、筆
寫の行輪何ぞ能く轍を進めん、斯くの如く起詠し例す
る所を直と曰ふ、煩詞を藉らずして、自然に格に應ず

二に曰く、比附志、比附志とは、謂ふは、體を論じ狀を寫
し、物に寄せ形を方ぶ、意斯の間に託し、言を彼の處に流
す、即ち假に贈別の詩を作る、曰く、離情は弦上に急なり、
別曲は雁邊に嘶く、低雲百種鬱たり、垂露千行の啼、

釋に曰く、意を叙ぶるに方無し、急狀を絃中に寄す、情
を論ずるに意有り、嘶聲を雁側に附す、上に低雲の鬱
たるを見て、愁氣に託して以て詞を合す、下に垂露の
珠を懸くるを屬て、啼行を寄せて、而して筆を畫ふ意、

五五

○按檢上
要點二一
字一形字
類當レ左二
欲上レ

○按補考
看

粧頰、喻鮮花、欲述眉形、假論低日、傳形在去、類體在來、意涉斯言、方稱比附。

三曰、寄懷志、寄懷志者、謂情含鬱抑、語帶

譏傲、事例、膏育、詞褒、譎詭、○古寫本、即假作

幽蘭詩、詩曰、

日月雖不照、馨香要自豐、有怨生幽地、無由

逐遠風。

釋曰、恹道日月、不自表、生於幽地、略述馨

香有質、遺論逐吹無由、猶屈原多俠、離騷

之詠、勃興、賈誼不申、伏鳥之歌、云作、如斯

之例、因號寄懷。

四曰、起賦志、起賦志者、謂牘論古事、○古

牘作行、按驚海、指列今詞、摸春秋之舊風、起

筆札之新號、或指人爲定、就迹行以題篇、或

頰を粧ふに在りて鮮花に喩へ、眉形を述べんと欲して、假に低日を論ず、傳形は去に在り、類體は來に在り、意、斯の言に涉る方に比附と稱す。

三に曰く、寄懷志、寄懷志とは、謂ふは、情鬱抑を含み、語譏傲を帶ぶ、事、膏育を例し、詞、譎詭を褒す、即ち假に幽蘭の詩を作る、詩に曰く、日月照らさずと雖も、馨香は自ら豊なるを要す、幽地に生ずるを怨む有り、遠風を逐ふに由無し。

釋に曰く、恹に道ふ日月明かならず自ら表す、幽地に生じ、略、馨香の質有るを述べ、遠て逐吹の由し無きを論ず、猶ほ屈原多俠にして、離騷の詠、勃興し、賈誼、申せずして、伏鳥の歌、云に作るがごとし、斯くの如きの例を、因りて寄懷と號す。

四に曰く、起賦志、起賦志とは、謂ふは、牘に古事を論じ、指して今詞を列す、春秋の舊風を摸し、筆札の新號を起す、或は人を指して定と爲し、迹行に就きて、以て篇に題す、或は事を立て云に規貌を成し、因由を造りて、筆を遺

立事云成規貌。○古寫本云作立。 造因由不遣筆附
 申名況託志。法詳言。 例此之徒皆名起賦。即假
 作賦得魯司寇詩曰、

隙見通榮辱、行藏備卷舒、避席談會子、趨庭
 誨伯魚。

釋曰、有道無道之說、備列前聞、用之捨之

事、○按事上似脫之字。 名傳後代、曾參避席、文載孝

經、鯉也、過庭事、義班論語、○按義字似衍。 如斯之

例、事得成言、因舊行新、故名起賦者也。

五曰、貶毀志、 貶毀志者、謂指物實佳、與文

道、惡他言作是、我說官非、文筆見貶、言詞致

毀、證善爲惡、因以名之、即假作田家詩、詩曰、

有意嫌千石、無心羨九卿、且悅丘園好、何論

冠蓋生。

らず、名況を附申し、志を浮言に託す、例するに、此の徒、
 皆起賦と名づく、即ち假に作る、魯司寇を賦し得たり、詩
 に曰く、隙見榮辱に通じ、行藏卷舒に備ふ、席を避けて會
 子に談じ、庭に趨つて伯魚に誨ふ。

釋に曰く、有道無道の說、備に前聞に列す、之れを用ひ
 之れを捨つる事、名、後代に傳ふ、曾參席を避く、文、孝經
 に載す、鯉や庭を過ぐ、事、義論語に班す、斯くの如きの
 例、事、言を成すを得、舊に因りて新を行ふ、故に起賦と
 名づくる者なり。

五に曰く、貶毀志、 貶毀志とは、謂ふは、物の實を指して
 文道を佳興す、他の言を惡みて、我を是とする説を作る、
 育文筆に非ず、言詞に貶せられて、毀を致す、善を證し惡
 を爲す、因りて以て之れに名づく、即ち假に田家の詩を
 作る、詩に曰く、千石を嫌ふに意有り、九卿を羨むに心無
 し、且つ丘園の好を悦ぶ、何ぞ冠蓋の生なるを論ぜん。

釋曰、千石崇高、與言有奇、九卿位重、所顧無心、翻非冠蓋、例悅丘園、貶毀之情、自然隆著。

六曰讀譽志、讀譽志者、謂心珍賤物、言貴者不如意重、令人先賢之莫及、詞褒筆味、玄歎、豐歲之珍、語讚、文筆、劇勝、飢年之粟、小中出、大、短內生、長、拔、滯、昇、微、方、之、讚、譽、即、假、作、美人詩、詩曰、

宋臘何須說、虞姬未足談、頰態花翻愧、眉成月例慙。

釋曰、宋臘無雙、播徽音於筆札、虞姬罕匹、飛令譽於含章、鮮花笑、樹、刺、施、莊、之、未、如、初月雲開、信、圖、眉、而、莫、及、俱、論、被、弱、玄、識、此、強、假、名、具、陳、方、申、指、的。

釋に曰く、千石は崇高、與に言ふ奇有り、九卿は位重し、顧ふ所心に無し、翻つて冠蓋を非とし、例より丘園を悦ぶ、貶毀の情、自然に隆著なり。

六に曰く、讀譽志、讀譽志とは、謂ふは、心に賤物を珍とす、言には貴者も意重に如かずと、人を令する、先賢も及ぶ莫し、詞、筆味を褒めて、玄に豐歳の珍を歎く、語、文筆を讚して、劇だ飢年の粟に勝れり、小中、大を出し、短内、長を生ず、滯を抜き微を昇げ、之れを讚譽に方ぶ、即ち假に美人の詩を作る、詩に曰く、宋臘何ぞ説くを須ひん、虞姬未だ談するに足らず、頰態花も翻つて愧ち、眉成つて月も例より慙つ。

釋に曰く、宋臘は雙び無く、徽音を筆札に播す、虞姬も匹ひ罕なり、令譽を含章に飛ばす、鮮花、樹に笑ひて、施莊の未だ如かざるを刺る、初月雲開きて、信に眉を圖するも及ぶ莫し、俱に彼の弱を論じ、玄に此の強を識る、名を假りて具陳し、方に指的を申ぶ。

○九意

- 一、春意、二、夏意、三、秋意、四、冬意、
- 五、山意、六、水意、七、雪意、八、雨意、
- 九、風意、

春意

雲生似蓋霧起如烟山行 垂松萬歲臥栢千
 年山行 羅雲出岫綺霧張天山行 紅桃綠苑
 碧柳裝田遊行 風生玉豔日帶金研野望 窓
 中落紛透上鳴弦 朝雲蔽日夕雨傾天大雨
 三山引霧六澤浮烟望晴 鴻歸塞北雁入幽
 邊望晴 蜂歌樹裏蝶舞花前遊園 悲瞻漢地
 泣望胡天從成 秦娥鼓瑟越女調絃席興 離
 衿十載別袂三年怨別 風飄綺袖日照花鈿
 人美 鳴鐘伏趙躁鼓降燕騎 三山帶霧五

文鏡秘府論地卷

○九意

- 一、春意、二、夏意、三、秋意、四、冬意、五、山意、六、
- 水意、七、雪意、八、雨意、九、風意、

春意

「雨生じて蓋に似たり、霧起つて烟の如し」(山行) 「垂松
 萬歲臥栢千年」(山行) 「羅雲岫を出で、綺霧天に漲る」(山
 行) 「紅桃苑に綠り、碧柳田を裝す」(遊行) 「風は玉豔を
 生じ、日は金研を帶ぶ」(野望) 「窓中の落紛、瑟上の鳴弦、
 「朝雲日を蔽ひ、夕雨天を傾く」(大雨) 「三山に霧を引き、
 六澤に烟を浮ぶ」(望晴) 「鴻は塞北に歸り、雁は幽邊に入
 る」(望晴) 「蜂は樹裏に歌ひ、蝶は花前に舞ふ」(遊園) 「悲
 んで漢地を瞻、泣いて胡天を望む」(從成) 「秦娥瑟を鼓し、
 越女絃を調す」(席興) 「離衿十載、別袂三年」(怨別) 「風は
 綺袖を飄し、日は花鈿を照す」(美人) 「鳴鐘趙に伏し、躁鼓

似含煙鳥 平原皎潔、下蔡芬芳遊 金池
 水綠、玉苑花紅遊 燈前覆盞、燭下傾觴夜
 鴻辭、繡沼燕入花梁傷別 遊 遊 遊
 蜂熠燿、舞蝶翱翔飲 花開故苑、柳發新裝遊
 上花黃美人、琴宜袖短、舞勢裙長妓 懸情
 憶土、舉目思鄉客 雲生鶴嶺、霧起鸞峯山
○岡、正字通 天開寶豔、日寫金光居 風飄
云、俗岡字 洞戶、月照長廊居 環欹照曜、珮動鏗鏘練
 蘭腰婀娜、玉手低昂練 猿啼栢阜、鳥喚松
山 岡、行 三危鳥翅、九折羊腸山 鳴鳩振羽、
 噪雁番歸、風飄芍藥、日照薔薇野 嬌同
 漢婦、態若湘妃美人 朝悲風幕、夜泣鸞帷閨
 良人憫嘿、賤女歔歔送別 唱歌過漢、蕩婦柔

燕に降る(劍騎) 「三山霧を帯び、五奴煙を含む(劍騎)」
 「平原皎潔、下蔡芬芳(遊園)」「圓池水綠に、玉苑花紅なり
 (遊園)」「燈前に盞を覆し、燭下に觴を傾く(夜飲)」「鴻は
 繡沼を辭し、燕は花梁に入る(傷別)」「遊蜂熠燿、舞蝶翔
 翔(酣飲)」「花は故苑に開き、柳は新裝を發す(遊池)」「同
 じく比翼を觀、共に鸞翥を眺む(遊池)」「眉間に葉綵、臉
 上に花黃なり(美人)」「琴は袖の短に宜し、舞は裾の長に
 勢す(妓女)」「情を懸け土を憶ひ、目を舉げ郷を思ふ(客
 怨)」「雲は鶴嶺に生じ、霧は鸞峯に起る(山行)」「天、寶豔
 を開き、日、金光を寫す(淵居)」「風は洞戶に飄り、月は長
 廊を照す(淵居)」「環欹つて照曜、珮動いて鏗鏘(練練)」「
 蘭腰婀娜たり、玉手低昂(練練)」「猿は栢阜に啼き、鳥は
 松岡に喚ぶ(山行)」「三危の鳥翅、九折の羊腸(山行)」「鳴
 鳩羽を振ひ、噪雁番歸す」「風は芍藥を飄し、日に薔薇を
 照す(野望)」「嬌は漢婦に同じく、態は湘妃の若し(美人)」「
 朝に風幕を悲み、夜は鸞帷に泣く(閨怨)」「良人憫嘿た
 り、賤女歔歔す(送別)」「唱歌漢を過ぎ、蕩婦柔練たり」

媒、寓目○舊本歌作書、人、房櫺夜泣、洞戸朝悲、
人字、古寫本歌作、人、
 怨、持花夕返、採藥朝歸、靈婦○舊本、孤
怨、眠、繡帳、獨寢、羅幃、怨、顏同趙鸞、面似西施、
人、美、裙開鳳轉、袖動鸞飛、人、美、登山意亂、入
 谷心疑、山、行、稚兒荷蓓、織女鳴機、家、田、尋山
 探厥、家、田、豆野收薇、家、田、啼滝、武服泣爛、家、田、戎衣、成、史、
 紅桃似頰、碧柳如眉、園、遊、萍開舊沼、藕發新
 泥、池、遊、黃禽命駕、紫燕相隨、日、成、丹桃擘擘、
 綠竹猗猗、池、遊、觀魚引詠、視鳥興詩、上、同、桃
 蹊遣爵、菊浦酬卮、園、風光紫闕、日曬丹墀、
上、同、新梅婀娜、嫩柳逶迤、園、宜男窈窕、少女
 參差、草、芳、龍城馬倦、馬塞人疲、戎、通情荳
 蔻、寄、寄意相思、人、美、雲從浪覆、日逐波欹、由、
 來廣額、本自長眉、人、美、君心易改、妾意難移、

文鏡秘府論地卷

(寓目)「房櫺に夜泣き、洞戸に朝悲む(園怨)」「花を持し
 て夕に返り、藥を採つて朝に歸る(靈婦)」「孤り繡帳で眠
 り、獨り羅幃に寢す(園怨)」「顔は趙鸞に同じく、面は西
 施に似たり(美人)」「裙開き鳳轉じ、袖動き鸞飛ぶ(美人)
 山に登つて意亂れ、谷に入つて心疑ふ(山行)」「稚兒蓓を
 荷ひ、織女機を鳴す(田家)」「山を尋ねて厥を採り、野に丘
 つて薇を收む(田家)」「啼、武服に滝し、泣戎衣を爛す(從
 成)」「紅桃頰に似たり、碧柳眉の如し(遊園)」「萍は舊沼を
 開き、藕は新泥を發く(遊池)」「黃禽駕を命じ、紫燕相隨
 ふ(寓目)」「丹桃擘々たり、綠竹猗々たり(遊池)」「魚を
 觀て詠を引き、鳥を視て詩を興す(同上)」「桃蹊に爵を遣
 り、菊浦に卮を酬ゆ(園蹊)」「風は紫闕に光り、日は丹墀に
 曬く(同上)」「新梅婀娜として、嫩柳逶迤たり」「宜男窈
 窕として、少女參差たり(芳草)」「龍城に馬倦み、雁塞に
 人疲る(從戎)」「情を荳蔻に通じ、意を相思に寄す(美人)
 「雲は浪に從つて覆る、日は波を逐ふて欹つ」「由來所額
 あり、本と自ら長眉(美人)」「君が心改り易く、妾が意移し

六一

人美

夏意

煙雲夕卷、火霧朝開、招涼入苑、避暑登臺、
遊園 臨池命盞、入水呼盃、池 風接翠柳、月
 灼芳梅、遊園 單紗夜剪、羅縠朝裁、妓女 陽風
 乍舉、炎氣翻來、氣 尋風照灼、逐水徘徊、遊池
 浮瓜百隻、沈李千枚、朱霞東起、赤日西頽、
晚日 飄風蝶起、拂水蓮開、遊園 松禽風響、栢
 鳥散哀、山行 愁心叵却、眼淚難裁、怨 榴觴
 滿棹、菊酒盈盃、對酒 酬觴玉德、獻雅全才、詞調
 同嘗鳳髓、共乳龍胎、席貴 時登水殿、或上風
臺 三桃宜獻、五柳堪酬、望人 巫山我愛
 洛浦君求、神女 移牀就沼、改幕依流、蘭池
 逶迤、金谷周遊、遊園 長宵繡綺、永夜綢繆、美人

難し美人)

夏意

「煙雲夕に卷き、火霧朝に開く」、「涼を招き苑に入れ、暑を
 避けて臺に登る(遊園)」、「池に臨み盞を命じ、水に入つて
 盃を呼ぶ(臨)」、「風は翠柳を接み、月は芳梅を灼す(遊
 園)」、「單紗夜剪り、羅縠朝に裁す(妓女)」、「陽風乍に舉げ、
 炎氣翻つて来る(饑氣)」、「風を尋ねて照灼たり水を逐ふ
 て徘徊す(遊池)」、「瓜を浮ぶ百隻、李を沈む千枚」、「朱霞
 東に起り、赤日西に頽る(日暉)」、「風に飄つて蝶起り、水を
 拂ふて蓮開く(遊園)」、「松禽風響き、栢鳥散哀す(山行)」、
 「愁心却け^ガ回く、眼淚裁し難し(園怨)」、「榴觴棹に滿ち、菊
 酒盃に盈つ(對酒)」、「觴を玉德に酬い、雅を全才に獻す(劍
 觸)」、「同じく鳳髓を嘗め、共に龍胎を乳ふ(貴席)」、「時に
 水殿に登り、或は風臺に上る(避暑)」、「三桃宜しく獻すべ
 く、五柳酬ゆるに堪へたり(望人)」、「巫山は我愛し、洛浦
 は君求む(神女)」、「牀を移して沼に就き、幕を改めて流に
 依る」、「蘭地逶迤し、金谷周遊す(遊園)」、「長宵に繡綺た

○按、詳作、宇通

胡城足怨、隨幕多愁、客分桃入籠、割袖爲
備、美人○舊本桃作排、而旁臨池顧影、就水
書桃字、今據古寫本正搔頭、美人終輕七貴、焉重五侯、美人頰眉
造態、美人寫粉、美人羞羞、美人江邊亂蒲、溪上迷紅、美人
天開龍日、海放魚風、目追涼上苑、避暑幽
宮、避暑觀魚、避暑濠上、眺美桑中、目閑門耿耿
寂帳忡忡、懷朝看列缺、暮望豐隆、雨雲
從土馬、水逐泥牛、親元輕別鶴、本謝朝蟲
知謙金聲漏盡、玉潤香終、情芳涼易竭、玉
井先窮、遊秦庭奮猛、漢室馳雄、先持寶
劍、却挽烏弓、平生好怒、立性從戎、才非
白馬、智關青牛、短簷前花笑、戶外鶯嬌、
花園命駕、綺殿相招、彈琴弱腕、妙舞纖腰、
妓女異言嗚咽、發語號咷、歌持越劍、舞拔

文鏡秘府論地卷

り、永夜に網羅たり、美人」胡城怨むに足り、隨幕愁多
し」客怨（桃）を分ち籠に入る、袖を割きて備と爲す、
美人」池に臨んで影を顧み、水に就いて頭を搔く、美
人」終に七貴を輕んじ、焉に五侯を重んず、美人」
頰眉態を造し、寫粉、羞羞、美人」江邊に蒲に亂れ、溪
上に紅に迷ふ、美人」天、龍日を開き、海、魚風を放つ、
目」涼を上苑に追ひ、暑を幽宮に避く、避暑」魚を濠
上に觀、美を桑中に眺む、寓目」閑門耿耿として、寂帳忡
々たり、有懷」朝に列缺を着て、暮に豐隆を望む、雨貌」
雲は土馬に従ひ、水は泥牛を逐ふ、雨貌」元と別鶴を輕
んじ、本と朝蟲を謝す、謙短」金聲漏盡き、玉潤香終ふ、
傷情」芳涼竭き易く、玉井先づ窮る、傷遊」秦庭に猛
を奮ひ、漢室に雄を馳す、先づ寶劍を持し、卻つて烏弓
を挽く、平生怒を好み、性を立て、戎に従ふ、才、白馬
に非ず、智、青牛を關す、謙短」簷前に花笑ひ、戶外に鶯嬌
ぶ、花園に駕を命じ、綺殿に相招く、彈琴の弱腕、妙舞
の纖腰、妓女」言を興して嗚咽し、語を發して號咷す、

吳刀騎 池傍寄意折藕相嫌蓮 魚燈見

夜鶴燭明宵飲 關山迢迢津路遙遙移

長安遠遠白日迢迢 馳輪漢室策馬胡橋

終軍奔帛司馬題橋求 心存驥尾意託

鴻毛求

秋意

火雲將闕水月翻明 錦霞朝暝碧霧宵消

晨看度鴈夜視飛螢 燈來若月火度如星

金風乍動毅袖時輕 花影玉苑月落

金城遊 鴻辭漢沼燕別吳庭別 秦宮振

響漢室揚名英 燈前滅影燭下流形遊

龍門泣淚馬邑悲鳴從 啼看繡帳泣望花

屏情 能粧面貌巧畫娥眉人 能歌緩唱

妙舞腰輕 蒲桃我酌竹葉君傾樂 蓬門

「歌は破劍を持し、舞は吳刀を抜く」(劍騎) 「池傍に意を寄せ、藕を折つて相嫌ふ」(採蓮) 「魚燈夜に見り、龍燭宵に明にす」(夜飲) 「關山迢々たり、津路遙々たり」(遠移) 「長安遠々たり、白日迢々たり」 「輪を漢室に馳せ、馬を胡橋に策つ」 「終軍、帛を奔て、司馬、橋に題す」(求遷) 「心、驥尾に存し、意、鴻毛に託す」(求遷)

秋意

「火雲將に闕んとして、水月翻つて明か」 「錦霞朝に暗く、碧霧宵消す」 「晨に度鴈を看て、夜、飛螢を視る」 「燈來つて月の若く、火度つて星の如し」(秋夜) 「金風乍ち動き、毅袖時に輕し」 「花は玉苑に影し、月は金城に落つ」(傷遊) 「鴻は漢沼を辭し、燕は吳庭に別る」(怨別) 「秦宮に響を振ひ、漢室に名を揚ぐ」(英名) 「燈前に影を滅し、燭下に形を流く」(傷遊) 「龍門に泣淚し、馬邑に悲鳴す」(從我) 「啼いて繡帳を看、泣いて花屏を望む」(園情) 「能く面貌を粧ひ、巧に娥眉を畫く」(美人) 「能歌緩く唱へ、妙舞腰輕し」 「蒲桃は我酌み、竹葉は君傾く」(樂飲) 「蓬門に影を匿し、

匿影、番騰藏形、隠士○隠、舊本作匿、今據古寫本、正、關舊本作、隱、今正

桑中遺意、漢側留情、追朋阮籍、命友劉靈

士飲 遲遲璧玉、映映羅雲、鴻歸熠燿、鶴度

繽紛、蟲鳴東園、蟬叫西園、風高寒邑、日

慘幽關、○按、寒邑、不對幽關、疑馬邑訛、龍城對馬邑、或句往往散見下方遊

風索索、遊水渾渾、花影下蔡、木落平原、

龍城念子、馬邑思君、三清滿棹、九醞盈樽、

宋蒲桃澗澗、竹葉氣氤、鳴弦厲寒、佩劍

龍門、心怨憤憤、眼淚渾渾、意心羅天地、

意網乾坤、士晨招公子、夕餞王孫、遊山

鏡日暗、嶺上雲昏、山行○舊本境傍書、傍字古寫本作傍風

驚樹動、水激雷奔、山脚躡三徑、涉獵幽蹊、

羅雲霧靄、玉露凄凄、蟬鳴飲露、燕罷銜泥、

登山雉喚、入谷猿啼、山摧撤夜泣、帳望孤

文鏡秘府論地卷

蹙臍に形を藏す(隱士)「桑中に意を遣り、漢側に情を留

む」「朋を追ふ阮籍、友を命ず劉靈(飲士)」「遍々たる壁

玉、映々たる羅雲、鴻、つて熠燿たり、鶴度つて繽紛た

り」「蟲は東園、蟬は西園に叫ぶ」「風は寒邑に高

く、日は幽關に慘たり」「遊風索々たり、遊水渾々たり」

「花は下蔡に影み、木は平原に落つ」「龍城に子を念ひ、馬

邑に君を思ふ」「三清棹に滿ち、九醞樽に盈つ(未飲)

「蒲桃澗澗、竹葉氣氤たり」「弦を雁塞に鳴し、劍を龍門に

佩ぶ」「心怨憤々、眼淚渾々たり(愁意)」「心は天地を羅

し、意は乾坤を網す(雄士)」「晨に公子を招き、夕に王孫に

餞す(遊遇)」「山境日暗く、嶺上雲昏し(山行)」「風驚

き樹動き、水激し雷奔る(山行)」「三徑に脚躡し、幽蹊に涉

獵す」「羅雲霧々、玉露凄々たり」「蟬鳴いて露を飲み、燕

罷心(泥を銜む)」「山に登れば雉喚び、谷へ入れば猿啼

棲怨 山斜馬惑、水曲人迷、金風動壁、桂
 月宵低、風飄曲澗、水噓長溪、山行 無方、日
 暗、有意雲梯、求上 三虞風一、五百聲齊、美人
 揮戈出塞、拔劍龍蹊、從戎 風飄綺袖、日照金
 堤、美人 衡門寂寂、白杜栖栖、朝瞻澗雉、曉
 候山雞、開門出獻、閉戶酬稽、昏昏綺帳、
 寂寂蘭閨、怨 朝悲婦鼓夕泣、搖鞞、從戎
帥 珠星皎皎、璧月朧朧、風飄紫栢、日翳
 青桐、新花罷綠、晚藥開紅、花飛木悴、葉
 落條空、秋天秋夜、秋月秋蓬、秋池秋鴈、
 秋渚秋鴻、朝雲漠漠、夕雨矍矍、○樂疑
 猿啼紫栢、蟬泣青松、山行 時迎牧子、乍送田
 翁、南池養鴈、北澤呼鴻、歌迎白鶴、舞送
 玄龍、愁 兒栽白蘼、女蒔青葱、田家 千愁入

て馬惑ひ、水曲りて人迷ふ、「金風壁に動き、桂月宵低る」
 「風は曲澗に飄り、水は長溪に噓ふ」(山行) 「日暗に方無
 し、雲梯に意有り」(求上) 「三虞風一に、五百聲齊し」(美人)
 「戈を揮ふて塞を出で、劍を抜いて龍蹊にす」(從戎) 「風は
 綺袖を飄し、日は金堤を照す」(美人) 「衡門寂々、白杜栖々
 たり」 「朝に澗雉を瞻、曉に山雞を候す」 「門を開いて獻を
 出だし、戸を閉ちて稽に酬ゆ」 「昏昏たる綺帳寂々たる
 蘭閨」(蘭怨) 「朝悲鼓を婦し、夕泣鞞を挿す」(從戎) 「珠星
 皎々、璧月朧々たり」 「風は紫栢に飄り、日は青桐に翳す」
 「新花緑を罷め、晚藥紅を開く」 「花飛び木悴け、葉落ち條
 空し」 「秋天秋夜、秋月秋蓬」 「秋池の秋雁、秋渚の秋鴻」
 「朝雲漠々、夕雨矍々たり」 「猿は紫栢に啼き、蟬は青松に
 泣く」(山行) 「時に牧子を迎へ、乍ち田翁を送る」 「南池
 に雁を養ひ、北澤に鴻を呼ぶ」 「歌は白鶴を迎へ、舞は玄
 龍を蒔る」(愁意) 「兒は白蘼を栽え、女は青葱を蒔る」(田

「願、百恨填胸〔愁〕、心悲、易足、淚眼難供、本

稱桃花、今謝芙蓉〔傷遊〕、燈暉幕靜、

月照人空、眉如綠葉、頰頰花紅〔美人〕、呼歌

八表吐吒三公〔騎〕、弓穿白虎、手制黃龍、

俱傾鄭蓋、共覆堯鍾、躊躇泊上、搔手房櫺、

行如月度、立若花叢、

冬意

瓊梅落葉、玉樹凋柯、冰開鴈沼、凍結鴛河、

龍城風少、馬邑寒多〔舊本邑作色、今據古寫本正〕、重帷

豔錦、複帳珠羅、雲凝五岫、霧結三河、宮

商韻動、律呂音和〔樂〕、方筵趙舞、曲宴韓娥、

妓〔女〕、伴唄怨少、笑語嬌多〔夜〕、花仙妙舞、月

燭清歌、千門涉獵、萬戶經過、持觴隱亞、

促酒嵬峨〔飲〕、松蹊萬仞、石水千過〔山〕、馳

家「千愁臆に入り、百恨胸に填つ」〔愁意〕 心悲足り易

く、淚眼供し難し」「本と桃花を稱す、今芙蓉を謝す」〔傷

遊〕「燈暉いで幕靜に、月照して人空し」「眉は綠葉の如

く、頰は花紅に頰せり」〔美人〕「八表に呼歌し、三公に吐吒

す」〔劍騎〕「弓に白虎を穿ち、手は黃龍を制す」「俱に鄭

蓋を傾け、共に堯鍾を覆す」「泊上に躊躇し、房櫺に搔手

す」「行くと月の度るが如く、立つと花の叢るが若し」

冬意

「瓊梅葉を落し、玉樹柯を凋む」「冰は雁沼に開き、凍は鴛

河に結ぶ」「龍城風少く、馬邑寒多し」「重帷の豔錦、複帳

の珠羅」「雲は五岫に凝り、霧は三河に結ぶ」「宮商韻動

き、律呂音和す」〔樂〕「方筵の趙舞、曲宴の韓娥」〔妓女〕

「伴唄怨少く、笑語嬌多し」〔夜〕「花仙の妙舞、月燭の清

歌」「千門涉獵し、萬戶經過す」「觴を持する隱亞、酒を促

する嵬峨たり」〔飲〕「松蹊萬仞、石水千過」〔山〕「羣を馳

響響、轉、蹀、馬、聲、河、盧龍、惆、悵、碣、石、呼、嗟、從
 夢、憐、是、笑、得、龍、由、歌、人、美、三、危、怨、少、九、折、悲
 多、龍泉、乍、拭、巨、闕、新、磨、騎、鵲、枯、藤、望、鬱、落
 樹、希、榮、寒、雲、夜、斂、苦、霧、朝、驚、燕風、蕭、蕭、落
 借、霧、縱、橫、寒、朝、促、日、冷、夜、延、更、寒、雲、寒
 晴、寒、夜、寒、明、臨池、月、出、照、日、花、生、金、明、才
 非、郭、太、智、謝、荀、卿、意、謙、遊、燕、獨、步、入、洛、孤、行
 眉、間、柳、翠、頰、上、花、生、徑中、遙、見、路、上、逢、迎
美、人、西、施、越、弟、褒、姒、周、京、貴、人、胡、笳、切、響、寒
 笛、哀、鳴、從、戎、征、雲、乍、舉、陳、火、初、驚、從、戎、愁、雲
 夕、起、苦、霧、朝、興、羊、腸、巨、越、鹿、徑、難、行、從、戎
 金、壺、獸、炭、玉、頂、龍、鑑、龍門、日、慘、兔、苑、風、暖
 龍、門、水、凍、兔、苑、翻、凝、園、含、白、雪、池、結、清、水、
冰、晶、水、凝、寒、朝、巨、度、寒、夜、難、勝、雲、含、十、嶺、

せ響を響し、馬を蹀かし河を聲らす。「盧龍に惆悵し碣石に呼嗟す(從戎)」「憐を愛り是れ笑ふ龍を得て由つて歌ふ(美人)」「三危怨少く九折悲多し」。「龍泉乍ち拭ひ、巨闕新に磨ぐ(劍騎)」「枯藤鬱を望み、落樹榮を希ふ」「寒雲夜斂り、苦霧朝に驚く」「燕風蕭々、借霧縱横たり」「寒朝、日を促し、冷夜更を延ぶ」「寒雲寒くして暗く、寒夜寒くして明かなり」「池に臨めば月出で、日を照せば花生ず(明金)」「才は郭太に非ず、智は荀卿に謝す(謙意)」「燕に遊んで獨歩し、洛に入つて孤行す」「眉間に柳翠に、頰上に花生ず」「徑中に遙に見、路上に逢迎す(美人)」「西施越弟、褒姒周京(貴人)」「胡笳切響、寒笛哀鳴す(從戎)」「征雲乍ち舉り、陳火初めて驚く(從戎)」「愁雲夕に起り、苦霧朝に興る」「羊腸越へ巨く、鹿徑行き難し(從戎)」「金壺の獸炭、玉頂の龍鑑」「龍門日慘に、兔苑風暖かなり」「龍門水凍り、兔苑翻つて凝る」「園は白雪を含み、池に清水

日照九層、埋蹤五命、匿壽三徵、士平原
 宋鶴、上苑梁鴈、田家悲看花燭、泣望蘭燈、細
 當年舞寵、今日夫憎、妾弄金山忽倒、玉嶺翻
 崩、遊巫山忽倒、玉岫翻崩、遊悲逢郭火、
 愧見孫燈、德過松間霧起、栢上雲騰、妍無
 常闕、笑罷金凌、遊林玄霧映、樹白雲飛、
 寒鴻寒嘯、寒鴈寒叫、玄風振野、白霧張林、
 重帷雪入、複幔霜侵、雕薪鏤火、風幕鴛衾、
 車經嶺峴、馬度嶽峯、山行笛抽風響、笛發龍
 吟、樂蒲桃我酌、竹葉君斟、樂從時散誕、
 與日浮沈、逸心懷金鶴起、蘊玉龍潛、士君
 爲栢意、妾作松心、附意綢繆稱昔、態猶云今、
 雙并傾看剗背、舞拍陶琴、松長日少、澗曲
 多陰、山行

文鏡秘府論地卷

を結ぶ。「寒朝度り巨く、寒夜勝へ難し」「雲は十嶺を含み、日は九層を照す」「蹤を五命に埋み、壽を三徵に匿す」(隱士)「平原の宋鶴、上苑の梁雁(田家)」「悲んで花燭を看、泣いて蘭燈を望む(困怨)」「當年の舞寵、今日の夫憎(弄妾)」「金山忽ち倒れ、玉嶺翻つて崩る(傷遊)」「巫山忽ち倒れ、玉岫翻つて崩る(傷遊)」「悲んで郭火に逢ひ、愧ぢて孫燈を見る(過徳)」「松間霧起り、栢上に雲騰る」「妍常闕無く、笑金凌を罷む(傷遊)」「林玄に霧映じ、樹白くして雲飛ぶ」「寒鴻寒く嘯き、寒鴈寒く叫ぶ」「玄風野に振ひ、白霧林に張れり」「重帷雪入り、複幔霜侵す」「雕薪鏤火、風幕鴛衾」「車嶺峴を經、馬嶽峯を度る(山行)」「笛は風響を抽き、笛は龍吟を發す(歡樂)」「蒲桃は我れ酌み、竹葉は君斟む(樂飲)」「時に從ふて散誕、日と浮沈す(逸心)」「金を懷いて鶴のごとく起ち、玉を蘊んで龍のごとく潛む(隱士)」「君は栢意を爲せ、妾は松心を作さん(附意)」「綢繆昔を稱し、態猶今を云ふ(弄奴)」「傾て剗背を看、舞て陶琴を拍つ」「松長して日少く、澗曲つて陰多し(山行)

山意

嶽岑嶋宇、嶋螺嵯峨、○字書無乎、平、疑、春
 禽嘲晰、夏鳥嘍囉、林高日少、樹密風多、
 青春鳥睥、朱夏禽歌、人呼嶺應、馬叫山和、
 浮丘涉獵、玉晉倒過、○舊本倒、旁書經字、時稱風穴、
 亦謂龍窠、開雲若錦、引霧如羅、能流萬
 水、巧納千河、朝聞海嘯、夜聽禽歌、黃熊
 西麓、白虎東河、望之鬱鬱、盼之娥娥、涌
 川開瀆、納海吞河、唐蒙附栢、松桂女羅、
 巖巖昨落、嚙啾啾啾、腰前萬劫、帶后千松、
 齊君惘默、鄭后嗜嗜、千尋嶺巖、萬仞峯峩、
○舊本、嶺巖作、嶺巖、非也、古、寫本作、嶺巖、今定爲、嶺巖、或藏棲鳳、或隱遊
 龍、魚鱗百疊、鳥翅千里、猿啼北岫、雉鳴
 南峯、招河引濟、納海吞江、時逢赤子、數

山意

「嶽岑嶋宇、嶋螺嵯峨たり」 「春禽嘲晰、夏鳥嘍囉たり」
 「林高く日少し、樹密に風多し」 「青春鳥睥し、朱夏禽歌ふ」
 「人呼べば嶺應へ、馬叫べば山和す」 「浮丘涉獵し、玉晉倒
 過す」 「時に風穴と稱し、亦龍窠と謂ふ」 「雲を開く錦
 の若く、霧を引く羅の如し」 「能く萬水を流し、巧に千
 河を納る」 「朝に海嘯を聞き、夜禽歌を聴く」 「黃熊の西
 麓、白虎の東河」 「之れを望めば鬱々たり、之れを盼れば
 娥々たり」 「川を涌し瀆を開き、海を納れ河を吞む」 「唐
 蒙附栢、松桂女羅」 「巖巖昨落、嚙啾啾啾たり」 「腰前萬
 劫、帶後千松」 「齊君惘默して、鄭后嗜嗜す」 「千尋嶺巖、萬
 仞峯峩たり」 「或は棲鳳に藏れ、或は遊龍に隠る」 「魚鱗
 百疊、鳥翅千里なり」 「猿は北岫に啼き、雉は南峯に鳴く」
 「河を招き濟を引き、海を納れ江を吞む」 「時に赤子に逢

值黃公、飛廉出軸、屏翳昇峯、豐隆南北、
 列缺西東、春林照灼、夏卉青葱、凌明巧
 更、負局遊蹤、陽抽雪白、陰放花紅、玄犀
 競入、白虎爭居、黃熊東越、赤豹西踰、狂
 狝殞命、狝狝殘驅、巖棲六駿、軸隱騶虞、
 時看麋鹿、乍見駒駘、猿公驪跳、獐子趁起、
 文麟重躋、巨象踟躕、○舊本麟作驪、今據古寫本正、 神能
 致雨、湧氣城朱、舒陽罄絕、奮足騰虛、歌
 鸞栖蔭、舞鳳陽居、天睢頰頰、鳩鵲翔翔、○舊本、
本天旁書王字、 鸚鵡瑤體、翡翠花光、○舊本、
古寫本作五、 山鷄或隱、澤雉翻藏、○舊本、
誤、今正、廣古寶字、又 孤鴻拂軸、張鴈遊崗、四文爲體、五德爲章、
 開弓睽眼、見彈侏張、能依寒暑、善逐陰
 陽、衝蘆蕉迫、刷羽神惶、遊燕爲侶、出塞成行、

文鏡秘府論地卷

七

ひ、數、黃公に値ふ。「飛廉軸を出で、屏翳峯に昇る。」「豐
 隆南北し、列缺西東す。」「春林照灼、夏卉青葱たり。」「明を
 凌いで巧更し、局を負ふて遊蹤す。」「陽は雪の白を抽き、
 陰は花の紅を放つ。」「玄犀競ひ入り、白虎争ひ居る。」「黃
 熊東に越へ、赤豹西に踰ゆ。」「狂々命を殞し、狝々驅を殘
 ふ。」「巖に六駿を棲し、軸に騶虞を隱す。」「時に麋鹿を看、
 乍ち駒駘る。」「見を猿公驪跳し、獐子趁起す。」「文麟重躋、
 巨象踟躕す。」「神能く雨を致し、湧氣朱を城く。」「陽を舒
 べて罄絶へ、足を奮ふて虚に騰る。」「歌鸞栖蔭れ、舞鳳陽
 居る。」「天睢頰頰し、鳩鵲翔翔す。」「鸚鵡瑤體、翡翠花
 光。」「山鷄或は隱れ、澤雉翻つて藏る。」「孤鴻軸を拂ひ、張
 鴈崗に遊ぶ。」「四文體を爲し、五德章を爲す。」「弓を開い
 て睽眼し、彈を見て侏張す。」「能く寒暑に依り、善く陰陽
 を逐ふ。」「蘆を衝んで意迫り、羽を刷して神惶る。」「遊燕
 侶を爲し、塞を出で、行を成す。

洋、聽琴踊躍、逐餌低昂、時逢豫子、或值
 文王、冠山跳吼、呼舳翔翔、精如鬼影、目
 似鳥光、

雪意

光含秋月、麗若春霞、飄飄天際、散漫欹斜、
 從風玉礫、逐吹瓊沙、朝疑柳絮、夜似梅花、
 花生桂苑、粉落田家、看鴻入花、望蝶歸華、
 燕人惘默、漢使咨嗟、同視瑞鳥、共眺仙車、

○古詩本
 原作、

寒添薄帳、冷足單家、平原藥落、

上苑花開、隨風宛轉、逐吹徘徊、朝光玉
 殿、夜照瓊臺、歸林蝶去、入苑鴻來、登絃
 曲美、入調聲哀、班婕扇至、洛媛裙開、
 凝階似粉、凍水如梅、花飛染樹、藥落遙天、
 朝看玉扇、夜望瓊塵、依樓玉砌、入野銀田、

○舊本
 作、

291

文鏡秘府論地卷

「類尾洋々たり」「琴を聽いて踊躍し、餌を逐ふて低昂す」「時に豫子に逢ひ或は文王に値ふ」「山に冠して跳吼し、舳を呼んで翔翔す」「精は鬼影の如く、目は鳥光に似たり」

雪意

「光は秋月を含み、麗は春霞の若し」「天際に飄飄し、散漫として欹斜す」「風に從ふ玉礫、吹を逐ふ瓊沙」「朝には柳絮かと疑ひ、夜は梅花に似たり」「花は桂苑に生じ、粉は田家に落つ」「鴻の花に入るを看蝶の華に歸るを望む」「燕人惘默し、漢使咨嗟す」「同じく瑞鳥を視、共に仙車を眺む」「寒、薄帳に添ひ、冷、單家に足る」「平原に藥落ち、上苑に花開く」「風に隨ふて宛轉し、吹を逐ふて徘徊す」「朝は玉殿に光り、夜は瓊臺を照す」「林に歸り蝶去り、苑に入つて鴻來る」「絃に登つて曲美、調に入つて聲哀し」「班婕扇至り、洛媛裙開く」「階に凝る粉に似たり、水に凍る梅の如し」「花飛んで樹を染め、藥落ちて天に遙か」「朝に玉扇を着、夜は瓊塵を望む」「樓に依

霏霏戶際、皎皎簾前、雰雰入水、沫沫登山、
 還同碎玉、不異銀田、先滋粟麥、亦表豐年、
 芬芳入扇、婉約登絃、林間皎潔、月下光鮮、
 雨意

山雲靄靄、海氣濛濛、投林亂鳥、入塞迷龍、
 玉女之電、美人之虹、夜瞻神女、朝看海童、
 鸞崗住栢、鳳嶺傾松、○齊本崗作「嵐、今據古寫本正、滂沱入
 海、滄溟歸江、南堂草碧、北苑花紅、朝瞻
 白馬、夕眺玄龍、霞遊桂棟、礎潤蘭房、林
 風窈窕、山石玄黃、不殊京縣、還如洛陽、
 霖冷檀邑、霖霖金鄉、○齊本金作「金、今據古寫本正、分遊
 洞澗、派入枯塘、浮池汗汗、覆沼湯湯、波
 中月動、水上雲蕩、宵埋鬼影、晝掩龍光、
 田農獻疋、治粟酬觴、○按疋、雅古字、能除蜀忿、巧

る玉砌、野に入る銀田」「戸際に霏々、簾前に皎々たり」
 「雰々として水に入り、沫々として山に登る」「還つて碎
 玉に同じ、銀田に異ならず」「先づ粟麥を滋し、亦豊年を
 表す」「芬芳扇に入り、婉約絃に登る」「林間皎潔、月下光
 鮮」
 雨意

「山雲靄々、海氣濛々たり」「林に投ずる亂鳥、塞に入る迷
 龍」「玉女の電、美人の虹」「夜は神女を瞻、朝に海童を
 看る」「鸞崗栢に住み、鳳嶺松を傾く」「滂沱として海に
 入り、滄溟として江に歸る」「南堂草碧に、北苑花紅なり」
 「朝に白馬を瞻、夕に玄龍を眺む」「霞は桂棟に遊び、礎は
 蘭房を潤す」「林風窈窕、山石玄黄なり」「京縣に殊なら
 ず、還つて洛陽に如く」「檀邑に霖冷、金郷に霖深たり」
 「分れて洞澗に遊び、派して枯塘に入る」「浮池汗々、覆沼
 湯々たり」「波中に月動き、水上に雲蕩る」「宵は鬼影を
 埋め、晝は龍光を掩ふ」「田農疋を獻し、治粟、觴を酬ゆ」
 「能く蜀の忿を除き、巧に齊の邊を滅す」「雲斗上に開き、

滅齊邊、雲開斗上月、度星傍、平原沛沛、
下濕湯湯、蕃人西怨、姬容東傷、青牛道
絕、白馬雲行、澆莫鳥吼、樹液龍驚、添桃
葉淨、灌李花明、波中月出、浪裏雲生、
風意

遊江入漢、拂水搖臺、飄飄響竹、涉獵欵梅、
從花宛轉、逐葉徘徊、逕窻燭滅、入戶燈摧、
從絃透管、合律應灰、過林響切、入樹聲哀、
昇臺帳卷、入戶簾開、難能葉舞、怨則林頽、
飄飄日去、颯颯時來、無形無像、能重能輕、
冬涼白馬、夏暖朱青、八方異號、四序殊名、
銅禽已舉、石燕翻容、偏從暈月、好逐箕星、
鸞屬馬叫、鸞屬雷聲、吹天西側、鼓地東傾、
能馳嘯馬、巧遊飛車、指南指北、若有若無、

月、星傍に度る、平原沛々、下濕湯々たり、蕃人西に怨み、
姬容東に傷む、「青牛道絶え、白馬雲行く」、「澆莫に鳥吼、
樹液に龍驚く」、「桃に添へば葉淨く、李に灌げば花明
か」、「波中に月出で、浪裏に雲生す」

風意

「江に遊び漢に入る、水を拂ひ臺を揺す」、「飄飄として竹
に響き、涉獵として梅に欵つ」、「花に従ふて宛轉、葉を逐
ふて徘徊す」、「窓を逕てて燭滅し、戸に入つて燈摧く」、
「絃に従ひ管を逐ひ、律に合し灰に應ず」、「林を揺ぎて響
切、樹に入て聲哀し」、「臺に昇り帳卷き、戸に入て簾開く」、
「難きは能く葉舞ひ、怨は則ち林頽る」、「飄々として日
に去り、颯々として時に來る」、「形も無く像も無し、能く
重く能く輕し」、「冬は白馬に涼しく、夏は朱青に暖す」、
「八方、號を異にし、四序、名を殊にす」、「銅禽已に舉り、石燕
翻つて零つ」、「偏に暈月に従ひ、好んで箕星を逐ふ」、「鸞屬
として馬叫び、鸞屬として雷驚く」、「天に吹けば西に傾

傾林若實、倒薄疑虛、蓬崖自卷、入野由舒、
 昇沉烈烈、上下徐徐、遙過芍藥、參次芙蓉、
 燈前舞鳥、燭下吟鳥、

七六
 ち、地に鼓すれば東に傾く。「能く嘯馬を馳せ、巧に飛車を運らす」。「南を指し北を指し、有るが若く無きが若し」。「林を傾ければ實の若く、薄を倒せば虚かと疑ふ」。「崖に逢ふて自ら卷き、野に入つて由て舒ぶ」。「昇沈烈々として、上下徐々たり」。「遙に芍藥を過ぎ、參へて芙蓉を次ぐ」。「燈前の舞鳥、燭下の吟鳥」

7 文鏡祕府論 東

金剛峯寺禪念沙門 遍照金剛 撰

○論對○此下當有二十九種對、
兼札七種言句例之日。

或曰、文詞妍麗、良由對屬之能、○兼本屬、
作曉今正、筆

札雄通、寔安施之巧、若言不對、語必徒申、韻

而不切、煩詞枉費、元氏云、易曰、水流濕、火就

燥、雲從龍、風從虎、書曰、滿招損謙受益、此皆

聖作切對之例也、況乎庸才凡調而對、而不

求切哉、余覽沈陸王元等詩格式等、出沒不

同、今并其同者、撰其異者、○撰、當
作通、都有二十

九種對、具出如後、其賦體對者、合彼重字、雙

聲疊韻三類、與此一名、或疊韻雙聲各、開一

○對を論ず

或ひと曰く、文詞の妍麗は、良に對屬の能に由り、筆札の雄通は、寔に安施の巧なり、若し言對せざれば、語必ず徒に申ぶ、韻にして切ならずれば、煩詞枉げて費やす、元氏云ふ、易に曰く、水は濕へるに流れ、火は燥けるに就く、雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ、書に曰く、滿は損を招き、謙は益を受くと、此れ皆聖作切對の例なり、況や庸才凡調にして對し、而かも切なるを求めざるをや、余、沈陸王元等の詩の格式等を覽るに、出沒同じからず、今其の同じき者を棄て、其の異なる者を撰ぶに、都て二十九種の對有り、具に出すこと後の如し、其の賦體の對する者は、彼の重字、雙聲疊韻の三類を合せて、此れと名を一にす、或は疊韻、雙聲各、一對を開く、之れを賦の體に略す、或は重字を以て聯綿對に屬す、今開合して、俱に擧げて、彼の三名

對略之賦體、或以重字屬聯綿對、今者開合俱舉存彼三名、後覽達人、莫嫌煩冗。

○二十九種對

- 一曰、的名對、亦名正名對、亦名正對、 二曰、隔句對
- 三曰、雙擬對、 四曰、聯綿對、 五曰、互成對
- 六曰、異類對、 七曰、賦體對、 八曰、雙聲對
- 九曰、疊韻對、 十曰、迴文對、 十一曰、意對

右十一種古人同出斯對。

- 十二曰、平對、 十三曰、奇對、 十四曰、同對、
- 十五曰、字對、 十六曰、聲對、 十七曰、側對、

右六種對出元兢髓腦。

- 十八曰、鄰近對、 十九曰、交絡對、

- 廿曰、當句對、 廿一日、含境對、

- 廿二曰、背體對、 廿三日、偏對、

を存す、後覽の達人、煩冗を嫌ふこと莫れ。

○二十九種對

- 一に曰く、的名對(亦正名對と名づく、亦正對と名づく)三に曰く、隔句對、三に曰く、雙擬對、四に曰く、聯綿對、五に曰く、互成對、六に曰く、異類對、七に曰く、賦體對、八に曰く、雙聲對、九に曰く、疊韻對、十に曰く、迴文對、十一に曰く、意對。

右十一種、古人同じく斯の體を出だす。

- 十二に曰く、平對、十三に曰く、奇對、十四に曰く、同對、十五に曰く、字對、十六に曰く、聲體、十七に曰く、側體、

右六種對は、元兢の髓腦に出づ。

- 十八に曰く、鄰近體、 十九に曰く、交絡對、二十に曰く、當句對、二十一に曰く、含鏡對、二十二に曰く、背體對、二十三

- に曰く、偏對、二十四に曰く、雙虛實體、二十五に曰く、假

廿四曰、雙虛實對、廿五曰、假對、

右八種對出、皎公詩議、

廿六曰、切側對、廿七日、雙聲側對、

廿八曰、疊韻側對、

右三種出、崔氏唐朝新定詩格、

二十九曰、總不對對、

第一的名對、又名正名對、又名二的名對者、正對、又名切對、

也、凡作文章、正正相對、上句安天、下句安地、

上句安山、下句安谷、上句安東、下句安西、上

句安南、下句安北、上句安正、下句安斜、上句

安遠、下句安近、上句安傾、下句安正、如是之

類、名爲的名對、

初學作文章、須作此對、然後學餘對也、或曰、

天地、日月、好惡、去來、輕重、浮沈、長短、進退、方

體、

右八種對は、皎公の詩議に出づ、

二十六に曰く、切側體、二十七に曰く、雙聲側對、二十八に

曰く、疊韻側體、

右三種は、崔氏の唐朝新定詩格に出づ、

二十九に曰く、總不對對、

第一的名對、又名正名對と名づく、又、正對と名づく、又、切

對と名づく、的名對とは、正なり、凡そ文章を作るには、正

々に相對す、上句に天を安ければ、下句に地を安く、上句に

山を安ければ、下句に谷を安く、上句に東を安ければ、下句に

西を安く、上句に南を安ければ、下句に北を安く、上句に正

を安ければ、下句に斜を安く、上句に遠を安ければ、下句に近

を安く、上句に傾を安ければ、下句に正を安く、是くの如き

の類を、名づけて的名對と爲す、

圓大小明暗、老少、兜傳俯仰、壯弱往還清濁、南北東西、如此之類名、正對。詩曰、

東園青梅發、西園綠草開、砌下花徐去、階前絮緩來。

釋曰、上二句中、東西、是其對、園園、是其對、青綠、是其對、梅草、是其對、開發、是其對、下二句中、階砌、是其對、前下、是其對、花絮、是其對、徐緩、是其對、來去、是其對、如此之對類、名爲的名對。又曰、

手披黃卷盡、目送白雲征、玉霜摧草色、金風斷雁聲、片雲愁近戍、半月隱遙城。

釋曰、上有手披、下有目送、上黃下白、上玉下金、故曰的名對。又曰、

雲光鬢裏薄、月影扇中新、年華與壯面、

〔舊本征作往、今從抄〕

去來輕重、浮沈長短、進退方圓、大小明暗、老少、兜傳、俯仰、壯弱、往還、清濁、南北東西、此くの如きの類を、正對と名づく、詩に曰く

〔東園に青梅發き、西園に綠草開く、砌下に花徐く去り、階前に絮緩く來る。〕

釋に曰く、上の二句の中、東西は、是れ其の對、園園は、是れ其の對、青綠は、是れ其の對、梅草は、是れ其の對、開發は、是れ其の對、下二句の中、階砌は、是れ其の對、前下は、是れ其の對、花絮は、是れ其の對、徐緩は、是れ其の對、來去は、是れ其の對、此くの如きの對の類を、名づけて的名對と爲す、又曰く

〔手に黃卷を披いて盡す、目に白雲を送つて征く、玉霜は草色を摧き、金風は雁聲を斷つ、片雲近戍に愁ひ半月遙城に隱る。〕

釋に曰く、上に手披あり、下に目送あり、上に黃、下に白、上に玉、下に金、故に的名對と曰ふ、又曰く

〔雲光は鬢裏に薄く、月影は扇中に新なり、年華と壯面と、

共作「一芳春」。

釋曰、上有雲光、下有月影、落句雖無對、但結成上意而已、自餘詩皆效此、最爲上。

又曰、

送酒東南去、迎琴西北來。

釋曰、迎送詞、翻去來義背、下言西北、上說東南、故曰正名也。又曰、

鮮光葉上動、豔彩花中出、疎桐映、繡閣、

密柳、蓋、荷池。

釋曰、持豔偶鮮、用光匹彩、疎桐密柳之相、訓、故受、的、名、○舊本、受、勞、豔、愛、字、疑、爲、字、誤、又曰、

日月光、天德、山河壯、帝居。

有虛名、實名、上對、實名也。又曰、

恆斂千金笑、長垂雙玉啼。

共に一の芳春を作す。

釋に曰く、上に雲光あり、下に月影あり、落句對無しと雖も、但だ上の意を結成するのみ、自餘の詩、皆此れに效ふ、最も上と爲す。又曰く、

「酒を送つて東南に去る、琴を迎へて西北に来る」

釋に曰く、迎送詞は翻して、去來義背けり、下に西北を言ひ、上に東南を説く、故に正名と曰ふなり。又曰く、

「鮮光葉上に動き、豔彩花中より出づ、疎桐繡閣に映じ、密柳河池を蓋ふ」

釋に曰く、豔を持して鮮に偶し、光を用ひて彩に匹す、疎桐と密柳と之れ相酬ゆ、故に的名を受く。又曰く、

「日月光に光り、山河帝居に壯んなり」

虛名、實名あり、上は實名に對するなり。又曰く、

「恆に千金の笑を斂め、長く雙玉の啼を垂る」

元兢曰、正對者、若堯年舜日。

堯舜、皆古之聖君、名相敵、此爲正對、若上句用聖君、下句用賢臣、上句用鳳、下句選用鸞、皆爲正對也、如上句用松桂、下句用蓬蒿、松桂是善木、蓬蒿是惡草、此非正對也。

第二、隔句對、隔句對者、第一句與第三句對、第二句與第四句對、如此之類、名爲隔句對。詩曰、

昨夜越溪難、含悲赴上蘭、今朝逾嶺易、抱笑入長安。

釋曰、第一句昨夜與第三句今朝對、越溪與逾嶺、是對、第二句含悲與第四句抱笑、是對、上蘭與長安對、就是事對、不是字對。

元兢曰、正對とは「堯年舜日」の若し。

堯舜は、皆古の聖君にして、名相敵す、此れを正對と爲す、若し上句に聖君を用ひ、下句に賢臣を用ふ、上句に鳳を用ひ、下句に鸞を用ふ、皆正對と爲すなり、如し上句に松桂を用ひ、下句に蓬蒿を用ふ、松桂は是れ善木、蓬蒿は是れ惡草なり、此は正對に非ず。

第二、隔句對、隔句對とは、第一句と第三句と對し、第二句と第四句と對す、此くの如きの類を、名づけて隔句對と爲す。詩に曰く

「昨夜溪を越ゆること難し、悲を含んで上蘭に赴く、今朝嶺を逾ゆること易し、笑を抱いて長安に入る。」

釋に曰く、第一句の昨夜、第三句の今朝と對す、越溪と逾嶺とは對す、第二句の含悲と、第四句の抱笑とは對す、上蘭と長安と對す、故に是れ事の對、是れ字の對ならず、此く、如きの類を、名づけて隔句對と爲す。

如此之類、名爲隔句對。又曰、

相思復相憶、夜夜淚沾衣、空悲亦空歎、

朝朝君未歸。

釋曰、兩相對於兩空、○舊本兩旁書三字、隔以沾衣

之句、朝朝偶、夜夜、越以空歎之言、從首至

末、對屬間來、故名隔句對。又曰、

月映茶黃錦、豔起桃花頰、風發蒲桃繡、

香生雲母帖。又曰、

翠苑翠叢外、單蜂拾藥歸、芳園芳樹裏、

○抄、裏作動、裏雙燕壓花飛。

釋曰、夫豔起對香生、隔以映茶黃之錦、月

錦偶風繡、又間諸雲母之帖、其雙芳燕、

匹兩翠蜂、裏外盡間成、故云隔句。又曰、

始見西南樓、纖纖如玉鈎、未映東北墀、

又曰、

「相思ふて復た相憶ふ、夜々涙衣を沾す、空し 悲み亦空しく歎す、朝々君未だ歸らず」

釋に曰く、兩相は兩空に對し、隔つるに、沾衣の句を以てす、朝々は夜々に偶ぶ、越すに空嘆の言を以てす、首より末に至り、對屬間て來る、故に隔句對と名づく、又曰く、

「月は茶黃の錦に映じ、豔は桃花の頰に起る、風は蒲桃の繡を發き、香は雲母の帖に生ず」 又曰く

「翠苑翠叢の外、單蜂藥を拾ふて歸る、芳園芳樹の裏、雙燕花を壓て飛ぶ」

釋に曰く、夫れ豔起は香生に對す、隔つるに、茶黃の錦に映するを以てす、月錦は風繡に偶す、又諸れを雲母の帖に間つ、其の雙芳と燕とは、兩翠と蜂とに匹す、裏外盡く間成す、故に隔句と云ふ、 又曰く、

「始めて西南の樓を見れば、纖々として玉鈎の如し、未だ

娟娟似蛾眉。

東北の輝に映せず、娟々として蛾眉に似たり。

第三、雙擬對、雙擬對者、一句之中所論、假

第三、雙擬對、雙擬對とは、一句の中にて論ずる所なり、

令第一字是秋、第三字亦是秋、二秋擬第二

假令へば、第一字是れ秋なれば、第三字亦是れ秋、二秋、第二字に擬す、下句も亦然り、此くの如きの類を、名づけて

字、下句亦然、如此之類、名爲雙擬對。詩曰、

雙擬對と爲す、詩に曰く、

夏暑夏不衰、秋陰秋未歸、炎至炎難卻、

「夏暑夏衰へず、秋陰秋未だ歸らず、炎至つて炎卻け難く、

涼消涼易追。○舊本兩涼字並作冷、而旁書涼字、古寫本及抄作涼、今從之、釋亦作涼。

涼消して涼追ひ易し。」

釋曰、第一句中兩夏字、擬一暑字、第二句

釋に曰く、第一句中兩の夏の字、一の暑の字に擬す、第二句中兩の秋の字、一の陰の字に擬す、第三句中兩の

中兩秋字、擬一陰字、第三句中兩炎字、擬

炎の字、一の至の字に擬す、第四中兩の涼の字、一の消の字に擬す、此くの如きの法を、名づけて雙擬對と爲す、又云ふ、

一至字、第四中兩涼字、擬一消字、如此之

法、名爲雙擬對。

又云、乍行乍理髮、○抄、或笑或看衣、

「乍ち行いて乍ち髮を理む、或は笑ひ或は衣を看る。」又云ふ、

又云、結萼結花初、飛嵐飛葉始。○按嵐字疑有誤、

「萼を結び花を結ぶの初、嵐に飛び葉を飛すの始。」

釋曰、既雙結、初、亦兩飛、帶末、宜、晝、宜、時

釋に曰く、既に雙の結も初めに居きて、亦兩の飛を末に帶たり、晝に宜しく時に宜しきの句、題す可く恰む

之句、可題可恰之論、准擬成對、故以名云

可きの論、准擬して對を成す、故に以て名づくと云ふ、

而又所雙擬爲名。

又曰、可聞不可見、能重複能輕。

又曰、議月眉欺月、論花頰勝花。

釋曰、上陳二月、○古寫本無上字、隔以眉欺、下說

雙花、○按、雙花、諸頰勝、○按、文雖再讀語必孤

來、擬用雙文、故生斯號。

或曰、春樹春花、秋池秋日、琴命清琴、酒追

佳酒、思君念君、千處萬處、如此之類名曰

雙擬對。

第四聯綿對、聯綿對者、不相絕也、一句之

中第二字第三字是重字、卽名爲聯綿對、但

上句如此、下句亦然。詩曰、

看山山已峻、望水水仍清、聽蟬蟬響急、

思卿卿別情。○舊本、上聯旁、舊字。

文鏡秘府論東卷

而して又雙擬する所を名と爲す、又曰く、

「聞く可くして見る可からず能く重く復能く輕し」又

曰く、「月を議すれば眉月を欺く、花を論すれば頰に花勝れり」

釋に曰く、上に二つの月を陳ねて、隔つるに眉欺を以

てす、下に雙の花を説きて、諸れを頰勝に稱つ、文、再讀

すと雖も、語必ず孤來す、擬するに雙文を用ふ、故に斯

の號を生ず。

或ひと曰く、春樹春花、秋池秋日、琴は清琴に命ず、酒は

佳酒を追ふ、右を思ひ君を念ふ、千處萬處、此くの如きの

類を、名づけて雙擬對と曰ふ。

第四聯綿對、聯綿對とは、相絶えざるなり、一句の中に、第

二字第三字是れ重字なるを、卽ち名づけて聯綿對と爲

す、但し上句此の如し、下句も亦然り、詩に曰く、

「山を看るに山已に峻、水を望むに水仍清し、蟬を聽くに

八五

釋曰、一句中第二字是山、第三字亦是山、

餘句皆然、如此之類名爲聯綿對。又曰、

嫩荷荷似類、○舊本嫩、今正、淺河河似帶、○舊本淺、今抄、

殘字、抄、初月月似眉、○舊本似旁書、如字、古寫本及抄作、如、

釋曰、兩荷連讀、放諸上句之中、雙月竝陳、

言之下句之腹、一文再讀、二字雙來、意涉

連言、坐、茲生號。又曰、

煙離離萬代、雨絕絕千年。

釋曰、情起多端、理曖昧、難分情、參差迢述、

且自無滿賦體、寔乃偏用開格。又曰、

望日日已晚、懷人人不歸、又曰、

霏霏斂夕霧、赫赫吐晨曦、軒軒多秀氣、

奕奕有光儀。又曰、

視日日將晚、望雲雲漸積、或曰、

釋曰曰く、一句の中の第二字是れ山、第三字亦是れ山、餘句も皆然り、此くの如きの類を名づけて聯綿對と爲す、又曰く、

「嫩荷荷類に似たり、淺河河帶に似たり、初月月眉に似たり」

釋曰曰く、兩の荷、連讀、諸れを上句の中に放く、雙の月、竝に陳ね、之れを下句の腹に言ふ、一文再び讀んで、一字雙び來る、意涉りて言を連ね、茲に坐りて號を生ず、

又曰く、

「煙離れて萬代を離れ、雨絶えて千年を絶つ」

釋曰曰く、情起りて理を端すこゝ多し、曖昧にして情を分ち難し、參差として迢述す、且つ自ら賦體に關すること無し、寔に乃ち偏に開格を用ふ、又曰く、

「日を望むに日已に晚る、人を懷ふに人歸らず」又曰く

「霏々として夕霧を斂む、赫赫として晨曦を吐く、軒々として秀氣多し、奕々として光儀有り」又曰く、

「日を視るに日將に晚れんとす、雲を望むに雲漸く積れり」或曰く、

朝朝夜夜灼灼菁菁赫輝輝汪汪落落
素素蕭蕭穆穆堂堂巍巍訶訶 如此之
類名連綿對。

第五、互成對、互成對者、天與地對、日與月對、麟與鳳對、金與銀對、臺與殿對、樓與樹對、兩字若上下句安、名的名對、若兩字一處用之、是名互成對、言互相成也。詩曰、

天地心間靜、日月眼中明、麟鳳千年貴、金銀一代榮。

釋曰、第一句之中、天地一處、第二句之中、日月一處、第三句之中、麟鳳一處、第四句中、○按之句兩字互金銀一處、不在兩處、例、古寫本無之字、又曰、

玉釵丹翠纏、象榻金銀鏤、青映丹碧度、

朝朝夜夜灼灼菁菁赫輝輝汪汪落落素素蕭蕭穆穆堂堂巍巍訶訶此くの如きの類を連綿對と名づく。

第五、互成對、互成對とは、天と地と對し、日と月と對し、麟と鳳と對し、金と銀と對し、臺と殿と對し、樓と樹と對す、兩字若し上下の句に安くときは、名的對と名づく、若し兩字一處に之れを用ふれば、是れを互成對と名づく、互に相成すを言ふなり、詩に曰く、

「天地は心間に靜かなり、日月は眼中に明かなり、麟鳳は千年に貴し、金銀は一代に榮ゆ」

釋に曰く、第一句の中に、天地一處、第二句の中に、日月一處、第三句の中に、麟鳳一處、第四句の中に、金銀一處、兩處に在らずして之れを用ふ、互成對と名づく、又曰く、

「玉釵丹翠纏ふ、象榻金銀鏤む、青映丹碧度る、紅霧蒼を歷

○舊本賦作「味」、輕霧壓簷飛。
今據古寫本「正」。

釋曰、丹翠自擬金銀、別對各途、布列而互
相成、飛度二言、竝如斯例。

又曰、歲時傷道路、親友念東西。

第六、異類對、異類對者、上句安天、下句安
山、上句安雲、下句安微、上句安鳥、下句安花、
上句安風、下句安樹、如此之類、名爲異類對、
非是的名對、異同比類、故言異類對、但解如
是對、竝是大才、籠羅天地、文章卓秀、才無擁
滯、不問多少、所作成篇、但如此對、益詩有巧。

○舊本巧
旁註二功字。詩曰、

天清白雲外、山峻紫微中、鳥飛隨去影、
花落逐搖風。

釋曰、上句安天、下句安山、天山非敵體、白

て飛ぶ

釋に曰く、丹翠は自ら金銀に擬す、別對各途、布列して
互に相成す、飛度の二言、竝に斯の例の如し、又曰く、

「歲時、道路を傷み、親友、東西を念ふ」

第六、異類對、異類對とは、上句に天を安き、下句に山を
安き、上句に雲を安き、下句に微を安き、上句に鳥を安き、
下句に花を安き、上句に風を安き、下句に樹を安く、此く
の如きの類を、名づけて異類對と爲す、是れ的名對に非
ず、異同比類す、故に異類對と爲す、但、是くの如き對を解
すること、竝に是れ大才なり、天地を籠羅す、文章卓秀な
り、才に擁滯無し、多少を問はず、作る所、篇を成す、但、此
くの如きの對は、益、詩に巧あり、詩に曰く、

「天は清し白雲の外、山は峻し紫微の中、鳥飛んで去影に
隨ひ、花落ちて搖風を逐ふ」

釋に曰く、上句に天を安き、下句に山を安く、天山は敵

雲紫微、亦非敵體、第三句安鳥、第四句安花、鳥花非敵體、去影搖風、亦非敵體、如此之類、名爲異類對。又曰、

風織池間字、蟲穿葉上文。

釋曰、風蟲非類、而附對是同、池葉殊流、而寄巧歸一、或雙聲以酬、疊韻或雙擬而對、廻文、別致、同詞、故云異類。又曰、

鯉躍排荷戲、燕舞拂泥飛、琴上丹花拂、酒側黃鸝度。

釋曰、鳥飛魚躍、琴歌酒唱、事迹既異、至如鳥飛樹動、魚躍水淺、葉潤、水而成文、枝搖、託風而制、語、諺、亦鯉爲對、引酒歌、傍傳、○舊本引酒唱二各相無、故異類題目、空、旁書別字、中起事。又曰、

體に非ず、白雲と紫微と、亦敵體に非ず、第三句に鳥を安き、第四句に花を安く、鳥花は敵體に非ず、去影と搖風と、亦敵體に非ず、此くの如きの類、名づけて異類對と爲す、又曰く、

「風は池間の字を織り、蟲は葉上の文を穿つ」

釋に曰く、風と蟲と類に非ず、而して附對是れ同じ、池と葉と流を殊にして、寄巧一に歸す、或は雙聲以て疊韻に酬ひ、或は雙擬して廻文に對す、致を別にして詞を同じうす、故に異類と云ふ、又曰く、

「鯉躍つて荷を排して戲れ、燕舞ふて泥を拂ふて飛ぶ、琴上に丹花拂ひ、酒側に黃鸝度る」

釋に曰く、鳥飛と魚躍と、琴歌と酒唱と、事迹此に異なり、鳥飛びて樹動き、魚躍りて水淺きが如きに至りては、葉の潤ふは、水に憑りて文を成し、枝の搖くは、風に託して語を制す、赤鯉を諺として對を爲し、酒歌を引きて傳に傍ふ、酒唱の二つ各相無し、故に異類の題目、空中に事を起す、又曰く、

離堂思琴瑟、別路繞山川。

又如以早朝偶故人、非類是也、元氏云、異對者、若來禽去獸、殘月初霞、此來與去、初與殘、其類不同、名爲異對、異對勝於同對。

第七、賦體對、賦體對者、或句首重字、或句首疊韻、或句腹疊韻、或句首雙聲、或句腹雙聲、如此之類、名爲賦體對、似賦之形體、故名賦體對、詩曰、

句首重字

鳥鳥樹驚風、○蓋本鳥、今正、麗麗雲蔽月、

皎皎夜蟬鳴、作鳥、今正、 嚶嚶曉光發、

句腹重字

漢月朝朝暗、胡風夜夜寒、

句尾重字

月蔽雲曠曠、風驚樹裊裊、○詩本曠、今正、

句首疊韻

徘徊四顧望、悵悵獨心愁、

句腹疊韻

君起燕然戍、妾坐逍遙樓、

「離堂に琴瑟を思ひ、別路に山川を繞る」

又早朝を以て故人に偶するが如きは、類に非ざる是れなり、元氏云ふ、異對とは、來禽去獸、殘月初霞の若し、此の來と去と、初と殘と、其の類同じからず名づけて異對と爲す、異對は同對に勝れり。

第七、賦體對、賦體對とけ、或は句首に重字、或は句首に疊韻、或は句腹に疊韻、或は句首に雙聲、或は句腹に雙聲、此くの如きの類を、名づけて賦體對と爲す、賦の形體に似たり、故に賦體對と名づく、詩に曰く、

句首の重字、

鳥々として樹、風に驚き、麗々として雲、

月を蔽ふ、皎々として夜蟬鳴き、嚶々として曙光發す。

句腹の重字、

漢月朝々暗し、胡風夜々寒し。

句尾の重字、

月蔽れて雲曠々たり、風驚いて樹裊々たり、

句首の疊韻、

徘徊して四に顧望す、悵悵して獨心愁す。

句腹の疊韻、

君は燕然の戍を起し、妾は逍遙の樓に坐す。

句尾疊韻 疎雲雨滴瀝、薄霧樹朦朧、

句首雙聲 留連千里賓、獨待一年春、

句腹雙聲 我陟崎嶇嶺、君行曉嶼山、

句尾雙聲 妾意逐行雲、君身入暮門、

釋曰、上句若有重字、雙聲疊韻、下句亦然、
上句偏安、下句不安、即爲犯病也、但依此
對、名爲賦體對、又曰、

團圓月挂嶺、納納露沾衣、頭 花承滴滴

風垂裊裊衣、風 山風晚習習、水浪

夕淫淫、尾

釋曰、有鸞鳴、噲噲、鹿響、呦呦、往往處處、炯
炯之名、澤波、菌萑之狀、摸潮、濟而蒼蔚、寫
蒼菜而參差、既正起重言、亦傍生疊字者、

第八、雙聲對、詩曰、

文鏡秘府論東卷

句尾の疊韻、疎雲に雨滴瀝たり、薄霧に樹朦朧たり。

句首の雙聲、留連す千里の賓、獨り待つ一年の春。

句腹の雙聲、我は陟る崎嶇たる嶺に、君は行く曉嶼たる山に。

句尾の雙聲、妾が意は行雲を逐ひ、君が身は暮門に入る。

釋に曰く、上句に、若し重字雙聲疊韻あれば、下句にも亦然り、上句に偏安して、下句に安からざるを、即ち犯病と爲すなり、但、此の對に依るを、名づけて賦體對と爲す、又曰く、

團々として月、嶺に挂り、納々として露衣を沾す(頭)、花

は滴々たる露を承け、風は裊々たる衣に垂る(腹)、山風

晚に習々たり、水浪夕に淫々たり(尾)。

釋に曰く、鸞鳴いて噲々たり、鹿響呦々たり、往往處處々々、炯炯の名、澤波、菌萑の狀、朝濟を摸して蒼蔚たり、蒼菜を寫して參差たり、既に正しく重言を起して、亦傍に疊字を生ずる者あり。

第八、雙聲對、詩に曰く、

秋露香佳菊、春風馥麗蘭。

釋曰、佳菊雙聲、係之上語之尾、麗蘭疊韻、陳諸下句之末、秋朝非無白露、春日自有清風、氣側音諧、反之不得、好花精酒之徒、妍月奇琴之輩、如此之類、俱曰雙聲。又曰、

屬屬歲陰曉、皎潔寒流清、結交一顧重、然諾百金輕、又曰、
五章紛冉弱、三冬榮陸離、悵望一途阻、參差百慮違。

釋曰、屬屬皎潔、卽是雙聲、得對疊韻、冉弱陸離、卽是知雙聲、自得成對、又曰、

洲渚遞榮映、樹石相因依。

或曰、奇琴精酒、妍月好花、素雪丹燈、翻蜂

「秋露佳菊香し、春風麗蘭馥し、」

九二

釋に曰く、佳菊は雙聲なり、之れを上語の尾に係く、麗蘭は疊韻なり、諸れを下句の末に陳す、秋朝、白露無きに非ず、春日、自ら清風有り、氣の側に音諧ふ、之れを反すに得ず、好花精酒の徒、妍月奇琴の輩、此くの如きの類を、俱に雙聲と曰ふ、又曰く、

「屬屬として歲陰曉け、皎潔として寒流清し、交りを結んで一顧重し、然諾して百金輕し、」又曰く、

「五章紛として冉弱たり、三冬榮として陸離たり、悵望一途阻たり、參差として百慮違ふ、」

釋に曰く、屬屬と皎潔と、卽ち是れ雙聲、疊韻に對することを得たり、冉弱と陸離と、卽ち是れ雙聲自ら對を成すことを得るを知る、又曰く、

「洲渚遞に榮り映じ、樹石相因り依る、」

或ひと曰く、奇琴精酒、妍月好花、素雪丹燈、翻蜂、

度蝶、黃槐、綠柳、意憶、心思、對、德會、賢、見、君
接子、如此之類、名、雙聲對、

第九、疊韻對、 詩曰、

放暢千般意、逍遙一箇心、漱流還枕石、
步月復彈琴、

釋曰、放暢、雙聲、陳之上句之初、逍遙、疊韻、
放諸下言之首、雙道二文、其音自疊、文生、
再字、韻必重來、曠望、徘徊、網繆、眷戀、例同、
於此、何稍煩論、 又曰、

徘徊夜月滿、肅穆曉風清、此時一罇酒、
無片徒自盈、 又曰、

雙律構、丹賦、稜層起、青嶂律作稜層是

筆札云、徘徊、窈窕、眷戀、彷彿、放暢、心襟、逍
遙、意氣、優遊、陵勝、放曠、虛無、醜酌、思惟、須

槐、綠、柳、意、憶、心、思、對、德、會、賢、見、君、接、子、此、く、の、如、き、の、類
を、雙、聲、對、と、名、づ、く、

第九、疊韻對、 詩に曰く、

「千般の意を放暢し、一箇の心を逍遙す、流に漱いで還た
石に枕す、月に歩して復た琴を彈す」

釋に曰く、放暢は雙聲、之れを上句の初めに陳す、逍遙
は疊韻、諸れを下言の首に放く、雙道の二文、其の音自
ら疊す、文、再字を生じ、韻必ず重ねて來る、曠望、徘徊
網繆、眷戀、例、此れに同じ、何に藉りて煩論せん、 又曰
く

徘徊して夜月滿てり、肅穆として曉風清し、此の時一罇
酒、君無くして徒に自ら盈てり、 又曰く

「雙律として丹賦を構へ、稜層として青嶂より起つ、雙律
稜層是れなり」

筆札に云ふ、徘徊、窈窕、眷戀、彷彿、放暢、心襟、逍遙、意氣
優遊、陵勝、放曠、虛無、醜酌、思惟、須臾、此くの如きの類

奥、如此之類、名曰「疊韻對」。

第十廻文對、詩曰、

情親由得意、得意遂情親、
新情終會會、故故亦經新。

釋曰、雙情著於初九、兩親繼於十二、又顯

頭新尾故、還懷上下之故、新列字也、久、施

文已周、廻又更用、重申文義、因以名云、

第十一、意對、詩曰、

歲暮望空房、涼風起坐隅、
寢興日已寒、白露生庭蕪、

又曰、

上堂拜嘉慶、入室問何之、
日暮行探跡、物色桑榆時、

釋曰、歲暮涼風、非是屬對、寢興、白露、罕得

相酬、事意相因、文理無爽、故曰「意對」耳。

名づけて「疊韻對」と曰ふ。

第十、廻文對、詩に曰く、

「情の親しきは意を得るに由る、意を得るは遂に情の親しければなり、新情は終に會ひ會ふ、故に故たるも亦新を経ればなり」(新を経るも亦故に故たればなり、會ひ會ふことは終に情の新しければなり、親き情は遂に意を得、意を得ることは親き情に由る)

釋に曰く、雙情は初と九とに著し、兩親は十と二とに繼ぐ、又、頭新尾故を顯して、還つて上下の故新を懷し字を列ぬると久し、文を施して己に周し、廻りて又更に用ふ、重ねて文義を申ぶ、因りて以て名づくと云ふ。

第十一、意對、詩に曰く、

「歲暮れて空房を望む、涼風坐隅に起る、寢興日已に寒し、白露庭蕪に生ず」又曰く、

「室に上つて嘉慶を拜す、室に入つて何くに之くかと問ふ、日暮れて行探して歸る、物色桑榆の時」

釋に曰く、歲暮と涼風とは、是れ屬對に非ず、寢興と白露とは、相酬ゆるを得ること罕なり、事意相因りて文理爽ふこと無し、故に意對と曰ふのみ。

第十二、平對、平對者、若青山綠水、此平常之對、故曰平對也、他皆效此。

第十三、奇對、奇對者、若馬頰河熊耳山、此馬熊是獸名、頰耳是形名、既非平常、是爲奇對、他皆效此、又如漆沮四塞、漆與四是數名、又兩字各是雙聲對、又如古人名、上句用曾參、下句用陳軫、參與軫者同是二十八宿名、若此者、出奇而取對、故謂之奇對、他皆效此。

第十四、同對、同對者、若大谷廣陵薄雲輕霧、此大與廣、薄與輕、其類是同、故謂之同對、同類對者、雲霧星月花葉風煙霜雪酒醴東西南北青黃赤白丹素朱紫宵夜朝旦山岳江河臺殿宮堂車馬途路。

第十五、字對、或曰、字對者、若桂楫荷戈荷

第十二、平對、平對とは、青山と綠水との若し、此れ平常の對なり、故に平對と曰ふなり、他は皆此れに效ふ。

第十三、奇對、奇對とは、馬頰河と熊耳山との若し、此の馬と熊とは、是れ獸の名なり、頰と耳とは、是れ形の名なり、既に平常に非ず、是れを奇對と爲す、他は皆此れに效ふ、又漆沮と四塞との如き、漆と四とは、是れ數の名なり、又、兩字各、是れ雙聲對なり、又、古人の名の如きは、上句に曾參を用ひ、下句に陳軫を用ひ、參と軫とは、同じく是れ二十八宿の名なり、此くの若きは、奇を出して對を取る、故に之れを奇對と謂ふ、他は皆此れに效ふ。

第十四、同對、同對とは、大谷廣陵薄雲輕霧の若し、此の大と廣と、薄と輕とは、其の類是れ同じき、故に之れを同對と謂ふ、同類對とは、雲霧星月花葉風煙霜雪酒醴東西南北青黃赤白丹素朱紫宵夜朝旦山岳江河臺殿宮堂車馬途路なり。

第十五、字對、或ひと曰く、字對とは、桂楫荷戈を荷ふとい

是負之義、以其字草々、故與桂爲對、不用對、但取字爲對也、或曰、字對者、謂義別字對、是詩曰、山椒架寒霧、○按舊本椒作字、糾、誤、下同、池篠

對、山椒、即山頂也、池篠傍、池竹也、此義別字

又曰、何用金麻敵、終醉石崇家、金麻即石崇家

是○舊本麻旁呼「麻字、又引一本、崇家二字互易、按抄、敵作敵、

又曰、原風振平楚、野雪被長菅、

即菅與楚爲字對、

第十六、聲對、或曰、聲對者、若曉路、秋霜、路是道路、與霜非對、以其與露同聲故、或曰、聲對者、謂字義俱別、聲作對是、詩曰、

形驪初驚路、白簡未含霜、路是途路、聲即與露同、故將以對霜、

ふが若し、荷は是れ負の義、其の字、草の名なるを以て、故に桂と對を爲す、對を用ひずして、但だ字を取りて對と爲すなり、或ひと曰く、字對とは、義は別にして字の對するを謂ふと、是れなり、時に曰く、山椒寒霧を架し、池篠涼霧に韻す、

山椒は即ち山頂なり、池篠は池に傍ふ竹なり、此れ義は別にして字に對するなり、又曰く、

何ぞ金麻の敵なるを用ひん、終に石崇の家に醉はん、（金麻と石崇と即ち是れなり）又曰く、

「原風平楚に振ひ、野雪長菅に被る、」

即ち菅と楚と、字對を爲す。

第十六、聲對、或ひと曰く、聲對とは、曉路と秋霜との若し、路は是れ道路なり、霜と對に非ず、其の露と聲を同じうするを以てのなり、或ハ聲對と曰ふは、字義俱に別にして、聲のみ對を作すを謂ふ、是れなり、時に曰く、

形驪初めて路に驚く、白簡未だ霜を含まず、（路は是れ途

又曰、初蟬韻高柳、密寫桂深松。

寫草屬聲即與飛鳥同、故以對蟬。

第十七、側對崔名、字元氏曰、側對者、若馮翊

地名在龍首、山名在右輔也、龍首、西京也、此為馮字半邊有馬、與

龍為對、翊字半邊有羽、與首為對、此為側對、

又如泉流赤峯、泉字其上有白、與赤為對、凡

一字側耳、即是側對、不必兩字皆須側也、以

前八種切對、時人把筆綴文者多矣、而莫能

識其徑路、于公義藏之於篋笥、不可棄、示於

非才、深、深、秘、秘之人、或曰、字側對者、謂字義

俱別、形體半同、是

詩曰、忘懷接英彥、申勸引桂酒、

英彥與桂酒、即字義全別、然形體即字義

半同、是、又曰、

○舊本七
正作九、今

文鏡秘府論東卷

路なり、聲は即ち露と同じ、故に將以て露に對す、又曰く、
「初蟬高柳に韻し、密寫深松に挂る」
寫は草の屬、聲は即ち飛鳥と同じ、故に以て蟬に對す。

第十七、側對崔は、字側對と名づく元氏曰く、側對と

は馮翊地名にして、右輔に在り、龍首山の名、西京に

在りとの若し、此れ馮の字の半邊に馬あるが爲めに、龍

と對を爲す、翊の字の半邊に羽あり、首と對を爲す、此れ

を側對と爲す、又、泉流と赤峯との如し、泉の字の其の上

に白あり、赤と對を爲す、凡そ一字の側のみ、即ち是れ側

對、必ずしも兩字皆側を須ひざるなり、以前の八種の切

對、時人筆を把りて文を綴る者多し、而かも能く其の徑

路を識る莫し、于公の義、之れを篋笥に藏めて、非才に乘

示すべからず、之を人に深々秘々せよ、或ひと曰く、字側

對とは、字義俱に別にして、形體半ば同じきを謂ふと、是

れなり、詩に曰く、
「懷ひを忘れて英彥に接し、勸めを甲へて桂酒を引く」
英彥と桂酒と、即ち字義全く別なり、然れども、形體即

ち字義半ば同じ、是れなり、又曰く、

玉雞清五洛、瑞雉映三秦、玉雞與瑞雉是又曰、

桓山分羽翼、荆樹折枝條。

桓山與荆樹是、如此之類、名字側對。

第十八、鄰近對、詩曰、

死生今忽異、歡娛竟不同。又曰、

寒雲輕重色、秋水去來波。

上是義、下是正名、此也、對大體似的名、的

名窄、鄰近寬。

第十九、交絡對、賦詩曰、出入三代、五有

餘載、或曰、此中餘屬於載、不偶、出入、古人

但四字四義、皆成對、故偏舉以例焉。

第二十、當句對、賦詩曰、薰歇燼滅、光沈

響絕。

第二十一、含境對、詩曰、悠遠長懷、寂寥無

「玉雞五洛に清く、瑞雉三秦に映す」玉雞と瑞雉と、是れなり、又曰く、「桓山に羽翼を分つ、荆樹に枝條を折る」

桓山と荆樹と、是れなり、此くの如きの類を、字側對と名づく。

第十八、鄰近對、詩に曰く、

「死生今忽ち異なり、歡娛竟に同じからず」又曰く、

「寒雲輕重の色、私水去來の波」

上は是れ義、下は是れ正名、此れなり、大體に對して的名に似たり、的名は窄く、鄰近は寬し。

第十九、交絡對、詩を賦して曰く、三代に出入する、五有餘載、或ひと曰く、此の中に、餘は載に屬す、出入に偶せず、古人但だ四字四義、皆對を成す、故に偏舉して以て例とす。

第二十、當句對、詩を賦して曰く、薰歇き燼滅え、光沈み響絶ゆ。

第二十一、含境對、詩に曰く、悠遠として長く懷ふ、寂寥

響絶ゆ。

第二十一、含境對、詩に曰く、悠遠として長く懷ふ、寂寥

變。

第廿二、背體對。

詩曰、進德智所拙、退耕力不任。

第二十三、偏對。

詩曰、蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌、謂非二語對也

又曰、古墓犁爲田、松柏摧爲薪。

又曰、日光太清、列宿曜紫微。

又曰、亭阜木葉下、隴首秋雲飛。

全其文彩、不求至切、得非作者變通之意乎、若謂今人不然、沈給事詩、亦有其例。

詩曰、春預過靈沼、雲旗出鳳城。

此例多矣、但天然語、今雖虛、亦對實、如古

人以芙蓉偶楊柳、亦名聲類對。

第二十四、雙虛實對。

として變無し」

第二十二、背體對、詩に曰く、

「徳を進むるは智の拙なる所、耕に退くは力任へざるなり」

第二十三、偏對、詩に曰く、

「蕭々として馬鳴く、悠悠たる旆旌（偏對に非ざるを謂ふなり）又曰く

「古墓犁かれて田と爲る、松柏摧かれて薪と爲る、又曰く、

「日光太清に光り、列宿紫微に曜く、又曰く、

「亭阜に木葉下り、隴首に秋雲飛ぶ」

其の文彩を全くして、至切を求めず、作者變通の意に非ざるを得んや、若し今人然らずと謂はば、沈給事の詩にも、亦其の例あり、詩に曰く、

「春預靈沼を過ぐ、雲旗鳳城より出づ」

此の例多し、但だ天然の語、今虚と雖も亦實に對す、古人の芙蓉を以て楊柳に偶するが如き、亦た聲類對と名づく。

第二十四、雙虛實對、詩に曰く、

○舊本春
旁書二卷
字

○舊本廣
作し廣、今
從し抄、

詩曰、故人雲雨散、空山來往疎。

此對常句、義了不同互成。○舊本帶旁書互字。

第二十五、假對。

詩曰、不獻胸中策、空歸海上山。

或有人以推薦偶、拂衣之類、是也。

第二十六、切側對。切側對者、謂精異處同、

是。詩曰、

浮鐘宵響徹、飛鏡曉光斜。

浮鐘是鐘、飛鏡是月、謂理別文同、是。

第二十七、雙聲側對。雙聲側對者、謂字義

別雙聲來對、是。

詩曰、花明金谷樹、葉映首山薇。

金谷與首山、字義別、同雙聲側對。

又曰、翠微分雉堞。○舊本、堞作、雉、堞、丹氣隱。

「故人雲雨散、空山來往疎なり」

此の對は常句なり、義了に互成に同じからず。

第二十五、假對、詩に曰く、

「胸中の策を獻せず、空しく海上の山に歸る、

或は人ありて、推薦を以て拂衣に偶するの類、是れなり。」

第二十六、切側對、切側對とは、精は異に、粗は同じきを

謂ふ、是れなり、詩に曰く、

「浮鐘、宵響徹す、飛鏡、曉光斜なり」

浮鐘は是れ鐘、飛鏡は是れ月、理別にして文同じきを謂ふ、是れなり。

第二十七、雙聲側對、雙聲側對とは、字義別にして、雙聲

來り對するを謂ふ、是れなり、詩に曰く、

「花は金谷の樹に明か、葉は首山の薇に映す、

金谷と首山と、字義別にして、同じく雙聲側對なり、又曰く、

「翠微雉堞を分ち、丹氣蒼楹に隱る」

簷楹。○舊本聲旁書陰字。

堆堞對簷楹亦雙聲側對。

第二十八、疊韻側對。疊韻側對者、謂字義

別聲同名疊韻對是。○舊本既同字、聲下細書同聲二字、今補之。

詩曰、平生披輔帳、窈窕步花庭。平生窈窕是

窈窕

又曰、自得優遊趣、寧知聖政隆。

優遊與聖政義非正對、字聲勢疊韻。

或曰、夫爲文章詩賦、皆須屬對、不得令有跛

跛者、跛者謂前句雙聲、後句直語、或復空談、

如此之例名爲跛、跛者謂前句物色、後句人

名、或前句語風空、後句山水、如此之例名跛

何者、風與空、則無形而不見、山水則有蹤而

可尋、以有形對無色、如此之例、名爲跛、或云、

○抄、無、
○字、

堆堞の簷楹に對するも、亦雙聲側對なり。

第二十八、疊韻側對。疊韻側對とは、字義別にして、聲同

じきを謂つて、疊韻對と名づく、是れなり、詩に曰く、

「平生輔帳を披ぎ、窈窕として花庭に歩す」(平生と窈窕とは是れなり) 又曰く

「自ら優遊の趣を得たり、寧ろ聖政の隆なるを知らん」

優遊と聖政と、義は正對に非ず、字の聲勢疊韻なり。

或ひと曰く、夫れ文章詩賦を爲る、皆屬對を須ふ、跛跛の者有らしむるを得ず、跛とは、前句は雙聲にして、後句は直語なるか、或は復た空談なるかを謂ふ、此くの如きの例を、名づけて跛と爲す、跛とは、前句は物色にして、後句は人名なるか、或は前句は風空を語り、後句は山水なるかを謂ふ、此くの如きの例を、跛と名づく、何んとなれば、風と空とは、則ち形無くして見えず、山水は則ち蹤ありて尋ゆべし、有形を以て無色に對す、此くの如きの例を、

景風心色等、可以對虛、亦可以對實、今江東
 文人作詩、頭尾多有不對、如、俠客倦艱辛、夜
 出、少平津、馬色迷關吏、雞鳴起、戎人露鮮花
 劍影、月照寶刀新、問我將何去、北海就孫賓、

此即首尾不對之詩、其有故不對者、若之、

第二十九、總不對

如、平生少年日、分手易前期、及爾同衰暮、非
 復別離時、勿言一罇酒、明日難共持、夢中不
 識路、何以慰相思、

此總不對之詩、如此作者、最爲佳妙、夫屬
 對法、非眞、風花竹木、用事而已、若雙聲即
 雙聲對、疊韻即疊韻對、

○筆札七種言句例 ○按、七言作二十
 一、抄亦此、七、

一曰、一言句例、二曰、二言句例、三曰、三

名づけて、眇と爲す、或ひと云ふ、景風心色等は、以て虛に
 對す可し、亦以て實に對す可し、今江東の文人詩を作る
 に、頭尾多く對せざること有り、俠客艱辛に倦み、夜、少平
 津を出づ、馬色陶吏迷ひ、雞鳴いて戎人を祀す、露は鮮か
 なり、花劍の影、月は照して、寶刀新なり、我れに問ふ將に
 何くにか去らんとす、北海孫賓に就く、の如し、

此れ即ち首尾不對の詩、其の故らに對せざる者あり、
 之くの若し、

第二十九、總不對

「平生少年の日、手を分つて前期を易ふ、爾と同じく衰暮
 復た別離の時に非ず、言ふこと勿れ一罇酒、明日まで共
 に持し難し、夢中路を識らず、何を以てか相思を慰めん」
 の如し、

此れ總て不對の時、此くの如きの作は、最も佳妙と爲
 す、夫れ屬對の法は、眞に非ず、風花竹木、事を用ふるの
 み、若し雙聲は即ち雙聲と對す、疊韻は即ち疊韻と對す、

○筆札七種言句例、

一に曰く、一言句例、二に曰く、二言句例、三に曰く、三言句

言句例、四曰、四言句例、五曰、五言句例、

六曰、六言句例、七曰、七言句例、○按、此下當有三八日

九日、十日、十一日、十四日、十五日、

一曰、一言句例、一言句者、天地陰陽、江河、

日月、是也。

二曰、二言句例、二言句者、天高、地下、露結

雲收、是也。又、翼乎、沛乎、等是。

三曰、三言句例、三言句者、斟清酒、拍青琴、

尋往信、訪來音、是也、又云、春可樂、秋

可哀。

四曰、四言句例、四言句者、朝燃獸炭、夜乘

魚燈、宋獵已歌、秦姬欲笑、是也。○按、歌、疑獸、

五曰、五言句例、五言句者、霧開山有媚、雲

閉日無光、燥塵籠野白、寒樹染村黃、是也。

例、四に曰く、四言句例、五に曰く、五言句例、六に曰く、六

言句例、七に曰く、七言句例、

一に曰く、一言句例、一言句とは、天地陰陽、江河日月、
是れなり。

二に曰く、二言句例、二言句とは、天高し、地下し、露結ぶ、
雲收る、是れなり(又、翼乎、沛乎、等、是れなり)

三に曰く、三言句例、三言句とは、清酒を斟む、青琴を拍
す、往信を尋ね、來者を訪ふ、是れなり、又云ふ、春樂む
可し、秋哀む可し。

四に曰く、四言句例、四言句とは、朝に獸炭を燃し、夜は
魚燈を乗る、宋獵已に歌ひ、秦姬笑はんと欲す、是なり。

五に曰く、五言句例、五言句とは、霧開いて山に媚有り、
雲閉ちて日に光無し、燥塵野を籠めて白し、寒樹村を
染めて黄なり、是れなり。

六曰、六言句例、六言句者、訝桃花之似頰、笑柳葉之如眉、拔笙簧而數煖、促箏柱而勅移。

七曰、七言句例、七言句者、素琴奏乎五三拍、綠酒傾乎一兩卮、忘言則貴於得趣、不樂則更待何爲。

八曰、八言句例、八言句者、吾夫嫁我兮天一方、遠託異國兮烏孫王。

九曰、九言句例、九言句者、嗟余薄德從役至他鄉、筋力疲頓無意入長楊。

十曰、十言句例。

十一曰、十一言句例、文賦云、沈辭拂悅、若遊魚銜鈎而出、重淵之深、浮藻聯翩、猶翔鳥纓織而墜、層雲之峻、下句皆十一字。

六に曰く、六言句例、六言句とは、桃花の頰に似たるを訝り、柳葉の眉の如くなるを笑ふ、笙簧を抜いて數、煖む、箏柱を促して勅めて移る。

七に曰く、七言句例、七言句とは、素琴奏して五三拍す、綠酒傾く一兩卮、言を忘れれば則ち趣を得るよりも貴し、樂まざれば則ち更に待つこと何をか爲ん。

八に曰く、八言句例、八言句とは、吾が夫我を嫁す天の一方、遠く異國に託す烏孫王。

九に曰く、九言句例、九言句とは、嗟、余れ薄徳にして役に從ふて他郷に至る、筋力疲頓して長楊に入るに意無し。

十に曰く、十言句例。

十一に曰く、十一言句例、文賦に云ふ、沈辭拂悅たり、遊魚の鈎を銜みて重淵の深より出づるが若し、浮藻聯翩として、猶ほ翔鳥の纓に纏りて層雲の峻より墜つるが

是也。

文館秘府論東卷

ことし下句は皆十一字、是れなり。

7

文鏡祕府論 東 終